昭和45年度　年報

図書館活動報告

調布市立図書館

昭和45年度の年次報告に当つて

調布市立図書館長　萩原祥三

調布市立図書館が発足して5年，分館網の整備も半途に達した。私はこの試みも日本の図書館における一つの実験であると思つている。この間の経過をとりまとめ，やや日本の図書館の現状を省みながら報告書を作成した。

執筆は館長が当つた。

昭和４５年度・調布市立図書館の活動報告

――――昭和４５年度年報――――

１９４６・９・１　調布市立図書館

1　はしがき－我が国の図書館の現状

調布市立図書館が、はじめて調布市に姿を現わした昭和４１年６月から４ヶ年を閲した。調布市が市政を布いたのが昭和３０年であるから、市政が敷かれてから図書館が市民の前に現われるのに、十年余の歳月がたつたことになる。少し資料は古いが、昭和４４年度（１９６９年）４月１日現在の市町村立図書館設置状況をみてみると、市の設置率全国平均６７.２％（最高は岩手、石川、香川の１００％、最低は滋賀の１６.７％）、町における設置率１０.８％（最高は富山の９４.２％）、次は石川の５０％、山口の４４.２％、鹿児島の３０.４％、最低は福岡の1.4％）、村の設置率に至つては、驚く勿れ、僅かに2.3％（このうち石川の２８.６％、山口の２２.２％は注目に値する）で、設置県は１４県、あとの３３県は全く図書館がないという事実に直面する。（日本の図書館１９６９年版による）。群馬県安中に湯浅治郎が図書館、便覧舎を設立して、一般に開放したのは明治５年である。しかし今日、安中には市立図書館は存在していない。

東京都下三多摩地方についてみれば、昭和４６年１月１日現在、２３市を数えるうち、市立図書館の存在しているのは、僅か７市にすぎない。その設置率は３０％に満たない状態である。このような事実を直視する時、図書館とは何の為に、誰の為に存在するのか、という厳しい疑問に突き当らざるをえない。尚昭和44年度の全国の図書館設置の状況でわかるように図書館の設置率は市部に高く、郡部、特に村に至つては殆んど存在していない。ここに図書館の設置が、人口密度の高い都市を中心として設置されてきた歴史をみることが出来るが、同時に日本の文化が都市中心の放射型に発展し、同時にその背後には、欧化という輸入文化型＝後進型の文化形態をとつてきた近代化の過程にも突き当る。日本の文化形成は、古代から輸入、同化をたどつて来たのであるが、都市は近代的産業立地の中心だけでなく、文化の集中と媒介機能をも担つてきたことが、図書館の発達の仕方、その存在様式をも規制したと考えられる。

しかし、これは当然綿密な論証を要することであるから、俄かには論断し得ないが、市部、町部、村部を通じて、図書館の設置率の高さ、即ち図書館の発達が、必ずしも東京、大阪、京都などという大都会をなす地区でなく、秋田、石川、山口のような寧ろ辺境の地方において高い事実に注目すべきであり、それなりの地方文化の発達、先覚的指導者の在存、文化に

対する地方住民の意識の高さなどと結びつく要因をもつているのかどうか、大いに興味を魅かれる事実であると共に、もしそのような要因、因果関係があるとすれば、探求に値すると共に、将来の日本の文化のあり方に対しても示唆を与えるものであろう。安中が、湯浅治郎の如き秀れた先覚を擁し乍ら、その後図書館の発達については断ち切られてしまつていることは、図書館を含めて、市民というより庶民といつた方が適切であり、柳田国男の如く常民という方がより正しいのかも知れないが、このような常民といわれる、生産に直接従う普通の人間たちが、文化のトレーガー（担い手）として、社会的な層を形成しえなかつたからであろうか。嘗て明治１０年代の自由民権運動が、地方豪農層をトレーガーとして見出したように、常民の中における文化思想が結実するための民衆層の形成を欠如したことが、今日の如き文化の秀れた媒体としての図書館の存在の欠如、その中央集権化傾向を生んだといえるのかも知れない。またその中央指向の輸入文化型が、地方自治を阻害した如く、図書館における地方分散化と土着化の発生とをさまたげ、地方文化の衰微に連つていつたとも考えられる。ともあれ、これだけの簡単な資料から、このような大胆な構図を抽き出すことは誤りが多いであろうが、この問題は、たんに過去の日本文化の形成過程に演じた図書館の役割（実はその役割は極めて微弱であり、寧ろ図書館が常民の知的日常活動の媒体たりえなかつた過程でもある）の歴史的分析の問題に止まらず、いま我国の直面している変革期における教育、文化の将来にかかわりをもつ問題といえるであろう。

東京都下が、昭和４５年の現在において図書館の設置率が著しく低いのは、他の県とその事情を異にし、近年の東京における人口集中による都市化現象によつて、急激に、新市が誕生したからである。その型は在来の郡部型に属するといえよう。しかし、従来の郡部型と異なる点は、住民が主として都市通勤者などや工場労働者などの層から成つており、都市問題の範疇に入る内容であつて、農村型の形態ではない。従つて、知的需要は農村型と全くちがう強さをもつており、その住居形式も集団住宅形成による密集住居形式も多く、図書館問題も全く新らしい局面をもつている。しかし、この現象は、それなりの解決方法をもつべきであり、既に述べたように、文化のナショナルな観点からする農村図書館の設置の問題や、都市と農村との文化的断層の存在や、農村における知的生産の媒体としての図書館問題設置の重要性は、目下解決を要すべき問題であることは、いささかも変りはない。

調布市における図書館活動は、都市近郊における人口急増に伴つて、急速に形成された市域における図書館活動のモデルを実験的に遂行するという意図によつて行われてきた。その歴史的な分析をするには、まだ年月の不足を感ずるが、既に分館網形成プランの半途に達し、昭和４５年度現在において開設又は開設を予定されている図書館は、中央館（現実には規模が小さすぎてその機能は果しえないが）と分館４を数えている。以下、多少分析を加えつつ現代図書館にアプローチしてきた調布図書館の歩みを述べてみよう。

2. 現代図書館の社会的任務

図書館は、その長い歴史を経て、とくにヨーロッパ大陸においては、すでに見るとおり膨大な資料を蓄積してきた。１９世紀の終りごろ、とくに２０世紀にはいつてからは、かつて図書館がその戸をなかば閉ざしていたころに、文芸擁護者たちには寛大さを、そして革命家たちには、むろんそれを完全に万人に対して開放することを吹きこんだ思想が、ここに勝利を占めることになつた。≪一般公衆へのサービス≫という思想 ——— それは今日では≪マスコミュニケーション≫という観念、さらにはその論理的な結論として「あらゆる文献資料の選択と開発」という考えに発展しているが ——— これは、１９世紀を支配していた図書館、博物館における≪保存≫第一主義とは対立的なものである。（文庫クセジュ、図書館、Ｐ７１）

著者は現代図書館についてこのように述べている。

また「民主思想の発達は、内容の充実した公共図書館と、従来の伝統的な制約を脱し、必要とあらば戦闘的になることも恐れず、文化や教育面での責任を自覚した図書館員を要求するようになつた。

このようにして二つの世界大戦のあいだに、≪読者へのサービス≫、さらには≪読者の前≫に出かけてゆくという考え方がひろまつていつた。」

つづいてメルヴィル・デューイの言葉として『能力のある、まじめな図書館員が、公共社会のために果たす仕事ほど重要で名誉なものはないと、私たちは評価する。かつては図書館は博物館に酷似し、図書館員は書庫のねずみにすぎず、またここを訪れる人口は、古い本や写本に好奇の目をそそぐだけといつたような時代があつた。今や図書館は、広い意味での民衆の学校であり、図書館員は教育者である時代がやつてきた。』（図書館、Ｐ７２～７３）と著者たち、アンドレ・マソン及びポール・サルヴァンは述べている。

長々と引用したのは、小林宏氏訳の小著ではあるがクセジュのこの「図書館」という本は、現代図書館について適切にして要を尽した記述をしているからである。フランス人らしい書き方をされた名著から借用する方がわかり易く、かつ説得力をもつであろう。

この記述のように、現代図書館は、資料の保存所としての機能を追放してしまつたわけではないが、寧ろその活動面を、一般公衆への差別なきサービスにおいているのであり、開放的な知的伝達機能を充分に果すことが求められている。ここにはマスコミュニケーションという記述がされているが、我が国の場合の用語法によるマスコミュニケーションとはちがつて、多少狭く限定して考えた方が適切であろう。何故なら我が国の場合、マスコミは情報の量的な面と媒体機能の面の拡がりが強く意識されて、テレビなどに代表される機能の量的な把握が先で、質が軽視されがちであるからである。我が国の場合、マスコミは情報伝達の量的機能が強く、図書館の場合には、公開性は高くても質的な深まりを求める点では、寧ろミニコミュニケーションのセンターとすら考えうる。

また図書館の機能を静態的・固定的に捉えることなく動態的に捉えている点は、「≪読者

の前≫に出かけてゆく」という言葉によく表現されている。私たちが実践活動の中で、「市民の要求のあるところにはどこでも図書館活動の存在」をと考え、また後に述べるように、「買物籠を下げていける図書館網の整備を」と、そのプランの基礎にすえているのはこのためである。館内のサービスに止まらず、館外活動と館内活動との弁証法的統一という立場をとつているのも、≪読者へのサービス≫を考え、「すべての市民に平等に文化を」という考え方から発している。また更に重大な指摘は、図書館の社会的機能にふれてのべられている「今や図書館は、広い意味での民衆の学校であり」という言葉である。教育といえば、学校教育だけを考える、明治近代化以降の我国における学校教育万能主義の伝統思想の枠には収まらない、広い意味の真の教育の考え方が述べられている。教育とは正しく本質的にはSelf-Educationingであり、文字通りeducateする ——— 能力を引き出す、即ち能力の開発を意味する。この限り、図書館は社会の学校であることは当然すぎる規定であろう。また更に重要な指摘は、「図書館員は教育者である時代がやつてきた」という図書館員に対する考え方である。恐らく現在の日本の図書館界の現状、その伝統的な考え方からすれば、このような考えは異端視されるであろう。それは、時代の推移に眼をつぶり、巨大な社会の変化に背いた考え方であろう。教育ということを、ユネスコが提唱しているように広く考え、「生涯教育」という現代社会の実態をふまえてみれば、ここでフランスの著者が述べている言葉は、極めて当然といえるのである。教育というと、何かを誰かに教えようというような考え方をしている限り、この著者の考えは理解できない。私たちは、正に我々が目指し実践を重ねてきている図書館活動の方向にこの著者と同じ方向を見出す。

3. 図書館プラン

図書館プランの作成は、図書館サービスの出発点をなすものである。都市計画が一定のマスタープランに基いて、各要素の立地を決定しなければならないように、図書館のマスタープランは、市の全域をサービス対象とするマクロの把握の中から、綿密な調査によつて、全市域における図書館活動を計画した見取図をもたなくてはならない。しかし、図書館活動が全然行なわれていない場合には、他の資料を蒐集援用しながら、一定の分析に基いて、まず基本的な骨格を作らなければならない。

調布市立図書館が業務を開始したのは昭和４１年６月であるが、将来の調布市における奉仕計画を目標に第１次の活動プランを、昭和４２年８月に策定した。

調布市図書館活動プラン（第一次案）

昭和４２年８月２４日

1. 図書館計画策定の目的

図書館の地域活動は、市民の文化性を高める基本的な活動として、現代の都市づくりには欠かせない重要な要素である。

図書館活動のもつ汎市民性は、市民の税金で賄われる行政活動のうちでは、平等性、一般性が高く、市民へのサービスの効率が秀れている。

（註）税金によつて賄われる行政活動のうち、反対給付として、図書館利用は、市民の利用の自由意志によるので、すべての市民に平等であり、かつ親しみ易い立場がえられる筈である。但し、この条件を満しうるよう施設を設け、サービスの充実を計らなければならない。

図書館活動は、この意味で市の文化行政活動のバロメーターの役割を果すものであり、行政組織や行政活動の近代性のシンボルでもあると考えうる。

現代社会の増々増大する複雑さに対応する市民の自己教育の場としての図書館の役割は高まる一方であり、サービスのたちおくれは指摘するまでもない。

図書館活動のひろがりは無限であり、図書館サービスの範囲も限りがない。

限られた予算と乏しい人員で、際限のない活動に対処するためには、活動効率に充分配慮すると共に、仕事の計画化をおしすすめてゆかなければならない。

このために、これから将来に亘つての図書館活動を年次計画のなかに織りこみ、計画的に充実をはかつてゆく必要がある。

2. 図書館計画の必要性

我が国においては、図書館活動は非常にたちおくれている。

図書館利用の慣習が確立していなかつたこと、図書館の社会性に対する認識が誤っていたこと、図書館の活動が不活発であったこと、これらの結果としての図書館人の社会的地位の低かったこと、国や自治体の図書館活動に対する認識の乏しいこと、国民の所得水準の低いことなど種々な理由から、現状において未だ図書館は、市民の間に社会的に必須な存在として認められていない。

この現状を打破して、図書館活動を市民の日常的必要物、都市の文化センターにまで昂めることが、当面の重要な活動目標となっている。

従来の図書館は、資料の貯蔵所として考えられ、有機的な組織によるところのダイナミックな、文化活動の中心であるという認識が欠けていた。

図書館活動のあり方をきめるのは、職員であり、職員の図書館活動に対する認識のあり方教養、意欲、職業観を含めた人的要素（ヒューマン・ファクター）こそ、活動の鍵である。

図書館の資料やブック・モービルなどは、教養伝達の手段であり、この手段を媒介とする館員の生きた活動の中にこそ、ダイナミックな図書館活動の展望がある。

図書館計画の作成は、市の全域を対象とするところの現在から将来に亘る図書館活動の見取図であり、指針となるものである。

これは、その実現を内に期待しながら、現状の業務にとりくむ館員に希望を与える計画書である。

図書館プランのないところには発展がなく、計画的なサービスはありえない。

図書館プランは、市全域に、市民すべてに平等に、望ましい図書館の活動を形成してゆく骨格となるものである。

3. 調布市における図書館プラン

調布市における図書館プランは、現調布市立中央図書館が設立されるに当って、調布市立中央図書館が果すべき図書館活動の役割を位置づけるため、一応作成された。

現在、我が国の図書館界においては、図書館活動に対する一般的認識の昂まり、公立図書館の活動のあり方について、専門委員会の研究によって、「望ましい基準」「最低基準」などの各種基準が設定されている。また「小図書館運営研究委員会報告」「中小都市における公共図書館の運営」などの報告書が作られている。

これらは、何れも我が国の図書館活動に目標を与えるべき指針として策定され、図書館活動を、現代社会に欠くべからざるものとして位置づけるべく、勧告されているものである。

調布市は、昭和３０年に市制を施行以来、年々膨張をつづけて、今尚発展途上にある近郊都市である。調布市の性格は、東京都のベッドタウンと称せられている如く、その住民の多くの部分は、都市通勤者で占められている。

調布市政の政策目標として、「健康住宅都市づくり」がかかげられているが、まだ本格的な都市計画は発表されていない。蓋し、我が国における都市化現象は、目下巨大な、統制制なエネルギーの奔流となつて、巨大な東京、大阪などの都市の周辺に、多くの衛星的住宅都市を無計画に作りつつある。

これを主導しつつあるものが、何であるかは今は問わないとして、住民の福祉を実現することを、主要な政策課題としている。地方公共団体にとっては、極めて限定された手段しか与えられていない条件の下で、都市計画にとりくむことは、多くの困難に直面せざるをえない。他方、都市化に対応するためには、社会的にも、政治的、経済的な面からも、現状の市町村の行政単位は余りにも狭隘にすぎるという批判があり、都市化現象は、当然広域行政を要求することを考えると、現状における計画化は、暫定的たらざるを得ないものであること

も止むを得ない。

我々が、調布市における図書館プランを考える前提として、まず調布市の都市計画が敷かれていなければならない。然し、既に述べた如く、まだ都市計画が発表されていない状態の下では、我々のプランも一応の目安として策定し、将来の調布市の都市計画の中に組みこまれ、位置づけられてゆくことを期待したい。

土地確保が、都市計画の第一要件であるが、先行投資が容易に認められていない現状では、現実の計画施行も、試行錯誤による修正を重ね合わせたものたらざるを得ないであろうが、少しでも、計画そのものを推し進めてゆくことを計らねばならない。

調布市図書館活動プラン

昭和42年8月作成

I　公立（調布市立）図書館の任務

公立図書館は、広く一般市民の自己教育の場として開放され、図書館法第二条の規定する性格を具えねばならない。（註）

（註）　図書館法第二条　この法律において「図書館」とは、図書、記録、その他必要な資料を収集し、整理し保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設で……（以下略）

図書館法第三条は、図書館奉仕の具体的条条として次の8項の内容を明記している。

1. 郷土資料、地方行政資料、美術品、レコード、フイルムの収集にも十分留意して、図書、記録、視聴覚教育の資料、その他必要な資料（以下「図書館資料」という）を収集し、一般公衆の利用に供すること。
2. 図書館資料の分類配列を適切にし、及びその目録を整備すること。
3. 図書館の職員が図書館資料について十分な知識を持ち、その利用のための相談に応ずるようにすること。
4. 他の図書館、国立国会図書館、地方公共団体の議会に附置する図書館及び学校に附属する図書館又は図書室と緊密に連絡し、協力し、図書館資料の相互貸借を行うこと。
5. 分館、閲覧所、配本所等を設置し、及び自動車文庫、貸出文庫の巡回を行うこと。
6. 読書会、研究会、鑑賞会、映写会、資料展示会等を主催し、及びその奨励を行うこと。
7. 時事に関する情報及び参考資料を紹介し、及び提供すること。
8. 学校、博物館、公民館、研究所等と緊密に連絡し、協力すること。

ここに明記された広範な図書館の活動領域は、館外、館内の活動によって、市全域に、図書館サービスをゆき亘らせることを求めている。

調布市立中央図書館が設立されるとき、この図書館の地域的性格をどのように考えてプランをたてたかを次に述べる。

I－2　地域図書館として望まれる性格

"図書館というところは、税務署のつぎに敷居の高いところ"といわれ、図書館員の日頃の努力にもかかわらず、読書方法の調査結果、（1960年尼ヶ崎市、大阪市大、栗原助教授）は、公共図書館を利用し本を読む人は、貸本屋利用者よりも少なく最下位となつている。

（統　計）

	自分で買つて	家にあつた	人に借りて	貸本屋	学校の図書館	職場の図書館	巡回文庫	公共図書館
	%	%	%	%	%	%	%	%
書　籍	42.4	22.9	15.4	6.5	4.4	6.0	1.3	0.6
雑　誌	45.3	22.1	17.9	8.4	1.6	2.9	—	0.7

上記統計のように図書館の利用率が低いのは、図書館の立地条件が必ずしもよくなかったこと、日常生活に直結した便利な場所になかったこと、図書館とは単独の建物を意味し、サービスの拠点、又はサービス網の中の点として考えられなかったこと、また、貸出業務を行なっていないか、行なっていても手続きが繁雑であることなど、様々な理由によって、図書館という場所の利用率が低かった。これは既に多くの論者によって、指摘されてきたことである。

このような観点から将来の図書館活動のあり方について、図書館協会の施設委員会が、地域図書館のあり方について、まとめたものを参考に挙げると、次のようになる。

(1) 一方では市民に密接したサービスを行ない、一方では、相当高度なレファレンス、製本、配本作業などを行なうためには、一館のみが孤立していてはできない。

種類＼機能	業務形態	配地地域	業務内容
本館（上級図書館と連絡をとる）	固定 常時	常時密集地域	本館の業務の他に配本ブックモービル集中作業、地域全体のマネジメント、相互貸借
分館	固定 常時	密集地域	貸出し、レファレンスサービス、集会、PR閲覧
停本所（配本所）	固定 定時	常時密集地域 定時 〃	借出し、レファレンス中継、PR（閲覧なし）
ブックモービル	移動 定時・臨時	分散地域	全上

上のような拠点（サービス ポイント、分館、停本所など）が合理的に組合わされた総体を、1単位として、地域図書館という。図書館の地域計画が何よりも大切である。1単位の地域は人口20万ぐらいがふさわしい。

(2) 図書館奉仕活動のうち、図書に関しては、従来の館内読書の方法では、よほど閑な人でない限り利用することができない。従つて書架は開架式とし、館外貸出しを主方針とする。書庫は最小限でよい。

閲覧席は、児童室、参考図書室、新刊、雑誌用のほか、若干の席があればよい。ただし児童の閲覧席は相当数必要である。

(3) 地域図書館の配置計画サービスが地域の全住民にゆきわたるように施設し、機動力を具えると同時に次の諸点に注意する。

i） 住民の利用圏内にあること、家庭又は職場等から徒歩20分圏内、半径約1.5 km

以内

ii） 住民の日常活動線上にあること。例えば、家庭から買物、通勤共に駅の方にゆくのに、図書館が駅の反対側にあつたのでは利用されにくい。

従つて計画に際しては、下記の資料を検討する必要がある。

人口分布について　昼、夜間人口、人口密度

生活動線について　公共施設の位置、ショッピングセンターの位置、事務所の位置、交通状態

(4) 規模については、利用率が高くなつた場合、人口1人当たり1冊の蔵書が必要と考えられる。この案は、市民の図書館利用の重点を貸出活動に置き、市民の間に平等の利用率を斎らすための方法として考えられたものである。またこの活動方法が図書館利用の効率を最もよく昂めうるという前提がある。この場合、市民が読書又は図書資料の利用を積極的に、自発的に行なうものであるということが、これまた予定されている。

我国では、自発的な読書や読書習慣がまだ確立されていず、未読者層もかなりある現状では、積極的な読書開発の仕事も併行しなければならない。また施設利用が、学生、生徒の勉強の場として開放されなければならない現状では、これも図書館利用上考えなければならないし、更に一般市民の生活水準、住居環境状態、読書に対する態度なども充分考慮に入れて、計画をたてねばならない。

Ⅱ 調布の与えられた条件

調布市は市政を昭和30年に施行以来、社会教育施設としては公民館があるだけであつたが、最近において、図書館、児童会館、婦人会館の設立の画期的な発論があり、昭和40年度において、児童、婦人会館、昭和41年度においては、図書館の開設を行なうという大きな前進があつた。

然しながら、財政面からする制約、及びこの種の公共施設の建設の基本的な条件である用地の確保に問題があつた。

図書館の建設用地としては、公民館南側の敷地177坪が予定された。

図書館用地としては、極めて限られた狭い敷地であり、ここを敷地とする限り、その規模は大きく制限されざるを得ないが、現状では、まず図書館活動をスタートさせることが急務であつた。

然しながら、建物は一たん建設され固定されれば、逆に将来に亘つては、活動をその能力の範囲内に限定する傾向がある。そこで、将来計画を樹立して、建設される館の機能を明確にし、全体計画の中に位置づける必要がある。図書館活動は、開始時点において、明確な将来の展望の中で、現状の活動を評価し、調整し、発展性をつかんでゆかなければならない。

このような構想の下に、当面与えられた調布市の諸条件をあげれば以下の如くである。（註）

イ） 総人口　４０年１月現在　１０４,９９１人

世帯数　〃　２７,８５９世帯

ロ） 人口増加数（調布市人口増加率推定値による）

４２年	１３５,７２７人	４７年	１８２,６５０人
４３	１４７,５１４	４８	１９１,４３４
４４	１５６,２９８	４９	２００,２１８
４５	１６５,０８２	５０	２０９,００２
４６	１７３,８６６		

ハ） 各地区毎の発展度合（推定）

ニ） ４０年度地区別人口密度

ホ） ４４年度推定地区別人口密度

ヘ） 年令別人口構成

ト） 産業別（１５才以上）就業者数

（註１） これらは現中央図書館設立プラン当時の資料である。

チ） 交　通　網

ヌ） ショッピングセンターの位置

（註２） 各地区の考え方は、便宜的なものであるが、調布市が京王沿線に細長くのびている立地条件を考え、市街地の構成をこれら沿線の各駅を中心に発展している現状から次のようにA～E（５つ）の地区に分けて考察した。

A地区　仙川地区（仙川、緑ヶ丘、若葉、北野、入間）

B地区　つつじヶ丘地区（金子、柴崎、大町）

C地区　深大寺地区（深大寺、佐須）

D地区　国領地区（国領、上ヶ給、上布田、下布田）

E地区　西調布地区（上石原、小島、下石原、飛田給）

各地区将来人口の推定（比率）

	昭和３２年	３６年	４０年	４４年	４８年
A 地区	１００	１３６	２７９	５７１	１,１６９
B 〃	１００	１４４	２２７	３５８	５６５
C 〃	１００	１５９	２７０	４５９	７８０
D 〃	１００	１３２	１６３	２０２	２５１
E 〃	１００	１４１	１９７	２７６	５９６

	面　積	昭和４０年度 人口密度	昭和４４年度 人口密度
A 地区	3.07 km²	6.080	12.425
B 〃	2.37	10.490	10.443
C 〃	4.82	3.110	5.280
D 〃	4.57	5.320	6.620
E 〃	6.96	4.675	6.560

この資料によると、人口密度は、現在調布駅附近、仙川、緑ヶ丘が高いが、将来（推定対象となつた４４年度）は仙川、柴崎地区が急激に増加してゆく。年令構成は２０～２９才が最も高く、５～１４才が少ない。

（註） これは若夫婦、独身者の勤め人の構成が高いと考えてよいが、都市近郊住宅都市の特長として、比較的年令層の若い小家族の単位が人口のウエイトを占（年令別人口未尾資料）めてゆくことを示している。これ等資料に基いて図書館の配置を一応次のように決定した。

Ⅲ 調布市における図書館の全体配置計画

配置計画の前提として

ⅰ） 住民の身近に散在させて利用度を高めるため、徒歩２０分（１.５km半径）圏内で全地域をカバーする。

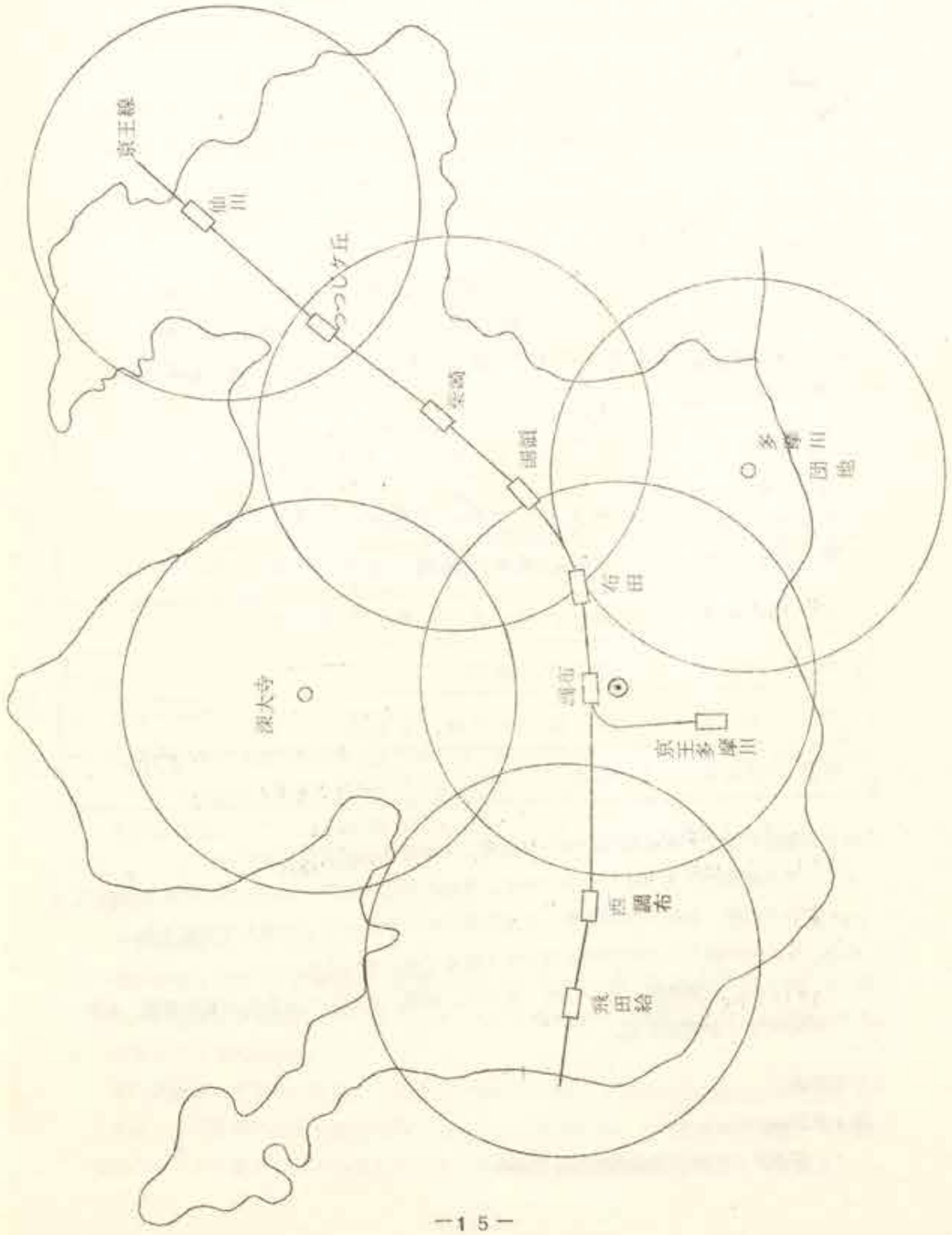
ⅱ） 住民の生活圏の動線上に配置すること。

ⅲ） １人１冊を最終規模とする。

ⅳ） 計画の基礎は昭和４４年の推定人口による。

全体配置計画案

拠点	位置	図書館	主な業務
本館	調布駅前	30,000	図書館本来の業務の外、分館への配本、ブックモービルセンター、全体のマネジメント
ブックモービル	上石原、飛田給、深大寺北町、各団体、事業所及び各停本所	30,000	貸出し
分館又は停本所	1.柴崎附近 2.仙川附近 3.多摩川団地 4.深大寺 5.飛田給 6.その他	100,000	貸出し、レファレンス、閲覧、本館への中継、 〃 〃 〃 〃 〃



全体配置計画案は、敷地の取得条件の可能性と効率性によつて、逐次分館を建設するものとし、各年度の財政のゆとり、都市計画の進行度合、住民の要望、先行投資の可能性などの各種の条件に見合つて、年次計画におりこむ。然し、この建設は、市全体の文化行政の進展度に合わせ、かつ、時には文化推進を高めるための特別な投資要求などによつて、実現を計つてゆく。

例えば、高速道路敷地の獲得などが可能になれば、それをふりあてるなど、また公団との交渉によつて、公団敷地の利用が可能になるなど、そのときの好ましい条件の中で実現を計る。

この配置は、一つの地域計画であるが、大凡その立地を示すものであり、その実現は、具体的な条件を作り出す中で進める。

公団の如く、人口が集中的に密集している地区は地域性としては、独立して考え、地域的なひろがりにこだわらずに、一つの文化集団単位として考えてゆく神代団地、多摩川団地等。

図書館配置の具体的な包括領域区分は次の如くにする。但しこれは、現実の配置にあたつては変更しうるものとする。

図書館名	地域名（町名）
調布館（市立中央図書館）	富士見、小島、上布田、下布田
柴崎館	国領、柴崎、佐須、金子、大町
仙川館	仙川、緑ヶ丘、比野、入間、若葉
深大寺館	深大寺、佐須
飛田給館	飛田給、上石原、下石原
多摩川団地館	柴地

これらの施設の建設は次の諸種の条件を勘案して決定されなければならない。

1） 館の規模は、必らずしも限定せず、地域の奉仕人口数、地域住民の読書利用傾向、敷地の広狭、財政の許容条件、全体計画とのバランスなどを考えて決定する。

2） 市の他の施設との競合性と補完性を考えて決定すること。

例えば、児童会館、婦人会館、集会所、学校、その他の施設との業務提携、利用可能性などを検討する。

（年次計画）

第1次計画

イ．調布市立中央図書館の建設（既設）

ロ．調布市立中央図書館の活動の充実

調布市立中央図書館の活動は、調布市の全体計画を運営する基礎を形造るものであり、物的、人的な資源の補給基地、トレイニング、プランニングの基本的な条件をなすものである。

従つて、第1次の計画においては、調布市立中央図書館の活動のあり方を充実させ将来の発展に具えるべきである。

具体的に事業項目をあげれば次の如くなる。

i） 図書館活動の基礎作り

ii） 人材の養成

iii） ブックモービル活用の準備

iv） 分館建設プランの具体案の作成

v） 館外活動の充実とプランニング

vi） 視聴覚教育の研究

第2次計画

1） ブックモービルの購入と停本所の設置

ブックモービルを購入し、調布市立中央図書館を拠点として、市域全体に対するサービス網を敷く。このために、各所に停本所を設けて、サービス体制を作る。

2） 中央図書館機能の補充

第3次計画

1. 分館の建設

分館建設は、全体計画にあるように各種、各地に建設が予定されるので、全館を一時に作るのではなく、年次計画の中で、逐次建設してゆく。

各分館の建設に伴い、図書館活動の全体のプランをその都度調整してゆく。

第4次計画

イ．新本館の建設

現在の調布市立中央図書館は、規模からみて、分館的な能力しか具備していない。従つて、将来適当な時期に、中央館の充実した機能を果す図書館建設を行なう必要がある。

ロ．児童専門図書館の建設

専門児童館の建設は、児童館の機能とも競合するが、よく将来の児童会館の活動計画を検討し、児童専門の図書館を建設することが必要である。この児童専門館は、学校図書館のセンター館としての機能をもつものであり、将来我国の読書のあり方を考えると、

児童館の建設は、大きな意味をもつてくる。これは図書館界の一般の傾向である。

（付　記）

現在分館建設で最も可能性のあるのは、上ノ原公民館分館を改築することであろう。これを綜合的な機能をもつ文化センターとして計画化することは、比較的可能な条件を具えているものとして、早急に着手しうると考える。

40年度（40.11）町別世帯人口数

町別	世帯数	人口数
飛田給	878	4644人
上石原	1435	4434
下石原	4505	15333
小島	2490	8196
上布田	1639	5326
下布田	2831	9923
国領	2433	8024
上ケ給	295	958
深大寺	3548	11655
佐須	1158	3310
柴崎	1814	3044
金子	2997	8590
入間	2621	7238
若葉	1122	3116
大町	1778	
仙川	1223	3291
緑ケ丘	1686	4541
北野	101	294

産業別の事業所数及び従業者数（38年）

産業別	事業所数	従業者総数	構成比
総数	2198	25170人	100%
鉱業	7	141	0.6
建設業	127	787	3.1
製造業	126	11133	44.3
卸売小売業	1219	4920	19.6
金融保険業	35	380	1.5
不動産業	119	210	0.8
運輸通信業	27	429	1.7
電気，ガス，水道業	2	60	0.2
サービス業	536	7110	28.2

年令別人口

年令	総数	年令	総数
0～4	10,119人	55～59	3,106人
5～9	7,269	60～64	2,465
10～14	6,720	65～69	1,690
15～19	11,635	70～74	1,024
20～24	13,535	75～79	634
25～29	12,345	80～84	287
30～34	11,219	85～89	108
35～39	8,364	90～94	20
40～44	5,793	95以上	2
45～49	4,542	不詳	2
50～54	4,110		

この第一次プランは逐次図書館活動が軌道にのり、図書館による活動の分析が可能になるデーターの集積によつて修正されていくことを予想して樹てたものである。

（註）　このプランは、分館網の計画が着手されて実現しつつある現時点からみると、大まかな素描であるが、昭和42年の時点における資料をもとにしている。

この間の事情を若干の記録によつて述べてみよう。

私たちの新しい図書館

（図書館雑誌　１９６７年５号記載）

1. はしがき

私たちの新しい図書館の紹介記事を書こうとして、「新しい」とは何を意味するのかひっかかる。「新しい」とは、私たちの図書館が新しくできたという事実の外に、何が図書館活動にとって「新しい」のか、その内在的な意味が求められているのであろうと、私は考えた。

「新しさ」についての解答が、この短い文章の課題であろうと思う。

2. 調布市の図書館プラン

人口１３万人を越える都市は、戦前でいえば、かなり大きな県庁所在地の人口であり、そこにはどんな形ででもあれ、図書館というものが所在し、歴史を作つてきている。１３万という人口規模は、ある地域性をもつた都市としての文化活動を予想させる。然し、わが調布市の１３万という人口は、急激な人口膨脹によつて、近々数年にしてでき上り、なお膨れつづけている都市なのである。そこには、これまで図書館というものは存在しなかつた。

都市近郊の農村集落が急激に解体し、東京という世界一の人口を有する都市の変化の圧力によつて、無理矢理に作りあげられている、奇型化された人間と家屋の集合体である。急速な物化現象は、内容を審査する暇をもたないまま、雑然たる外装だけをまとつた、散村的都市を作り出す。この巨大な都市化の激流に洗われたところは、どこでも都市計画の構想をもつ余裕すらない。洪水が低地に奔騰するような、アミーバー的な運動が自己貫徹をする。これは、それなりに避けられない一つ過渡的な歴史現象であろう。だが、こういう状況下では、人間の精神を住まわせる文化は空洞化される。塊（かたまり）的都市集落の織りなす文化的虚無性に対して、どんな形ででもあれ、対策がたてられ、住民の定住化 —— 郷土意識の形成 ———— が、はかられなければならない。この課題は、資金の欠乏に悩み、膨脹現象の対症療法に追われつづける地方自治体にとつては、重荷ではあるが、忍耐強く解決を迫られる任務の一つでもある。

さて、調布市立中央図書館は、この文化的砂漠に、尖兵としての任務を負わされて落下したささやかな灯であろう。工費1,700万円、延面積566㎡（鉄筋二階建）の規模の施設は、現在の我国の図書館活動の現状からみれば、分館程度の機能しか果たせないかも知れない。然しこの中央図書館の建設は、調布市図書館活動のマスタープランに基づいて建てられた、活動拠点の意味をもたされている。この館の建設に当たつて、この館が将来どういう役割を果たすべきかを、調布市将来の図書館活動構想の中に位置づけて出発した。特長を捜すといえばこの点にある。図書館の建設を、ただ建物を建てるという建築的観点だけにしぼらずに、図書館活動をダイナミックな機能として捉えようとした。図書館という建物を、書物の蓄積所であるという観念から解放して、建物は図書館活動の基地であるという機能を前面に押し出そうとした。図書館は本を読ませる場所 —— 閲覧所ではなく、本を貸す場所 —— 市民の書斎という観点に、設計モチーフを置いた。当然開放的な開架式にして、自由に出入りできて、できるだけ抵抗感のないものとした。

調布市は東京世田谷区に隣接し、郊外線である京王線９つの小駅の沿線に、東西に細長くのびるベッドタウンである。市のセンターといえる程の市街地の形成はなく、南を限る多摩川沿いに大きな団地二つをかかえ、小駅を都心への通勤点として、田園の中に雑然と宅地形成されつつある住宅都市である。こういう型の都市の図書館活動をどのようにしたらよいかを、一応の見取図によつて構想が立てられた。この活動プランを図式化したものが前図である。

3. 調布市立中央図書館の現状　　（前記図書館プラン参照）

調布市立中央図書館は、全体プランに基づき、貸出し業務を主体とするというモチーフで設計されている。そのため正面は外側から書庫が見えるようガラス張りとし、税務署の次に景観が高いといわれる図書館を市民のものにしようと工夫した。

１階は書庫と事務室とブック・モービル用書架とし、２階は親子閲覧室、視聴覚室、学生閲覧室となつている。館の活動は、前段の全体プランに基づく図書館活動構想を実現するように運営されなくてはならない。然しおよそどんなことでもそうであろうが、われわれの場合も理想と現実とのギャップは深い。一切の職員を含めて館長以下６人の職員では、このプランに盛られた活動を営むには道は遙かである。地域文化の創造の仕事には研究と忍耐とが要求される。ささやかでも、われわれの小さな図書館が、何かを為す図書館でありたいと念じている。

私の図書館構想

市長　本多嘉一郎

1. 私は世の為政者といわれる人々に訴えたい。

唐の詩人、白居易が「重賦」という詩を書いています。

厚地植桑麻　厚地（こうち）に桑麻（そうま）を植う
所要済生民　要（もと）むる所は生民（せいみん）を済（すく）わんがためなり
生民理布帛　生民　布帛（ふはく）を理（おさ）む
所究活一身　求むる所は一身を活かさんがためなり
身外充征賦　身外（しんがい）は征賦（せいふ）に充（あ）て
上以奉君親　上は以て君親（きさ）に奉ぐ
国家定両税　国家　両税（りょうぜい）を定む
本意在憂人　本意は人を憂うるに在（あ）り
厥初防其淫　厥（そ）の初めは其（そ）の淫ぐるを防（ふせ）がんとて
明勅内外臣　明らかに内外の臣に勅（ちょく）す
税外加一物　外に一物を加うれば

皆以枉法論　皆な枉法を以て論ずと

大意の存するところを、高木正一氏の訳を借りて記せば、次のとおりであります。

「大地に桑や麻を植えるのは、人民救済の必要から。人民が布や帛をつくるのは、一身の生活材とするがため。わが身に必要な分以外は税にあて、上は天子や親にささげるのだ。国家が夏秋二期の納税法を制定した本来の精神は、人民を憂うるということにある。さればこそ、その初めには、規定以外の取りたてを防止すべく、中央や地方の官吏にはつきりと勅語を下し給うて、税額以外に一物でもよけいにとつた者は、みな国法をまげたものとして処罰するとのおふれがあつたのだ。」

私が長いこの詩を引用したのは外でもありません。一市長としての私は、打出小槌をもつているわけではなく、市民のために行なう一切の行政は、市民の税に拠つているのであります。その税が豊かなれば、市長は市民のために豊かな仕事をすることができます。然し、大部分の勤労者は、決して軽くない税にあえぎ、而も地方自治の財源は乏しく、国の税は厚いのが我国の現実であります。理想を抱くすべての市長が最初につき当る厚い壁は、この地方財源の貧困であります。徴税は決して公平ではなく、高級官吏は栄達しても処罰をうけることはありません。この唐詩にある如く、国家の税制が民を憂うるにありとせば、現代は政治に理想を欠き、民の声が為政者に届かなくなつた時代なのでありましようか。

『図書館雑誌』が私に求めてきたのは、現在調布市で進めている、図書館作りの構想であります。乏しい財源のなかで、真に市民の為になる、市民のための図書館を創る仕事は決して容易ではありません。市民が利用しようがしまいが、ただ図書館の建物を建てるだけならば、誰にも為しうるでありましよう。然し、それは市民にとつて意味をもたないでしよう。図書館創りは、そんな単純な仕事ではありません。かりに、村が町になり、町が市になつても、図書館は永遠に図書館でありつづけるでありましよう。金があるからできる、金がないからできないという性格のものではありません。市民は何によつて自己教養を高め、市民文化の創造に参加してゆくのか。図書館創りにこめられている市民の願いは、根強く、本質的な人間的な要求であります。

私が考えている市民図書館像は、一調布市だけのものであつてはならないと考えます。すべての市町村で取りくんでもらわねばならない、大切な仕事であります。都や国は、もつともつと図書館というものの意義の重大さを知らなければなりません。図書館行政に対する都や国の認識の乏しさ、行政上に占める地位の低さは、そのまま我国の現代図書館の実体を語っています。図書館設備のない市町村に対する、文部省の図書館建設費の補助金の額が、雀の涙にひとしい一事をもつてしても、この現実を想像するに足るでありましよう。都や国が本腰をいれて図書館行政を考えていかなければ、国家の未来に希望を抱くことはできないでありましよう。

2. 私の考えている図書館像

市民にとつて図書館とは何であろうかという、私じしんに対する問いかけが、私の図書館創りの根底にあります。それには、私が預つている市の現状について、少しく語らねばなりません。調布市といつても、すぐ何処にあつて、どんな市だと応えられる人は、そう多くないと思います。準和野といえば、小さくても、森鷗外の生まれた中国地方の城下町と応えられる人は少なくないでしよう。調布市は、市政を敷いてから僅か13年、面積約21平方粁、人口15万人を少し超える中位の市であります。東京都の副都心新宿から、私鉄で僅か15分で達せられます。武蔵野、三鷹、日野、府中などと同じように、東京都の膨張によつて、急激に形成された市であります。東京の都心から押し出されてきた人たちや、都心に住居を求められない人々が、住居を求めて、私鉄京王線の沿線9つの駅を中心に居住する、都市近郊の市であります。

いま我国では、都市化の激しい渦の中で、都市問題が深刻の度を加えています。私の住む調布市もその例外ではありません。甲州街道沿いの宿場町であつた調布町と、純農村であつた神代村との合併によつて形成された、新しい市であります。僅か数年間で、人口は急激に膨れ、嘗て農道であつた、曲りくねつた道の両側が、いつの間にか住宅街に変わつてしまうという、都市近郊特有の市街の形成が進んでいます。都市計画によつて、整然たる市を造りたいと願つても、事実の方が先に進行し、行政は遅かき所に道を作り、水のないところに水道を引き、泥濘の道に応急の舗装を施さねばなりません。過疎を訴える都心の学校とは逆に急増する生徒のために、校舎の建設は夜を日についで、行なわなければなりません。新設校の敷地入手に要する地価は、校舎建設費の数倍を要し、地価の天井知らずの騰貴は、市財政を重く圧迫しています。

それでも都心区部にくらべれば、まだ至る所、緑は芽ぶき、私が市の未来を思い画いて植えた、百日紅の街路樹は、真夏の陽の中で、赤や白の可憐な花をつけ、詩情を添えています。名刹深大寺や神代植物園、南を限る多摩川の流れは、このまちに安らぎと憩いを求めて移つてきた人々に、慰めを与えることができます。さして大きな工場もなく、公害問題もそれほど深刻に感ぜられない調布市は、住宅都市にふさわしい環境を失っておりません。神代、多摩川という二つの大きな団地の他は、住宅が主体であり、私は施政の方針として、文化の香る「健康住宅都市作り」を掲げて参りました。

しかしながら、短時日の間に膨脹した市街地の形成は、それなりに大きな欠陥をもっています。旧市の如く、歴史をかけて形成された市の場合には、市街地の形成は、自然の要素に随い、地方文化の意を反映させ、伝統を形成しながら、秩序をもった発展をしてゆきます。長い年月は、文化の中心圏を創り出し、市民は、自分の住むまちにおいて、ある一定の特色と内容をもった文化を享受することができます。またそれが市の特色でもあり、伝統と創造の融合を作りだします。市民は、住むまちに愛着を憶え、市民の連帯の核をそのなかに見出すこともできるのでありましよう。

調布市のように、スプロール現象によってできた近郊市は、中心街の形成も、文化センターの発達もなく、住民は文字通りの住むことを主な目的とした"ねぐら"の要素をしか求めることができません。しかも都心に私鉄で僅か15分で達せられるという地理的条件は、住民の文化的欲求を、都心の文化圏の支配下に組みこませてしまう結果になります。住むことと食べることのほかの要求が満されない市であるとすれば、住宅環境としては、前近代的な恥ずべき市でなければなりません。市民の日常生活の中で、文化的欲求が満され、また市民自らが積極的に、市の文化環境創造行為に参加することができ、市民じしんの手で、文化の創造がなされるような市でなければなりません。育つ子どもたちは、秀れた教育環境の中でその能力を充分伸ばし、やがて他の市へ行つても誇りうる教育が受けられる、市でなければなりません。市民が、自分の住むまちに愛着を感じ、家庭環境の豊かさが保証され、新しい市を作るという共通の目的の中で、市民相互の連帯感が生まれてくるようにならなければ、市の文化の創造はありえません。

私が市長として、いつも心の底で願っているのは、このような市に、調布市が次第に成長してゆくことであります。

私が図書館に市民文化創造の夢を托しているのは、図書館が本来もっている、文化的機能であります。図書館は、市の文化センターでなければならず、そのためには、市民によつて支えられて、育られてゆく図書館でなければなりません。図書館に対する市民の信頼は、市民の自己の教養や思想に対する信頼と一致しなければなりません。図書館といえば、市民にとつて敷居の高い、近づきにくい場所でした。そこは、一部の本好きの市民か、勉強する学生とか、特殊な人にしか利用されないという、歴史をもつています。現代の図書館は、そういう図書館であってはならないと考えます。

巨大な情報のはんらんにさらされ、一方的な情報の流れに支配され易い現代社会の中で、市民が自分の考えを捜し求め、自分のたどりつくべき思想の源をさぐり、自己に必要な資料情報を得られる場所が、与えられなければなりません。このような、市民の自発性による思想探求、教養形成への欲求こそ、市民文化創造行為の根底をなすものであります。また、未来をになう子どもたちにとって、図書館こそ、自由な、自己教育の場所であります。欧米のように、まちの随所に、子ども図書館が存在するならば、そこは、学校からかえった子どもたちの、ファンタジーの狩場となるでしょう。

このような市民の要求を満すためには、市民の住む近くに図書館が存在していることが、絶対必要な条件となります。「買物籠をさげてゆける図書館」という、私の考えは、すべての市民に利用してもらえる図書館を作ってゆくという点からでています。一部の市民にではなく、すべての市民に利用してもらえるという条件は、図書館の社会保障的な機能であります。またすべての市民が参加できる、まち作り、すべての市民の参加によって作られてゆく市民文化創造でなければ、民主的な真の文化にはなりえません。市民の精神の中に無形の知的教養を蓄積することこそ、多くの記念碑的な建物を作るより、遙かに永遠の記念碑の建設

といえないでしょうか。民主主義の本来のあり方は、市民の直接の参加でありましょう。市民の日常生活の圏内に、すべての市民が利用できる図書館を作り、全市をサービス網で覆うことができたとき、図書館は市民のものとなることができるでしょう。惜しくも亡くなった畏友、有山崧氏は、その豊かな図書館行政の経験を生かして、日野市において、図書館の建物のない図書館として有名な、全市をサービスできる自動車文庫を創設しました。動く図書館であつても、動かない図書館であつても現代図書館は、市民のすべての人の利用に供しうるという目的に向かって、進んでゆかなければならないでしょう。

3. これからの図書館に必要な条件

去る8月12日、私の待ちに待った国領分館が開館しました。これは、私の調布市における図書館作りの第一歩であります。この開館式には、調布各地に組織されている、読書グループ、家庭文庫、親子読書会などの代表の市民が、交々お祝いの言葉を述べてくれました。調布に私が、はじめて図書館を作つてから三年で、この分館第1号が誕生したのです。来年になれば深大寺やつつじヶ丘方面にも分館が誕生する予定です。私は、この開館式で、代表の市民の方々の喜びの声に耳を傾けているとき、私の図書館作りが、心から市民に支持されていることを感じました。市民の利用者の代表が多数祝ってくれる開館式こそ、市民図書館の本当の姿であることを感じました。図書館作りには、たしかに金がかかります。然し、市民の大多数の方が利用できるとすれば、その費用は他とくらべて、決して高くつくとは考えられません。市の図書館を作って三年、図書館の職員も、よく困難な条件の中で、努力を重ねてきたと思います。「調布の図書館は明るい」「職員が一生懸命で奉仕している」そういう市民の声を聞きます。たしかに、多くの施設と豊富な資料の存在は、図書館作りには、まず欠くことのできない絶対の条件です。それにも増して大切な要素は、人であることを、私は市民の声の中からみつけだします。

調布市は、財政的には決して恵まれていず、図書館に多くの費用をかける余裕はもっておりません。図書館に全く未経験な二人の図書係職員から出発した調布図書館が、今日、多くの市民に支持され、分館を生むことのできた事で、職員が徹底的に市民に奉仕するという、館長の方針の正しかったことが証明されています。私の市民図書館構想を具体化してゆく源動力は、館の内外を問わず、市民の要求のあるところ奉仕ありとして取り組んでいる、調布図書館の方針の中にあると考えることができます。

国領分館の開館式のとき、「調布図書館三年の歩み」と題して、館員の自ら作った資料が館内に展示されていました。その中に「仕事とは創造である」という言葉がありました。与えられた枠の中だけで消極的に仕事をしていては発展はないという意味でした。「図書館創りは明確な目的意識に貫かれた、持続する意志によってのみなされる」とも書いてありました。職員が、市長である私の方針と意図とを正しく理解し、献身的に努力してゆこうとする姿勢を、この中に読むことができました。図書館の仕事は、相当専門的な仕事でありますか

ら、この仕事に生涯の使命を感じ、献身する職員を大切にして、仕事に専念させることが大切であると感じました。

市長という仕事は、誠に多忙で、むづかしい仕事です。法律などいちいち読んでいる暇のない経営者です。然し、分館開館を機に、私は昭和２５年４月に作られた図書館法という、法律を読んでみました。僅か２９条のこの法律は、多くのことを私に教えました。またよくこんな法律が作られたものだと思いました。この法律は、戦後日本の民主主義の生んだ一つの秀れた成果でありましょう。戦後の民主化の嵐の時代に、秀れた思想家として、国会図書館創造に情熱を賭けた中井正一を思い出しました。法律は条文だけであれば、絵に画いた餅です。この図書館法を実現し、魂を入れる仕事こそ、私どもの仕事であることを強く感じました。

図書館とは何であるかという問いは、いつまでも私の心から消えないでありましょう。

最後に、はじめて調布市立中央図書館を作るとき、設計の面で、またプランの面で私に協力された、和設計の方々に、この紙面を借りて御礼を申し上げたいと思います。

国領分館の構想

館長　萩原祥三

調布市では、本多市長の図書館構想を次の点に集約して計画をたてた。

(イ) 現代図書館は、学校教育と社会教育とを結びつけ、生涯教育を実現してゆく、市民の自己教育の場である。

(ロ) 現代図書館は、市民の文化的な欲求に対して、社会補償機能を果たさねばならない。

(ハ) 都市化の急激な発展によつて形成されている、調布市のような場合、図書館は市民意識形成の場を提供できなければならない。

(ニ) 子どもをとりまく教育環境をよくしてゆく仕事の中で、図書館の果す役割が大きい。

このような課題は、決して調布市だけのものではなく、どこの自治体にも共通するものであろう。現代図書館が、静態的な建物利用だけに限られず、すべての市民に平等に利用されるためには、従来の図書館活動の批判の上に立つて、積極的な奉仕活動を展開する必要がある。

図書館利用に習熟していない、広い市民層の存在は、図書館奉仕にとって大きな問題がある。然し、図書館利用の習慣をもたない成人層が、図書館に親しんでゆくことは容易ではない。

調布市立中央図書館が、業務を開始したのは、昭和４１年６月であり、全く図書館経験をもたない二人の図書係と、大部分を寄贈本に仰ぐ状態から出発した。図書館の規模は、一切

を含めて１８０坪、このうち児童室は１０坪弱にすぎない。この程度の規模の図書館は、本館といえないだけでなく、分館の規模である。会議室など行事に使用しうる部屋は一切なく、ただ１２０席の座席と書庫（蔵書能力２万）と事務室があるだけである。

分館を作る構想は、当初から計画され、市長論文にあるように、「買物籠をさげてゆける図書館」という、すべての市民が利用できる図書館作りを考えた。この構想を実現してゆくための一番大きなあい路は、地価の高騰である。たとえ小さな分館でも、建ぺい率を考えると、相当高額な土地費を必要とする。調布市の財政では、とてもそんな余裕はない。そこで市長が発想したのは、保育園の二階に図書館を併設するという、ユニークな構想である。こういうケースはあまりないので、議会でも色々問題点が指摘された。衛生管理や保育行政と図書館行政の目的の相違など、併設に伴う問題が論議された。開館されてみると、保育園の母子が一所に利用にみえたり、幼令児の図書利用の認識が改められたり、利点も多く出ている。また建物の入口を別にするなど、構造上に配慮すれば、併設構想は、高地価の土地利用の一つとして、高く評価される面も見出される。

特に設計上に苦心を払つたのは、子ども室を広く、ゆっくり採るということであつた。これは、本館としての既設の中央館が、会議室一つなく、行事その他一切の活動が自館で賄えないだけでなく、児童室の狭さから、児童の利用が非常に窮屈である点を補うことを狙ったものである。４４年３月末の登録者数をみると、成人5,７４７人に対し児童4,９９８人、図書の貸し出し件数は、成人４０,２８７人に対し、児童４１,２０６人と成人を上回る。蔵書の回転率は、成人2,４６回、児童9,３８回と圧倒的に児童の利用が高い。これをもっても、いかに児童の方が利用に対する反応が敏感であるかが判明する。すべての市民の利用を心がけても、その効率は、成人と児童とではかなり大きな差がある。この数字は、図書館児童室の数字であるが、家庭文庫、親子読書グループへの貸出し、学級文庫への供給を加えれば、この利用は遙かに高くなる。そこで分館は、子ども室を優先するように設計した。更に週一回は、この子ども室において、講演会の開催、読書相談、読みきかせ、ストーリーテリング、紙芝居などの行事ができるようにして、本館にはない室内の利用を計画している。

深大寺へ予定されている分館も、新しく建設される保育園との併設で、その二階が図書館となることになっている。（註　この館は単独館として開設された）

このような過程をへて、現在考えられている計画と既設の分館の状況は次表又は次図の通りである。

既設を含めた現在の分館網設置計画表

既設分館および将来設置分館の配置位置図

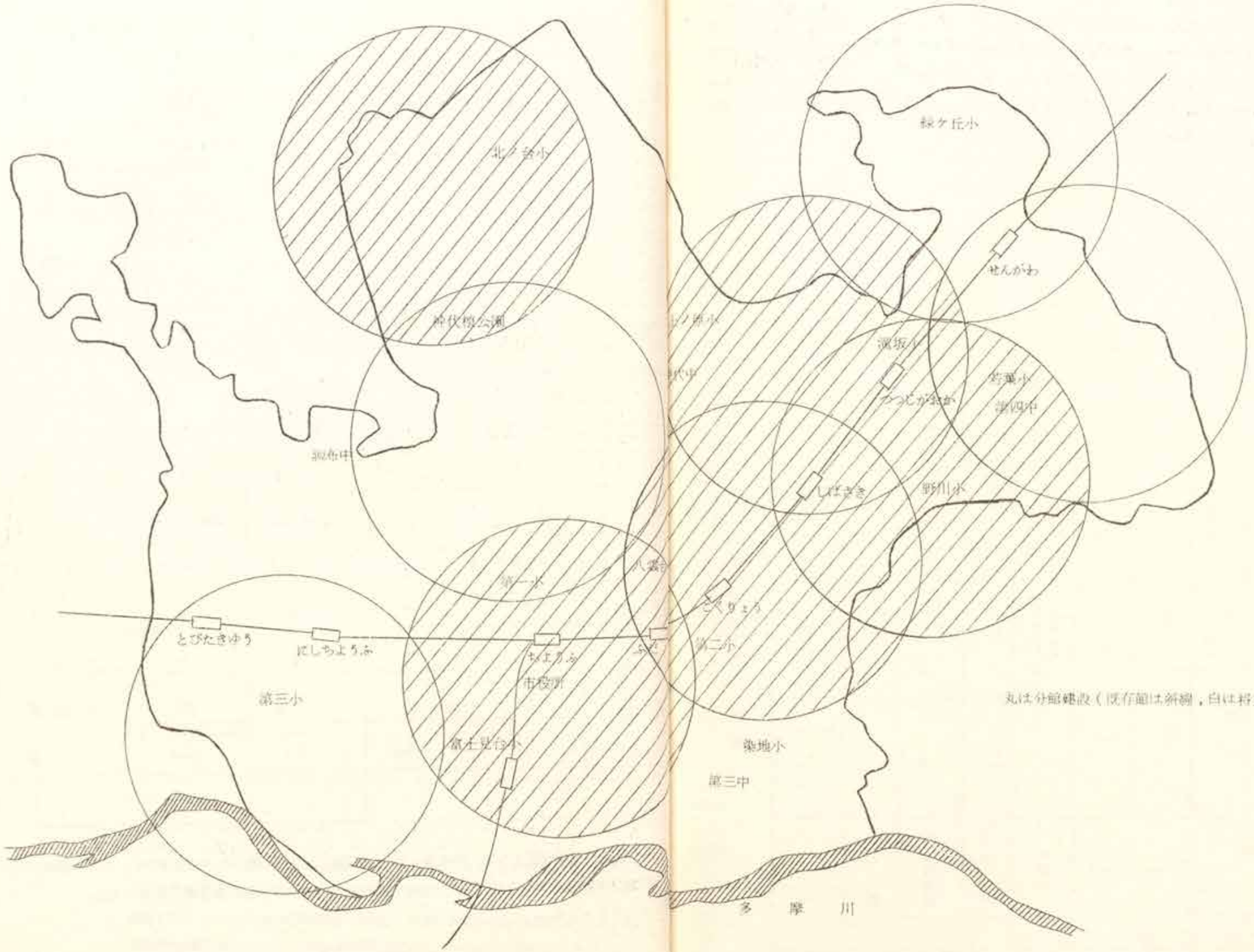
調布市における図書館網の形成とプラン

昭和46年3月1日現在（予定）

図書館名	中央館	国領分館	つつじヶ丘分館	深大寺分館	神代分館	第5分館（仮称）	第6分館（仮称）	第7分館（仮称）	第8分館（仮称）	第9分館（仮称）	
建設年月日及び建設完成日	41.3.31	44.3.31	45.3.28	46.2.28	46.3.31	47.3.31	48.3.31（予定）	49.3.31（予定）	50.3.31（予定）	51.3.31（予定）	
建設費及び建設予定額	17,120千円	9,120千円	3,774千円	13,800千円	17,080千円	18,000千円	22,525千円	23,575千円	24,624千円	26,102千円	
敷地面積 m²	6225	1,723	(借)269.8	826.4	1,980	約2000	未	未	未	未	
土地購入費	市有地	53,100,000	借地	27,496,700円	84,000,000円	約8,000,000円	未	未	未	未	
建物の構造 構造	鉄筋2階建	鉄筋の階上	コンクリブロック	鉄筋平家	鉄筋の階上	鉄筋の階上	鉄筋の階上	鉄筋の階上	未	未	
建物の構造 併設，単独	単	保育園併設	単	単	保育園併設	保育園併設	保育園併設	保育園併設	未	未	
所在地	布田 4－17－5	国領町 3－12－1	西つつじヶ丘 4－23－6	深大寺町 2266－14	西つつじヶ丘 1－40－2	上石原 3－34	染地地区	仙川緑ヶ丘地区	入間町地区	佐須町地区	
床面積 m²	567	304	91	218	339	330	396	396	396	396	
職員 人	館長1 庶務3 司書5	司書 2	司書 2	司書 2	司書 2	司書 2	司書 2	司書 2	司書 2	司書 2	
施設の概要 蔵書能力 冊	40,000	30,000	10,000	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	
施設の概要 一般室	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	
施設の概要 子ども室	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	
施設の概要 集会室	なし	なし	有	なし	有	有	有	有	有	有	
施設の概要 座席数	140	60	なし	60	60	60	60	60	60	60	
備考											

説明　調布市面積21Km²、人口160,000、将来人口約200,000、人口20,000市の重要施策として、将来計画におり込み済み。
蔵書200,000冊位の閉開架を予定している。各館いずれも開架式、貸出し特に土地購入費について、いかに財政を圧迫しているかに注意して下さい。

当1分館、蔵書保証1.5冊、約半径1Km に1館、既設館6館（含46年建設）、残り4館は、問題は本館建設であるが、これは計画されていないので、計画におりこむ必要がある。
はブラウン方式。



丸は分館建設（既存館は斜線，白は将来計画）

もし昭和50年までにこの計画が実現するならば、調布市における分館網は一応完成し、全市民は自宅から徒歩で利用できる位置に図書館をもつことになる。蔵書の方は予算の関係で急速には充足できないが、次表のような計画によって、逐次整備していくことになる。ただこれは一応の計画であって、現実には財政難によって、とれをずっと下廻る購入額しか予算が確保できないのが現状である。

調布市立図書館長期計画の内蔵書整備計画

		45年度	46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	
		現　在	単価 860円	単価 900円	単価 930円	単価 960円	単価1000円	至達目標
中央	購　入 (A)		(2150千円) 2500冊	(2250千円) 2500冊	(2325千円) 2500冊	(2400千円) 2500冊	(2500千円) 2500冊	
	廃棄補充 (B)		(860) 1000冊	(900) 1000冊	(1395) 1500冊	(1440) 1500冊	(1500) 1500冊	
	累　計 (C)	27024	29524	32024	34524	37024	39524	40.000冊 99.8%
国領	(A)		(2580) 3000	(2700) 3000	(2790) 3000	(2880) 3000	(3000) 3000	
	(B)			(450) 500	(465) 500	(960) 1000	(1000) 1000	
	(C)	7162	10162	13162	16162	19162	22162	30.000冊 73.9%
つつじヶ丘	(A)		(860) 1000	(900) 1000	(1395) 1500	(1440) 1500	(1500) 1500	
	(B)			(450) 500	(465) 500	(720) 750	(750) 750	
	(C)	2690	3690	4690	6190	7690	9190	10.000冊 92.0%

		45年度 現　在	46年度 単価 860円	47年度 単価 900円	48年度 単価 930円	49年度 単価 960円	50年度 単価1000円	至達目標
深大寺第四	(A)		(6020) 7000	(3600) 4000	(3720) 4000	(3840) 4000	(4000) 4000	
	(B)					(480) 500	(500) 500	
	(C)			11000	15000	19000	23000	30.000冊 76.7%
西つつじヶ丘	(A)		(6020) 7000	(3600) 4000	(3720) 4000	(3840) 4000	(4000) 4000	
	(B)					(480) 500	(500) 500	
	(C)			11000	15000	19000	23000	30.000冊 76.7%
第五 飛田給	(A)			(7200) 8000	(3720) 4000	(3840) 4000	(4000) 4000	
	(B)						(500) 500	
	(C)				12000	16000	20000	30.000冊 66.7%

		45年度 現　在	46年度 単価 860円	47年度 単価 900円	48年度 単価 930円	49年度 単価 960円	50年度 単価1000円	至達目標
第六 染地	(A)				(7440) 8000	(3840) 4000	(4000) 4000	
	(B)							
	(C)					12000	16000	30.000冊 53.3%
第七 緑ヶ丘	(A)					(9600) 10000	(4000) 4000	
	(B)							
	(C)						14000	30.000冊 46.7%
第八 入間若葉	(A)						(10000) 10000	
	(B)							
	(C)						10000	30.000冊 33.3%
年度別購入冊数			21500冊	24500冊	29500冊	37250冊	41750冊	
〃　〃　金額			18,490千円	22050千円	27435千円	35760千円	41750千円	
蔵書累計		36,876	57376	79876	106876	139876	176876	360,000冊 68.0%
調布市一般財源			99245千円	11025千円	137175千円	17880千円	20875千円	府補助金は 全金額の1/2
東京都補助金			9245	11025	137175	17880	20875	

一応この表では第8分取までの中間的なものである。

4　図書館プランの実現過程

(1)　地方自治体と図書館

地方自治体の財政の貧困さは、いまさら言うまでもない。特に最近市政施行の人口が3万程度に引きさげられて、多くの市が簇生しつつあるが、その財政的基盤は脆弱極まりないものである。市民に必要な財源を賄うためには寧ろ広域の行政組織体が望まれるが、時代逆行的な狭域市の出現は、図書館の実現にとって決して好ましい条件とはならないであろう。

既に述べたように、都下２３市のうち図書館のある市は僅かに７市を数えるにすぎないが、その市のうちで図書館費が市の財政規模に占める割合をみると次のようになる。資料は一寸古いが、この事情は現時点でもさして変化していないし、寧ろ各市の財政は膨脹しているから比重は遙かに下落しているものと思われる。

三多摩における当初予算に占める図書館費の割合

昭和４３年度

図書館名	当初予算額 (a)	図書館費 (b)	(b)／(a)
武蔵野市	2,667,200千円	19,462千円	0.73 %
三鷹市	3,375,960	22,621	0.67
府中市	2,982,960	29,827	1.00
調布市	2,657,730	24,747	0.93
町田市	2,662,110	7,915	0.30
小金井市	1,799,280	4,224	0.23
日野市	1,911,030	26,314	1.38

当初予算の１％前後の予算が三多摩地区の図書館に割りあてられているのが実情であり、最も多い日野市でも1.３８％である。区部においてはこの比率は更に下廻るところが多いと考えられる。それでも市立図書館をもち活動している市は良い方であつて、大部分は市民奉仕のための図書館を欠いているのが実情である。

この原因は様々あろうが、図書館に対する行政需要は公立の中小学校などの義務設置とちがい、任意設置であるため、行政体の側から、貧困な財政を侵してまで図書館を設置するところは少ない。また図書館の行政需要は市民の知的生活に深いかかわりがあるとはいえ、水道、下水、道路などのような日常生活の面からは、第２次的なものとみられ易い。特に、日本の風土的伝統からいつても、知的需要を優先するという発想は生まれにくい。

戦後社会教育法が施行され、つづいて図書館法も施行されたが、社会教育法が細部な条項

まで規定し、公民館活動を軸として、社会教育行政の主体となって進められてきたのに対し図書館はその歴史の古さにもかかわらず、社会教育の概念に包摂されることなく、アウトサイダーの位置におかれ、独自の歩みをなしてきた。各市町村に社会教育法に基いて、社会教育実施の機関が例外なく設置され、行政体系としては、文部省 ― 各都道府県 ― 各市町村という系統立った組織の下に運営されてきたのに対し、図書館は戦前設置された非系統的な実体が、そのまま社会教育の一分枝として、教育委員会の管轄下におかれたとはいえ、一貫した行政組織をもって運営されて来なかった。これは必ずしも短所とのみ言い難く、日本の如き官僚統制の強い伝統を有する国家並びに行政機構の下では、図書館が官僚統制の埒外におかれてきたことをも意味する。しかし他方、図書館の発達も遅らせた事実を見逃すことはできない。日本のような官僚機構においては、地方自治体の財政の貧困は、補助金や交付金などの上部機関から再分配される財源に依存することが多く、その事業もこのパイプなしには容易に発展しえないのである。この補助というパイプを通じて統制が可能かつ容易になるのであるから、財政の貧困な地方自治体は呼び水である補助体制をもつことなしには、自ら住民の要求に容易にこたえうる能力を欠如しているともいえる。

図書館がこのように戦後社会教育活動のアウトサイダーとして置かれてきた現実も、社会の急激な変化と共に徐々に変りつつあるが、さりとて、自治体の財政の貧困さは依然として変つているわけではなく、住民の要求があつても、直ちに図書館を設置することに踏み切るような自治体は少ないのが現状である。

これは地方自治体の体質に内在する補助金対象外の施設はあと廻しにするという、伝統的な行政のあり方だけに原因を帰してしまうことは、物事の一面しかみないというそしりを免れ難いであろう。所詮自治体の体質を形成するものは、その構成員である、自治体住民の意識、体質の反映であるから、自治の思想の欠如してきた風土的な環境の下では、まず自治思想の培養からはじめなければならない面をもっている。最近自然発生的な形で、各種の公害に対する住民の地域的な運動が起こっているが、この側面は、自治意識の芽生えととることも可能である。行政は現行法の下では一種の信託行為である。法の精神も素直に解釈すれば形式論理的には、住民の決議による間接的方法による信託方式である。しかし、組織論的にみると、法の形式面はそうであつても、実体は一種の白紙委任のような面が少なくない。自治とは、投票形式という方法を通過した間接的なSelf－Controlであろうが、歴史的な長い歩みの中から、治するものの下に被治者ありという、反自治的な体質が自治体を浸してきている。近代国家は極めて複雑であり、行政に限らず、すべて社会行為に専門化を必要とするから、行政行為の中で、住民の信託行為が住民の自治の実体をそなえる、Check and balanceの保障が必要となる。これは現実には困難な事情もあるので、一種の統制的な支配原理が作動してしまうことにもなる。

公害問題のように、住民が日常生活の過程の中で、直接関与するような問題は、invisible

な行政行為などとちがつて、Visible であるため、住民運動という形で直接的な自治行為の側面が顕れてくるのである。

しかし、図書館設置のような問題については、仲々公害問題のように、住民の直接要求が行政行為となって結実し難い面をもっている。しかし、これからの社会を考えると、増々巨大化するマス・ソサイエティーの中で、おびただしい情報を受け入れ、それを処理していかなければならなくなる必要度が、個人の生活の中に浸透してきている。図書館は、住民にとって第2次的な要求ではなくなった時代が訪れているといえよう。

(2) 調布図書館の歩み

調布市立図書館中央館が開館して、第一の分館である国領分館が誕生したのは、昭和44年8月14日である。中央館の開館は、昭和41年6月であるから、第一の分館が開館したのは、図書館が生れてから約3年目である。建設は前年度の昭和43年度から行なわれているから、比較的早い機会に分館網形成の方向が打ち出され、2年経過した年には、ほぼ調布市における図書館活動が、分館網という形で実現をみたことになる。既に述べたように、地方自治体における図書館建設は決して容易なことではない。調布市が決して富裕市でもなければゆとりがあるわけではない。それは市政施行以来十年目で、ようやく分館程度の規模の現在の中央館が建設されたことに徴しても判明することである。而もこの場合建設の規模は僅かに170坪（566m²）程度で、文部省の補助金180万円を仰いで建設されたのである。当時の人口は13万程度であったが、図書館の規模とすれば本格的な図書館機能を具え、人口に見合うものとしては、極めて貧弱であつた。調布市の財政事情からすれば、この程度の図書館でも大きな前進であったといえよう。然し図書館の活動内容は必ずしも建築規模には比例しない。もし建物や設備は充分でなくても、その活動の方向としては、豊富な人員を擁すれば、自動車文庫の活用などによって、かなり高度の活動が可能である。然し、調布の図書館活動が、自動車文庫を主体として充分な人員を始めから擁して出発した日野市の場合などと本質的に違つていたのは、配属された職員の構成をみれば明らかである。即ち未経験な有資格者1名、事務助手という身分の職員1名の計2名が奉仕を担当し、あと用務員1名、庶務1名、館長は兼任の計4名によつて出発したのである。這般の事情は、市長名による論文の引用などによって若干伺い知ることができるが、分館建設に向い、図書館プランを作成し、その実現にとりかかったのは、昭和42年度の活動である。昭和41年度は開館が6月であり、職員4名では、殆んど開館して貸出し活動をするだけに終始せざるをえなかった。昭和42年度においては、専任館長も決定し、職員が4月より1名、9月より1名、計2名増員された事情もあり、やや奉仕活動に余裕を見出し、館外活動を勢力的に手がけた。一館のみの活動では図書館利用者は限度があるので、図書館の潜在的利用者に積極的に働きかけるために、読書会、講演会などを実施した。特に子どもの読書活動について、母親の強

い関心があることをキャッチし、昭和44年3月、3回に亘り、「子どもの本の選びかた与えかたの講座」を実施した。この講座は調布図書館が日本子どもの本研究会と共催し、日本児童文学者協会、読書推進運動協議会などの後援をえて、約800名の地域の人々を集めて行なわれた。市内の公立保育園の保母の協力を得て、託児所を設置し、この種の催しものとしては、調布市では空前の成功を収めた。市長が挨拶したが、市長の行政感覚は鋭く、図書館行政の本質を捉えたのは、実にこの催しであつた。前記市長の図書館構想にもあるように図書館の設置は、近代都市においては必需物であり、財源の有無にかかわらず、何等かの方法によつて、市民に図書館を届けなければならないという決断がされたのである。

たしかに地方財政の貧困は、図書館設置の最大の敵であろう。もし財源の余裕があれば図書館を設置することに強いて反対する為政者はないであろう。他方財源難を推してまで、図書館を設置するほど図書館行政に深い理解を示す為政者も同時に少ないであろう。地方自治体の為政者に決断をうながす要因は、しっかりした図書館プラン、実施可能の計画を作るだけでは不充分であり、為政者に図書館建設を決意させる要因の介在が必要であろう。それは一種の住民運動のような形式をとる市民の要求の結集であろう。調布の分館建設は、市民の要求のあるところを明察した市長の決断と、このような市民の根強い運動の結合から生れたともいえる。同時にその間に介在して、図書館思想を市民のものとする活動を媒介した図書館活動の存在も重要な要因としてあげなければならない。

以下、当時の館報によつて、次々と生れた分館の誕生の様子を記録しておこう。

調布の図書館活動の一里塚

——— 国領分館建設の意味 ———

調布に中央図書館が開設されてから二ヶ年余りになりますが、その利用度の延びには、びっくりさせられます。

渇した咽喉に水が通るように、ごくごくと図書館利用が市民の間にひろがっているように思われます。私共は毎日仕事を通じて、このような動きを捉えますが、他方このような図書館に対する渇望をいやすには、まだまだ努力が足りないことも感じます。

図書館活動の基本的な条件は、人と施設です。人間も大切ですが、施設も欠くことのできないい要素です。遠隔地の施設にはどうしても足が遠くなります。そのため現代の図書館活動には、ネットサービス（施設をいっぱい作つて網のような奉仕体制をとること）が欠かせないのです。読みたい本が手許にあれば自然に開きますし、調べごとも、億劫がらずにするようになります。文化的欲求の満足は、食欲などとちがって、放っておけば、沈滞してしまう面をもっています。

本当は、このことが怖ろしいのです。反面、文化的欲求は一たび燃えさかると、いつまでも火が消えずに燃えつづけます。この火をたやさないようにすることが、文化活動の意義であると思うのです。図書館活動にはスタンドプレーは禁物ですし、また無意味です。

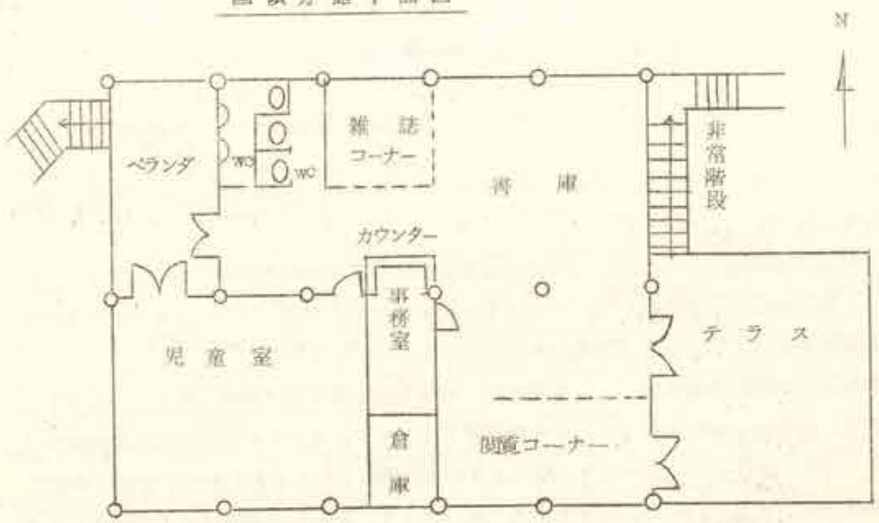
いつまでも変わらぬ地道な奉仕活動の持続と積み上げによつて、市民の方々の生活の中に文化を蓄えてゆくことが仕事です。施設などに決して大きなものは必要ないのです。一つ中央に会議室や各種の施設をもったセンターがあれば、あとはむしろ市の各地域に、小さくても手近に利用できる施設を作ってゆくことが大切なことです。

幸いにして、国領の駅の近くに、分館を建設することになり、目下建設が進行中です。

この建設は本多市長の発想によつて即決されました。図書館の建設プランでは、柴崎付近と予定されていますが、敷地の入手難などから、やや西に寄りますが、新設される保育園の階上を図書館の分館にすることができました。

私共はこの建設の意味を非常に大きいと考えます。それは、調布の図書館活動が、この建設によって一歩大きく前進することを意味すると思うからです。勿論図書館活動は無限のひろがりをもち、これでよいということはありません。然し、分館網の設置という第一石が置かれたことの意義は、いくら高く評価しても、し過ぎるということはないと思います。私共は、まだまだ未開拓分野の多い我国の図書館活動の建設のモデルを作る意気込みで、一層の努力をしてゆきたいと考えます。

国領分館平面図



児童文学研究講座を開きます

子どもはどんな本を求めているか

「読書」それは創造力の泉であり、知的な人間形成の源であります。読書をすることは容易ではありませんがこの苦しみを乗り越えた時、読書の喜びを知り、その人の読書力は消滅することのない大きな財産として蓄積され、爾後の読書への火を燃やしつづけるでしょう。

人間は千差万別、読書の時期、動機は必ずしも一定ではありませんが、幼児、児童のうちから読書力を養なつておいたら……。

子どもの読書について日頃からお悩みのお母さん方のお役に立てたらと、日本子どもの本研究会、日本児童文学者協会の先生方を招き、次のように『子どもの本の選び方与え方講座』を3回に分けて開きます。ぜひ多数の方が参加されるよう、おまちいたします。

☆　参加費　1回100円

☆　託児所も設け、お母さん方が安心して講座に参加できるようにしました。

なお、詳しくは、図書館へおたずねください。

とき	内容	講師
第1回 3月1日 P. M. 1：30	民話と神話	来栖良夫 （児童文学者・作家）
	子どもに与えたい本	代田昇 （児童図書研究家）
	本の書き手の立場から	与田準一 （児童文学者・作家）
第2回 3月1日 P. M. 1：30	子どもの本の移り変り	鳥越信 （児童文学評論家）
	子どもの読書会	滝井いち （小学校教諭）
	読みきかせ	山花郁子 （図書館職員）
第3回 3月15日 P. M. 1：30	児童文学の評価	古田足日 （児童文学者・作家）
	パネルディスカッション 子どもの学力と読書	那須田稔 渋谷清視　その他
	児童文学の紹介	巽梠照 （小学校教諭）

※　会場は毎回公民館ホールです。

つつじケ丘分館の開館

調布市立図書館長
萩原祥三

～一館長の悩みと喜び～

調布市の図書館の二番目の分館が、去る7月20日、つつじケ丘の団地内に誕生した。調布市では、全市民に平等に奉仕することを目指して、市内の各地に、小さな分館を建設していく計画を進めている。最初の分館は、国領分館として保育園の二階に、昨年の8月に開館した。

入館統計をみると、国領付近の利用度は、急激に高まつて、今までの上布田、下布田付近がピークであつた市民の利用曲線は、国領町付近をピークにする形に変わった。

つつじケ丘分館が開館して、8日間たった入館、貸出し統計をみると、その利用の密度は従来とは比較にならないほど高い。8日間の入館者は、1748人で、貸出した本は、1528冊に上る。一日平均220人の入館で、貸出しは、191冊に上る。登録人員は、802人である。館の規模はごく小さく、7坪の和室を除くと、20坪の書庫、カウンター、洗面所一切を含む、ミニ図書館である。閲覧場所も机一つあるきりで、蔵書能力もせいぜい5千冊程度である。予算がないので、蔵書は、1911冊の購入図書と寄贈649冊で開館した。このうち、子どもの本が約千冊である。入館者の8割は子どもである。従って、千冊の子どもの本は焼石に水であつて、開館劈頭、わっと押し寄せた子どもの群で、書庫は空っぽになった。この利用密度の高さは、2千戸の団地内の図書館であること、即ち図書館から歩いてせいぜい5分位の距離に集団居住していることは、当然利用度の高さを予想させる。しかしそれだけが原因ではない。この図書館ができ上るまでの団地内の読書グループ活動の力を見逃すことはできない。何とかして図書館がほしいという声は、当初は、電車図書館でもという運動からはじまつた。2年前の日野市の電車図書館の見学、その後の親子読書グループによる読書活動。個人の家を開放した、子どもたちのための家庭文庫活動。婦人学級グループによる、子どもの本の研究活動。Iさんという地道な奉仕者による、階段読書会の組織活動など、実に様々な市民の読書活動が背景をなしてきた。ローマは一日にして成らず、何かの社会現象を分析すれば、必ずそこには因果の連鎖が発見でき、たとえ試行錯誤の果てであつても、一つの結論に至るまでには、苦しい道程があり、運動があり、矛盾や障害をのりこえて進む、エネルギーの蓄積が発見される。

この小さな図書館が開館して日ならず、書庫の本が底をつき、それでもなお、来館者が絶えない背後には、このような、読書への潜在的欲求を顕在化し、具体化し、それを図書館という形に結晶させようとする、市民活動があったことは銘記されてよいことではなかろうか。私たちは、ここに一つの教訓を得る。持続する意志によって、目標へ飽くことなく接近していく模

索、それが仕事というものの中味であることを。矛盾や苦悩はまだ山積している。2千戸、1万人近い住民の中には、まだ図書館の誕生すら知らない人もいよう。すべての人が知的欲求をもつているとは限らない。それにもかかわらず、図書館が存在するという意味は、すべての人の知的活動を刺戟することでなければならない。日本の社会では、まだ図書館はもの珍らしい存在ですらある。まして、図書館員を、知的媒介者と認めてくれる人は、なお稀有であろう。

この図書館は、私の無能から、設計に幾多の難点をもつている。職員の休養場所がない。構造が悪いために室内に熱がこもる。8月の日中に、書庫は40度を超える暑さを記録する。奉仕人員に余裕はない。誰にこの館に行つて貰うかについて、幾日も悩んだ。いくら私が、図書館人としての使命感を鼓舞しても、所詮それは口頭禅でしかない。図書館職員は特別の人ではない。当り前の人である。悪条件に進んで飛びこむことを強制はできない。

「あそこは暑くて」という館員の声を聞けば、私は自分が責められていると感ずる。矛盾は改善しなければならない。しかし、急場には間に合わない。それでも、職員の人は黙々として、この条件に耐えて、奉仕をつづけてくれている。私は深く頭を垂れるのみである。人手の少ないとき、団地のグループの人たちが手伝いに来てくれている。私は、そこに、この小さな図書館の誕生までにかけられてきた、多くの人々の願いを発見する。図書館と市民との連帯である。子どもたちは書庫を廻り、本を捜す。大人も夕方になれば子どもと一緒に現われる。忙しい合間を縫って、ある館員は、読みきかせをする。私は心中驚きと感謝でこの光景をみつめ、深く心に何かを刻む。途はあるのだ。どんなに困難にみえようとも、その問題をたじろぐことなく凝視すれば、薄明のなかに、何かが浮び見えてくる。それが仕事というものなのだ。図書館奉仕という仕事は徹頭徹尾実践である。困難とみえる条件の中を勇敢に突き進む職員に教えられ、小さな図書館の誕生を心から喜ぶ利用者の顔、子どもたちのわが家の如き利用の姿に触れて、私は失いかけた自信をとり戻し、自戒する。遥かなる途を望みて、中途にて志挫けること勿れと。

(3) 図書館活動と市民運動

図書館活動と市民運動とは直接には結びつくとは限らない。市民運動によつて図書館が誕生するという必然性もない。ただここで特に図書館活動と市民運動という一つのテーマで報告したいのは日本の文化的状況を背景において、図書館の社会的存在意義を問いつめていったとき、我々は何に突き当るか、その突き当った問題意識の分析に即して、市民運動と図書館のかかわりを考えてみたいのである。

市民運動は様々な形態があり、またその対象とする問題も千差万別であり、その運動形態も多様である。しかし、市民運動を一貫して流れているものは、市民の自発的意志の結集という点であろう。ある小集団の共通目的、共通利害に結集した運動の一時的な形態が、市民運動の一般的な姿であろう。従って目的が貫徹されれば組織も消滅する。逆に利害目的が一

致すれば行動もし易い。それが永続的なものでなく、他の組織体のように長期的実現目標をもって運動し、その運動の側面が「組織化」又は「組織の拡大化」におかれているのとは、少なくとも現状では様相を異にする。然しこの市民運動のもつ質的側面は、それでは一時的（Temporary）であって、非永続的であり、社会の変化に一時的な影響しか与ええないかといえば、それほど簡単にはきめられない社会現象であろう。その点の証言者として、ハーバード大学の有名なガルブレイス教授の考え方をあげることができよう。ガルブレイス教授は名著「豊かなる社会」の著者としてその考え方は一般の方々に通じていると思われる。また現代の産業社会の分析に鋭いメスをあてている学者である。ガルブレイスは、現代社会の支配原理を競争を通じて実現する社会ではなく、一群の産業官僚の支配する社会であると規定し、社会で生産されて供給される商品は需要者側の要求できまるのではなく、供給者である巨大な産業群の支配に任されているとみる。これをチェックする一つの有力な方法として、市民運動をあげている。市民がこういう現代社会のメカニズムについて知り、自分たちの真に求める社会を実現するために、一群の産業官僚の支配する原理の支配を修正していくのが、市民運動の有力な機能であると主張している。公害問題は、このような現代社会の矛盾が鋭く露呈したものとして捉えられ、日本においても、人間の生存の条件と産業官僚支配の原理との矛盾が、各地に公害訴訟を起こしたり、反対住民運動を起こしていることは大きな社会の転換期が来ていることを示している。思想的に公害訴訟などの論証をみると、被害を受ける側が一方的な弱者の立場に立たされているために、挙証責任は、状況証拠によつて、被害源の存在が認定されれば足りるといつている点など注意すべき大きな変化とみられる。このような社会の大きな変化、企業の存在のあり方、人間社会の構造への反省など思想的な問題が提起されている。それに増して重要なことは、行政のあり方に鋭い批判がなげられている点である。

行政は企業や個人の行動のいかんにかかわらず、社会的矛盾、社会的摩擦の調停者、その矛盾を未然に防止することの可能な組織体としての機能を負わされている筈である。もし行政が、社会の大きな変革期に際して、その社会的機能を充分に発揮しえなければ、その存在価値が問われるであろう。

図書館は情報蒐集、情報提供の媒体として、変革期の市民の要求に充分こたえうる能力をもたなければならない。図書館が市民の要求する資料を提供しえなければその存在意義はなくなるであろう。個人はいや応なく、この変化する社会へ適応して自ら生存の条件を作り出さなければならないのである。図書館の欠如は、正しくこの意味では「知的公害」ともいいうるであろう。

住民が図書館の設置を求めて運動することは、一つの現代の社会状況に適応しようとする本能的行動ともいえる。この運動は、ガルブレイスのいうところの市民運動といえるであろう。図書館を設置し、そのサービスを市民のものとしていく行動を援助することもまた、図

書館に課せられたる使命といいうる。

5　社会教育と図書館

日本における図書館の歴史はかなり古く遡るが、近代社会以降を考えても、図書館はかなり早い時期に出現している。新体時の創始者といわれる湯浅半月が、欧米に図書館学を研究に留学したのは明治35年であり、その遠因は、父湯浅治郎の明治5年夜中に創設した簡易図書館、「便覧会」にあるといえよう。東京都に最初の図書館がつくられたのは明治20年である。「明治二十年（1887）、千代田図書館の前身である大日本教育会附属書籍館が、当時神田一ツ橋通町に創立されてから、満八十年にあたる。この期間に、設置者、館名、位置など何回かの変遷をへて、今日に至つた。この書籍館は、明治になってから、東京につくられた、当時の用語でいえば「通俗」の現在の言葉でいえば社会教育を目的とした最初の図書館であった。」と『千代田図書館八十年史』は述べている。

日本における社会教育に関する一般的規定が文部省の官制の中に登場するのは、明治19年2月（1886年）の文部省官制にはじまる。宮坂広作著「近代日本社会教育政策史」は次のように述べている。『社会教育に関する一般的規定が文部省の官規中に登場したのは、1886年（明治19年）二月の文部省官制に、学務局第三課の所管する事務事項として、師範学校・小学校・幼稚園とならんで「通俗教育ニ関スル事務」が掲げられたときに始まる。「通俗教育」ということばで意味されたものが何であつたかはさだかではないが、同官制では書籍館・博物館を教育会・学術会・専門学校などとともに学務局第四課の所管としており、通俗教育という官庁語の概念は図書館・博物館などの社会教育施設を含むものではなかつたと考えられる』と。これによれば、図書館は所謂「通俗教育」の範疇には含まれていなかつた。その後の図書館の発達史を観すれば、所謂文部省の通俗教育という内容は、後に社会教育的という概念に発展していくものと思われるが、図書館がその主流には位置することはなかつたことは明らかである。

日本の図書館の源流は勿論かなり古い時代に遡るが、キリスト教国にあって中世の修道院が秀れた文書館の機能を果してきたように、江戸時代には各藩の藩校とその「書籍預」の場所が図書館の役割を果してきている。金沢文庫の例などはあげるまでもないであろう。いま一例として青森県の「図書館運動史」から引用してみよう。『青森県における藩政時代の文庫は、それぞれの藩情に即した学問を奨励して設けられたもので、青森県においては寛文九年（1669年）に八戸藩主南部直政（二代）が、藩士道中を主体に文武を奨励して藩内に設立した「弘観舎」が公共図書館の源泉である。（同書20頁）』と述べている。しかし、このように各藩に簇生した図書館は武士階級即ち幕藩体制下の支配階級＝藩官僚の学問のために設けられたものであつて、一般に公開される近代図書館とは性格が異なつている。もしこのような各地の図書館がそのまま近代化と歩みを共にして、民衆のものとして公開されて

発達していれば、今日の図書館の現状は全く面目を異にしていたであろう。しかし、先に述べたように、明治の学制改革によつてまず、とりあげられたのは学校教育中心の上からの教育体制であり、通俗教育＝民衆教化の手段として、その後発展していく社会教育の分野においても、学校教育の延長としての、教化が主要な目的であり、国民の自発的な自己教育の要求に基礎をおくところの社会教育の発展の方向は、日本の国家主義的教育観支配の巨大な波にのまれて発達をさまたげられてきた。

図書館の歴史は古いにもかかわらず、通俗教育や社会教育の中に正当に位置づけられることもなく、また社会教育という極めて広い範囲の教育体系の中に組みこまれることなく、社会教育の傍流として細々とその存在を保つてきたといえる。この近代社会における畸形的な社会教育のあり方と図書館の衰弱した成長過程は、今日の巨大な情報社会の中でも、その病痕を深く止めている。社会教育と図書館とは、全く系統を異にする異根の生物の如く、互に扶助協力の体制をとることなく、各機関の内部の間においても、些細な見解の相異、歴史的系譜の異をとって、社会教育の進歩をさまたげている事実がまだ克服されていないが、奉仕する手段、奉仕の対象はちがっても、同じ社会教育の範疇にある奉仕機関が互に協力していくことは極めて重要な段階を迎えているといえよう。既に明治時代の終りに、図書館界の先覚は、こうした事実について鋭い指摘をしている。明治４１年２月２５日発刊、図書館雑誌第２号において、田中稲城氏は「普通図書館と普通教育の効果附試験制度」と題する論考の中で次のように述べている。

「高等図書館の研究家の為に必要なるは何人と雖も異論なき所なれど、普通図書館の一般公衆の為に必要なるは、近来識世人の注意を惹起したるにも拘わらず、猶都鄙に於て実際其設立を見ること甚だ多からざるは遺憾に堪へざるなり。蓋し今の教育とは単に学校教育のみを意味せらる者にして、官民共に学校の建築設備に汲々とし、其費用も亦頗る巨額に達し、地方経済上自ら図書館設立を顧るに遑あらざるは勢の免がれざる所なりん。果して然らば、此際普通図書館の必要は学校に譲らず、特に普通教育の効果を顕著ならしむるに於て必須の機関たることを疾呼し、官民の注意を喚起するは決して無用の事に非るべし」（図書館雑誌合冊号　９５頁）

ここで高等図書館と呼ばれているのは、今日の専門図書館の謂であり、普通図書館とは公共図書館を称していることは勿論である。ちなみに、当時日本の図書館の数は誠に微々たるものであり、図書館雑誌創刊号に記載されている、明治３９年１月３１日現在の文部省調査による、全国図書館一覧表によれば、官公私立を合わせて、全国１７０館にすぎない。而もこのうちには大学図書館なども含まれているから、公立図書館の数は極めて少なかった。それにしても、明治末に、公立図書館の任務を学校教育に劣らず重視し、教育的機能の社会的意味を鋭く指摘していることは注目に価する。

その後、図書館はその物質的側面の発展をも充分なしてこなかったが、同時に秀れた図書

館人の教育をも怠つてきたといえる。時に秀れた先覚が出て、このように警鐘を鳴らしてもその裾野はせまく、社会教育という分野で充分その市民権を主張し、根を張る勢力が形成されてきたとはいえない。ここで図書館の機能を述べることは蛇足に類する。むしろ、過去の社会教育の流れのなかにおける図書館の歩み、その位置を充分反省批判することによって、新しい社会に適応した図書館像を創つていかなければならないであろう。

6　統計よりみた活動内容

昭和４１年６月より開館して昭和４５年度まで、４年１０ケ月の間における、図書館利用の推移について比較すると以下のようになる。

(a)　利用者の延び

表２によって、5ケ年間の利用者の延びをみると、成人において昭和４１年度を１００とすると昭和４５年度は３６７で３倍半強の利用者を数える。これは、昭和４４年に国領分館、昭和４５年度につつじヶ丘分館が開設したことにもよるが、調布市の図書館利用が、かなり一般市民の間に普及してきたとみることができる。特に児童においては実に７倍の延びを示していることは注目さるべき現象といえる。調布市の図書館活動の重点が児童奉仕に置かれていることにもよるが、図書利用の目的が図書館活動の本旨であることを考えると、子どもの図書館利用は、専ら図書の借り出し、又は閲覧にあることは明らかでありその効率は極めて高い。

読書行為は、知的営為なので、テレビその他のあそびともちがって、かなり持続した意志力と注意力の集中と、知的興味を必要とする。その意味で子どもの読書がのびていることは今後共努力すべき方向を示している。

(b)　貸出登録の状況

貸出登録率は図書館活動の重要なバロメーターであり、昭和４１年を基準として、年々増加を示し、昭和４５年度で１３.１％を記録している。全市民の１３％が登録していることになるが、人口も少しづつ増加しているので、貸出登録の実質的なのびが、かなりはつきり示されているわけである。勿論この程度の登録率は決して高いとはいえない。ことに分館網を整備して、誰でもその居住地の近傍の図書館に本を借りにいける条件を整えることが、現代図書館活動の基本的条件となることは明らかである。ここでも注目すべきは、児童の延び率であり、４１年度に比較すると、6.6倍の登録を示している。

読書が一種の知的習慣であり、子どもの時代に読書習慣を養つておくほかには、読書への習慣づけの方法がないことを思えば、子どもの登録ののびも注目されてよい現象であろう。恐らく分館網の整備に伴い、子どもの登録率は、並かに高まつていくものと思われる。

(c)　貸出数の推移

貸出数も利用者数、登録数に比例して伸長しているが調布図書館の現在の最も大きな活

動上の欠点は、蔵書の不足である。書庫の蔵書能力の乏しきこと、蔵書の少ないこと、図書購入費の極めて貧弱なことなど、様々な原因により中央館、分館を通じて市民の読書意欲をかきたてる魅力に乏しい。図書館の魅力は何といつても豊かな新鮮な蔵書にあることは論を俟たないが、その点調布図書館の大きな欠点といえる。しかし、このような欠陥にもかかわらず、貸出し率も着実に延びている。延び率において、成人で昭和41年度の6.5倍、児童においては17.6倍を記録している。また一人当りの利用冊数についてものびているが、既にのべたように成人の場合には蔵書内容にも問題があるので横這いを示しているが、児童は、着実に利用をのばし、1人当り年間8.1冊となっている。

(d) 蔵書数の推移

蔵書は予算その他の制約から、年度末蔵書数が、中央館、分館二つ併せて約4万冊を数えるにすぎない。廃棄などはできるだけ制限しながら必要最小限に止めているが、蔵書の数は極めて僅少であり、市民1人当りの冊数は0.27冊にすぎない。少くとも市民1人当り1冊が目標であるので、まだ目標へは遥かである。

附1

文化の断層を埋める運動

―――― 社会の学校としての現代図書館 ――――

明治にはじまる日本社会の近代化は、ある特長をもっていた。一般的に近代社会の創出とは、文化史的にみられば、国民的文化の創出過程でもある。一部の人々に独占されていた文化が、広く国民の間に浸透し、国民的規模における文化が創られる可能性が開かれることである。端的にそれを示すのが、人権優先思想であり、言論の自由の確立であり、個人の思想的な自立である。近代社会の開化によって、個人の日常生活のなかに、共通の言葉、共通の文化意識が形成され、その形成過程を通じて、国民的文化創造の基盤が用意される。近代的教育制度の創設はその一つの保証である。ところが、長い時間をかけて変革され形成された、ヨーロッパ先進国の市民社会と異なり、そのヨーロッパを模範として制度を直輸入した後進国の場合には、事情は著しく異なる。後進国が先進国の制度面を輸入する場合、その受容層は国民全部ではなく、まず摂取能力のある知識層や、この受容を促進し、上から近代社会の創出をになう国家のエリート層が媒介者としての役割を演ずる。この現象は、後進国には共通した現象であり、帝政ロシヤなどにおいても同じであつた。チエホフは「手帖」のなかで、次のように述べている。『われわれの自尊心や自負心はヨーロッパ的だ。しかし、発達程度や行動はアジア的だ』。チエホフは、一九世紀

後半のロシヤ知識人の思想と行動についてこのように批評したのであるが、ヨーロッパ文化の摂取によって、観念の上では近代的自我に目覚めても、彼等の生きた土壌は、農奴制の体質に腐蝕されたロシヤ社会なのであった。

日本の場合も、事情は余りちがわない。日本の知識層や官僚（大学教授などを含め）は、ヨーロッパ文化の輸入者であり翻訳者ではあつても、一般国民との間の文化の媒介者として、近代文化を日本の土壌に根づかせるための、国民的文化創造の実践者ではなかつた。むしろ、一般国民の知らない外来思想（外国語解読能力なども含めて）を独占することによって、知的権威の保持者として一般国民に君臨しえたのである。

このような文化状況の一つの例としてあげられるものに、次のものがある。日本の近代文学の系譜には、純文学と衆文学という二つの範疇があり、これはヨーロッパには例をみない現象である。勿論ヨーロッパでも、文学を読む層と読まない層はあろう。だが日本では、文学の受容者が、高尚な文学である「純文学」のわかる一部の知識層と、他方、幾分軽べつの意味をこめて呼ばれる「大衆文学」にかかわりあり、一般庶民とに分けられてきた。恐らく、戦前純文学の主たる受容者は、高等教育をうけた人々や特殊な文学青年たちだけであつたと思われる。純文学が、人生探求の世界であるとすれば、大衆文学は、庶民の娯楽にすぎないのである。イギリスの秀れた現代作家の、グレアム・グリーンは、自分の作品をNovel（小説）とEntertainment（楽しみ）とに分けている。この区別は、作品の上では、はつきり分けてしまえない共通性をもつと思われるが、一人の作者が自分の作品を、このように分けていることは興味深い。日本の作家の場合は、特に戦前では、純文学作家と大衆文学作家は全く別な人たちであった。文学の目的そのものが出発からちがっていた。当然文学のリアリズムについての考え方もちがってくる。近代以降の日本には、真の国民的作家とよばれる人はなかったといえる。ビクトル・ユーゴーは日本流にいえば大衆作家なのかも知れないが、フランスでは国民作家である。その作品は、国民の各層から愛され理解される作品なのである。人生探求と娯楽とが区別され、その受容層が異なるという分裂現象はない。

文学の問題に限らず、他の方面でも同様な現象がみられる。文化をになう選ばれた特殊層と、文化に無縁な大衆層との分裂現象のなかに、わたしは日本の近代社会の歪みをみる。このような分裂状態のなかからは、真の国民的文化は生れてこない。勿論すべての国民が、文化を同じ程度に理解するわけではない。その受容や創造行為には深浅があり、かかわり方のちがいが当然存在する。また近代社会は分業と専門化の社会でもある。それにもかかわらず、職業や専門のちがいを越えて存在しなければならないのが国民的文化であるとわたしは考える。つまり文化意識の同質性の存在であり、市民社会のなかにおける同意性である。全くかかわりあいをもたない異質な文化意識の存在と共通な文化地層の欠如とは、社会が未開な部分を残していることを物語る。わたしは日頃、各地域の読書会や集会などに参加して、今日の社会の中に、我々が明治の近代化以来埋めることができずに残してきた、このような文化の分裂状態を感ずる。こ

のことによって、わたしじしんが分裂者の一人であることを教えられる。図書館が現代社会に存在する意義は、このような文化状況をうち破るための、社会の学校として、市民の日常の学習活動に奉仕することにある。図書館が資料の秀れた貯蔵所であるだけでなく、積極的に市民の文化活動の媒介者として奉仕する義務は、図書館人が、日本の近代社会の歪みを意識するところから発想される。有機体である社会は、未開な歪みを残しては健全ではありえない。図書館の啓蒙機能は、我国の場合には、積極的にとりくむべき課題として、我々図書館人に迫つてはこないであろうか。

附2

社会教育の変革期における図書館

――――社会教育審議会の答申にふれて――――

昭和45年9月22日に、文部省の諮問に対して、社会教育審議会は「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」という中間答申を発表した。戦後の社会教育は、公民館という実施機関を中心として、昭和24年に制定された「社会教育法」に拠つて行なわれてきた。文部省が社教審に諮問したのは、1960年代から1970年代のはじめにかけて、急激に変化の速度を早めつつある社会構造に対応するための「社会教育のあり方」について、処方箋を求めたのであろう。またそのための法改正の必要が起つていると思われる。社会構造の急激な変化は、まず経済変動となつて現われ、それが政治に反映し、長期的な変化の兆しとして、既成社会の解体を思わせるような方向性をもつて、様々な変化を生んできている。これらの象徴的な現象は、1969年から70年へかけて、世界的規模で展開された学園紛争にみることができる。変革期の社会に対応できなかつた、旧い学園体制の崩壊現象の中に、社会構造の矛盾が鋭く露呈して、爆発的な紛争形態をとつたものとみられよう。しかし、これは学園紛争という社会の局所的現象として捉えることを許さない、1970年代の動向を暗示している。教育といえば、我々は法制化された学園を想定し勝ちであり、事実上学習は行なわれていても、学校教育以外での教育現象に対して、「教育」という定義を用いる社会習慣はない。「社会教育」という概念が明瞭な教育過程の一環として導入されたのは戦後であり、法制的な背景をもち、行政行為として義務化されてからまだ長い年月が経つているわけではない。そのために、社会教育は、学校教育と比較されるとき、まだ充分な市民権すらもたず、その基礎は極めて脆弱であり、僅か4分の1世紀の実践では、実りある成果をあげていない。実験の域を出ていないともいえる。そのため、社会教育とは何を指すのか、その定義についても明確さを欠い

ている。最もわかりやすいのは、「学校教育以外の教育はすべて社会教育である」という。結局定義したことにならない定義が最もよく現状を示している。定義であるからには、少くとも明確な外延と内包をもつて、対象を限定し、実践化しうる方法論をもつていかくてはならない筈である。しかし、恐らく社会教育という仕事に従事している当事者が這般の事情を一番良く知つているものと思われる。

この混迷状態は何から由来したかは極めて困難な問題であるが、我国における一般国民の教育というものに対する考え方が明確でない点に、一つの原因を見出す。教育といえば学校教育を指し、学校教育も国公立が主流であつて、国家が近代社会の中で上から創出してきたという歴史的な原因が教育を極めて狭義にしか理解しない結果を生んだものであろう。戦前における官学と私学との実態を比較するだけでも、この間の事情は充分知ることができる。この根本には、教育対象をどのように捉えてきたかという問題の考察が必要とかる。教育が自己目的でなく手段である限り、教育はある目的たる対象をもつ筈である。日本の場合、教育の対象は決してルソーの述べているような個人でもなく、独立した自由な人格者たる近代人間でもなかった。教育の目的が、自由な考えをもつ個人の創造におかれたのではなく、国家目的に奉仕しうる人間を創ることに置かれていた。教育は、誰にも奉仕することのない、独立した生得の人間性や個性をもつ個人の人格形成に関与することを目的にしたのではなかつた。個人が生きていくためには、労働し協業しなければならないのが、近代社会の個人の存在様式である。

それが独立の自営農民であろうと、企業の勤人であろうと、医師や教師や弁護士であろうとも、選ぶところはない。まずそういう職業的人間以前の一個の人格的存在としての人間形成に関与し、独立した近代市民の創造に寄与するところに、教育という手段としての社会的機能がある筈である。もし教育を発生的に捉えるならば、個人の集団としての社会の発展史にそくして、国家の形成より先に、原型としての教育行為が自然発生的にあった筈である。家庭の中における教育は正にその代表的なものであり、氏族のような原始的な集団社会においても、一定の掟やタブーなど、社会集団として必要な事項は、教育という制度化されたものでなくても教えられてきた筈である。しかし、現在我々が問題とする教育という範疇のものは、近代市民社会以降の近代的国家の下における教育の問題である。国家が莫大な予算を支出して教育する以上、国家目的が反映することは止むをえないという考え方も成立するであろう。自由な人格、独立した人格に関与し奉仕する中立的な教育観は、啓蒙期或いは自由主義的、個人主義的教育観として批判されるかも知れない。しかし、国家体制の選択や思想の形成を伴なうイデオロギーの構築は、ポスト・エデュケーションの問題であつて、教育は自己目的でなく、あくまでプロセス（過程）の問題であると考えられる。恐らく現実の教育の実態においては、国家の体制下にある以上、それぞれの社会体制の相違によつて、教育の理念を異にしているのが現実である。それにも拘らず、教育はゴールではなく、プロセス（過程）でありつづけようとするからば、この激動期の人類にとつて、また教育に対しては最後の審判を下すことのできない時代に

置かれているといわざるをえない。教育が学校教育に限定されることなく、ユネスコで唱導しているような「生涯教育」という考え方が生まれてきたのは、蓋し制度としての学校教育特に近代以来発展しつづけてきた学校教育制度に対する反省乃至、学校教育機能そのものの限界を感じたことから生まれてきたものであろう。社会構造の多元化と複雑化によって、個人をとり巻く環境の変化は、人間の外界適応能力の限界をも自覚せしめた。人間は外界適応能力をもつことによって生存し、文化を創造しつづけてきたのである。文化はいわば外界への積極的、能動的作動、変化への欲求、新しい解釈、発見など様々な人間の能力の適応と応用との結果である。しかし、現在直面しているように、もし人間の能力と外界とのバランスが破れ、外界適応能力を喪失してしまえば、最早人類に未来は望めないことになる。教育は根源的には、それぞれ個体差をもつている社会的存在としての人間の能力を開発し、外界適応力を創造していくことにおかなければならない筈である。それは単なる小集団である氏族を超え、封建制的分封社を超え、遂には近代国家をも超える機能をもたなければ、その本来の機能を発揮できないであろう。教育をイデオロギーや信条や特定の思想にのみかかわらせて理解し、国家であろうと何であろうと一つの枠の中に閉じこめようとするとき、教育は死滅するのではないだろうか。

教育は、学校教育や社会教育という法制的人為的なものを超えて、人間の生誕から死滅まで執拗に持続する過程（プロセス）そのものであり、特定の奉仕者をもつことなく、各社会の個人の成員一人一人の生涯にわたって、ユニークなかかわりをもつ手段である。それを家庭で行なうか、学校（自治体や国家）が行なうか、個人（塾や私人）が行なうか否かをとわない外延をもつ。

図書館は、極めて古い歴史をもつ。その濫觴は文書館であった。文書を保存し、後世に伝える為の場所から出発した。たとえそれがある時代に支配者の手段であったとしても、その歴史的な意味は、それを超えて文化を保存し継承する社会的機能を果してきた。文字の発明によつて、人間が思想を保存し継承しうるようになると、文書による思想伝達の手段は急速に人間の思考領域を拡大し、広大な思想の発展をうんだ。ボレミークが可能になり、より豊かなユニークな文化が地球のいたる所に発展した。少くとも三千年近い歴史をもつ図書館の機能は、人類の文化史とその歩みを一にしてきた。

現代の図書館は、文書の保存伝達に止まることなく、それを媒介することによつて、新らしい文化の創造に役立つことが要求される。それは教育機能における万人への普及であり、文化受容の差別廃止への挑戦である。図書館が秀れた社会の学校であり、思想の自由を基礎にした個人の人格形成への媒体でならなければならないことはいうまでもない。図書館は文書を保存し普及する書庫である静態的な機能、受動的な媒体に止まることなく、多くの研究者集団をかかえて、個人の自由な要求に応じうる社会の学校であることが求められる。恐らく、このように図書館は急激な社会変動に対応するための存在として、自ら学習する個人に奉仕し、人類が存続していくための媒体とならねばならない。いま図書館人に課されている課題は深く、広く、

無限である。図書館の社会的存在もまた、教育と同じように「過程」（プロセス）にほかならない。それは教育に奉仕する秀れた手段としての「過程」である。

表 1.　図書館利用状況

自　昭和45年4月　開館日数　　日
至　昭和46年3月　人口　155,199（s45.4.1現在）

暦年	開館日数	貸出登録者 一般 月別登録者数	貸出登録者 一般 累計	貸出登録者 児童 月別登録者数	貸出登録者 児童 累計	貸出登録者 計 月別登録者数	貸出登録者 計 累計	入館者 一般	入館者 児童	入館者 計	入館者 1日平均	図書貸出件数 一般	図書貸出件数 児童	図書貸出件数 計	1日平均 一般	1日平均 児童	1日平均
	日	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	冊	冊	冊	冊	冊	冊
44年 4月	22	2,357	2,357	1,913	1,913	4,270	4,270	6,862	4,135	10,997	499	4,086	4,623	8,709	185	211	396
5	22	1,050	3,407	1,067	2,980	2,117	6,387	8,909	5,072	13,981	635	5,067	5,522	10,589	230	251	481
6	23	891	4,298	866	3,846	1,757	8,144	9,673	6,153	15,826	688	5,513	6,650	12,163	239	289	528
7	23	898	5,196	1,462	5,308	2,360	10,504	10,002	8,034	18,036	784	4,992	7,969	12,961	217	346	563
8	23	1,112	6,308	1,125	6,433	2,237	12,741	12,094	10,490	22,584	981	6,409	10,651	17,060	278	463	741
9	20	767	7,075	910	7,343	1,677	14,418	10,191	9,154	19,345	967	6,152	9,478	15,630	307	473	780
10	22	648	7,723	799	8,142	1,447	15,865	10,550	10,209	20,759	944	6,473	10,650	17,123	294	484	782
11	21	551	8,274	588	8,730	1,139	17,004	9,255	8,595	17,850	850	5,801	9,509	15,310	276	452	728
12	16	520	8,594	581	9,111	701	17,705	7,942	6,605	14,547	909	5,334	9,219	14,553	333	576	909
45年 1	16	469	9,063	403	9,514	872	18,577	8,906	6,908	15,814	988	5,081	7,777	12,858	317	486	803
2	18	546	9,609	488	10,002	1,034	19,611	10,496	7,762	18,258	1,014	6,020	8,685	14,705	334	482	716
3	18	553	9,962	592	10,394	745	20,356	8,585	7,510	16,095	894	5,013	7,894	12,906	278	438	716
計	244	9,962	9,962	10,394	10,394	20,356	20,356	113,465	90,627	204,092		65,941	98,627	164,568			
月平均	21	830		866		1,696		9,455	7,552	17,007		5,496	8,219	13,715			
1日平均		41		35		76		465	371	836		270	404	674			

註　開館日数は，中央館，国領分館，つつじケ丘分館（7月20日開館）の単純平均値

登録率　20,356／155,199＝13.1%　貸出率＝164,568／155,199 ≒1.06冊

蔵書回転率　164,568／41,771＝3.93回（一般65,941／22,142＝2.97　98,627／5,709＝17.3）

貸出利用率　164,568／20,356＝8.1　冊（一般65,941／9,962　＝6.6冊　98,627／10,394＝9.5）

図書保証率　41,771／155,199＝0.27冊

表2　年度別に見た図書館利用の推移

		昭和41年度	昭和42年度	昭和43年度	昭和44年度	昭和45年度
利用者数	一　般(a)	人 42,977	人 70,073	人 86,104	人 96,001	人 113,465
	児　童(b)	12,726	32,835	44,502	61,447	90,627
利用率＝利用者数／奉仕人口	計　(c)	55,703	102,908	130,606	157,448	204,092
	伸率 (a/b/c)	% 100 100 100	% 163 258 185	% 200 350 235	% 224 483 285	% 264 712 367
	利用率	45.8	76.8	92.5	99.8	131.5
貸出登録	一　般(a)	人 2,161	人 4,906	人 5,747	人 8,078	人 9,962
	児　童(b)	921	4,387	4,999	7,659	10,594
登録率＝登録者数／奉仕人口	計　(c)	3,082	9,293	10,746	15,737	20,556
	伸率 (a/b/c)	% 100 100 100	% 227 482 302	% 266 549 349	% 374 841 511	% 461 1128 661
	登録率	2.5	6.9	7.6	10.6	13.1
貸出数	一　般(a)	件 10,115	件 26,307	件 41,287	件 49,437	件 65,941
	児　童(b)	5,587	23,397	41,209	64,299	98,627
貸出率＝貸出冊数／奉仕人口	計　(c)	15,702	49,704	81,496	113,736	164,568
	伸率 (a/b/c)	% 100 100 100	% 260 419 317	% 398 738 519	% 489 1151 725	% 652 1765 1048
1人当利用者数＝貸出冊数／登録者数	貸出率	冊 0.13	冊 0.37	冊 0.58	冊 0.77	冊 0.81
	1人当利用数 (a/b/c)	冊 47 6.1 5.1	冊 5.3 5.3 5.3	冊 7.0 8.2 7.6	冊 6.1 8.4 7.3	冊 6.6 9.5 8.1
蔵書数	一　般(a)	冊 7,810	冊 12,272	冊 16,389	冊 22,142	冊 28,068
	児　童(b)	1,237	2,588	4,392	7,570	13,703
保証率＝蔵書数／奉仕人口	計　(c)	9,047	14,860	20,781	29,712	41,771
	伸率 (a/b/c)	% 100 100 100	% 157 209 161	% 210 355 225	% 284 612 329	% 540 1107 441
	保証率	冊 0.07	冊 0.11	冊 0.15	冊 0.20	冊 0.27
蔵書回転率（図書の年間利用回数）	一　般	1.3 回	2.1 回	2.5 回	3.0 回	3.0 回
	児　童	4.5	9.0	9.4	17.3	17.3
	平　均	1.7	3.3	3.9	3.9	3.9

職業別各月別入館統計

区分＼月		4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
就学	中学生	940	1,133	1,138	1,516	2,498	1,322	1,292	1,215	884	948	1,132	987	15,005	13.2
	学生	2,192	2,855	2,874	3,001	3,109	2,928	3,054	2,368	2,552	2,898	3,445	2,428	33,684	29.6
	勤人	1,107	1,307	1,519	1,517	1,677	1,523	1,615	1,419	988	1,188	1,401	1,363	16,624	14.7
	主婦	927	1,242	1,470	1,420	1,961	1,767	1,864	1,641	1,271	1,328	1,573	1,583	18,047	15.9
	自営	77	101	124	126	147	106	109	111	79	88	124	116	1,308	1.2
	その他	505	699	860	725	769	696	830	683	585	600	665	565	8,182	7.2
	不明	1,114	1,572	1,688	1,697	1,933	1,849	1,786	1,818	1,603	1,856	2,156	1,543	20,615	18.2
	小計	6,862	8,909	9,673	10,002	12,094	10,191	10,550	9,255	7,942	8,906	10,496	8,585	113,465	100 55.6
	児童	4,135	5,072	6,153	8,034	10,490	9,154	10,209	8,595	6,605	6,908	7,762	7,510	90,627	44.4
	合計	10,997	13,981	15,826	18,036	22,584	19,345	20,759	17,850	14,547	15,814	18,258	16,095	204,092	100

各館別職業別各月別入館統計

区分＼月		4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
中央館	中学生	681	900	886	1,177	1,931	988	936	847	658	720	859	691	11,274	11.9
	学生	2,013	2,629	2,660	2,782	2,770	2,650	2,804	2,104	2,287	2,624	3,098	2,145	30,566	32.1
	勤人	1,027	1,185	1,394	1,327	1,405	1,236	1,299	1,168	828	967	1,144	1,164	14,144	14.9
	主婦	710	986	1,183	1,106	1,174	1,005	1,131	1,019	789	791	933	955	11,782	12.4
	自営	71	95	110	116	118	84	85	92	66	67	95	97	1,096	1.2
	その他	466	653	806	660	686	631	756	611	544	549	597	489	7,448	7.8
	不明	1,060	1,502	1,563	1,539	1,711	1,652	1,616	1,644	1,503	1,698	1,963	1,375	18,824	19.7
	小計	6,028	7,950	8,602	8,707	9,795	8,246	8,627	7,485	6,675	7,416	8,689	6,914	95,134	100 65.4
	児童	2,952	3,786	4,428	5,037	5,215	4,545	5,067	4,278	3,397	3,537	4,155	3,855	50,252	34.6
	合計	8,980	11,736	13,030	13,744	15,010	12,791	13,694	11,763	10,072	10,953	12,844	10,769	145,386	100
開館日数		24日	24	25	25	26	23	25	23	19	20	22	22	278日	
		374人	489	521	549	577	556	547	511	530	548	584	490	523人	

各館別職業別各月別入館統計

	区分＼暦月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比	
国領	中学生	259	233	252	275	421	253	253	269	157	185	224	234	3,015	23.8	
	学生	179	226	214	198	277	257	222	233	230	261	327	271	2,895	22.9	
	勤人	80	122	125	157	177	177	194	145	106	132	159	121	1,695	13.4	
	主婦	217	256	287	194	262	281	290	250	190	229	264	259	2,979	23.5	
	自営	6	6	14	9	20	20	18	15	11	17	20	15	171	1.4	
	その他	39	46	54	50	54	50	60	45	31	45	52	63	587	4.6	
	不明	54	70	125	123	150	136	123	123	76	113	113	112	1,318	10.4	
	小計	834	959	1,071	1,006	1,361	1,174	1,160	1,078	801	982	1,159	1,075	12,660	100	42.1
	児童	1,183	1,286	1,725	1,538	1,777	1,443	1,784	1,491	1,085	1,205	1,404	1,464	17,385		57.9
	合計	2,017	2,245	2,796	2,544	3,138	2,617	2,944	2,569	1,886	2,187	2,563	2,539	30,045		100
	開館日数	20日	19	21	20	22	19	21	19	15	16	18	20	250日		
		101人	118	133	127	143	137	140	135	125	136	142	127	131人		

各館別職業別各月別入館統計

つつじヶ丘	中学生				64	146	81	103	99	69	43	49	62	716	12.8	
	学生				21	62	21	28	31	15	13	20	12	223	3.9	
	勤人				33	95	110	122	106	54	89	98	78	785	13.5	
	主婦				120	525	481	443	372	292	308	376	369	3,286	57.9	
	自営				1	9	2	6	4	2	4	9	4	41	0.7	
	その他				15	29	15	14	29	10	6	16	15	147	2.7	
	不明				35	72	61	47	51	24	45	80	58	473	8.5	
	小計				289	938	771	763	692	466	508	648	596	5,671	100	19.8
	児童				1,459	3,498	3,166	3,358	2,826	2,123	2,166	2,203	2,191	22,990		80.2
	合計				1,748	4,436	3,937	4,121	3,518	2,589	2,674	2,851	2,787	28,661		100
	開館日数				8日	22	19	21	19	15	14	14	14	146日		
					218人	202	207	196	186	175	191	204	199	196人		

地域別各月別入館者統計（一般）

	地域＼暦月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比	
統計	野水・西町						1						1	2		
	飛田給	112	147	179	201	232	158	147	140	137	124	155	120	1,852	2.4	
	上石原	183	283	313	551	429	302	288	219	221	230	255	216	3,290	4.2	
	下石原	470	527	506	557	745	515	555	439	362	456	577	492	6,201	8.0	
	富士見	326	440	504	536	624	453	420	410	363	412	574	354	5,416	6.9	
	小島	499	601	617	690	688	578	730	588	535	649	663	532	7,370	9.5	
	布田（含上布田）	380	503	551	548	588	510	537	470	394	421	507	451	5,860	7.5	
	下布田	325	441	500	499	553	502	563	436	360	433	499	404	5,515	7.1	
	国領	896	1,012	1,129	1,083	1,336	1,193	1,118	919	738	927	1,167	1,066	12,584	16.2	
	染地	531	720	758	817	830	658	758	647	539	601	640	632	8,131	10.4	
	深大寺	244	349	386	359	499	365	363	312	302	329	319	294	4,121	5.3	
	佐須	143	182	181	178	230	181	153	142	117	141	153	132	1,933	2.5	
	柴崎	135	157	172	165	220	148	145	120	120	96	131	98	1,707	2.2	
	入間	52	81	97	70	106	80	72	70	43	67	66	69	873	1.1	
	東つつじヶ丘	70	85	100	98	137	107	132	93	74	85	83	73	1,137	1.5	
	西つつじヶ丘	103	136	178	369	806	682	656	644	460	500	582	553	5,669	7.3	
	若葉	104	126	149	163	171	144	142	130	111	114	118	76	1,548	2.0	
	仙川	38	58	89	83	78	71	57	78	46	44	51	38	731	0.9	
	緑ヶ丘	61	77	92	107	128	99	130	150	87	95	108	72	1,206	1.5	
	菊の台	179	184	209	226	315	247	276	245	178	186	279	185	2,709	3.5	
	市内小計	4,851	6,109	6,710	7,100	8,715	6,994	7,242	6,252	5,187	5,910	6,927	5,858	77,855	100	68.6
	狛江	330	407	441	464	568	479	541	492	391	421	483	497	5,514		4.9
	調布市外	609	800	881	878	880	894	974	740	716	822	941	702	9,837		8.6
	不明	1,072	1,593	1,641	1,560	1,931	1,824	1,793	1,771	1,648	1,753	2,145	1,528	20,259		17.9
	合計	6,862	8,909	9,673	10,002	12,094	10,191	10,550	9,255	7,942	8,906	10,496	8,585	113,465		100

地域別各館別入館者統計（一般）

	暦月 / 地域	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
館名	野水・西町														
	飛田給	109	144	178	201	228	155	141	134	154	123	154	118	1,819	2.9
	上石原	183	279	511	348	417	300	284	212	214	226	253	212	3,239	5.2
	下石原	468	520	497	555	731	501	550	433	359	448	566	483	6,111	9.7
	富士見	317	435	501	532	617	449	417	403	354	409	572	353	5,359	8.5
	小島	495	597	608	687	682	569	726	582	526	644	650	531	7,297	11.6
中央館	布田(含上布田)	378	502	548	548	583	507	536	468	391	418	501	446	5,826	9.3
	下布田	319	429	487	484	538	489	553	427	346	420	487	392	5,371	8.6
	国領	460	551	566	566	609	559	527	396	340	406	560	516	6,056	9.7
	染地	481	660	720	774	766	604	694	599	509	545	582	578	7,512	12.0
	深大寺	238	341	378	343	489	350	348	300	288	314	305	281	3,975	6.3
	佐須	113	144	144	154	196	156	124	115	94	119	121	97	1,577	2.5
	柴崎	70	86	100	92	121	85	85	76	72	58	81	55	981	1.6
	入間	52	80	95	59	74	60	52	54	34	52	49	51	712	1.2
	東つつじケ丘	60	76	92	73	80	71	80	67	60	64	63	51	857	1.3
	西つつじケ丘	90	122	163	162	157	121	131	155	115	124	135	121	1,596	2.5
	若葉	100	123	142	154	140	121	120	100	93	98	104	65	1,360	2.2
	仙川	37	57	87	76	71	67	53	60	41	41	47	36	673	1.1
	緑ケ丘	48	70	79	100	114	87	107	130	72	90	97	58	1,052	1.7
	菊の台	112	95	131	126	146	108	127	99	80	80	150	72	1,326	2.1
	市内小計	4,130	5,311	5,827	6,034	6,759	5,359	5,655	4,810	4,122	4,679	5,477	4,516	62,679	100　65.9
	狛江	283	346	385	394	454	385	408	358	325	337	365	383	4,423	4.8
	調布市外	598	763	856	832	815	843	928	709	687	778	883	650	9,342	9.8
	不明	1,017	1,530	1,534	1,447	1,767	1,659	1,636	1,608	1,541	1,622	1,964	1,365	18,690	19.5
	合計	6,028	7,950	8,602	8,707	9,795	8,246	8,627	7,485	6,675	7,416	8,689	6,914	95,134	100

地域別各館別入館者統計（一般）

	暦月 / 地域	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
館名	野水・西町						1						1	2	
	飛田給	3	3	1		4	3	5	5	2		1	2	29	0.3
	上石原		4	2	3	12	2	4	7	7	3	2	4	50	0.4
	下石原	2	7	9	2	12	14	5	6	3	5	11	9	85	0.8
	富士見	9	5	3	4	7	4	3	7	9	1	2	1	55	0.5
	小島	4	4	9	3	5	9	4	6	8	4	13	1	70	0.7
国領分館	布田(含上布田)	2	1	3		4	5	1	2	3	3	6	5	33	0.3
	下布田	6	12	15	15	15	13	10	9	14	13	12	12	144	1.4
	国領	436	461	563	514	725	633	590	523	398	516	605	549	6,513	63.4
	染地	50	60	38	43	64	54	64	48	30	56	57	54	618	6.0
	深大寺	6	8	8	15	8	14	11	12	11	14	11	13	131	1.3
	佐須	30	38	37	23	34	24	29	27	23	22	31	35	353	3.4
	柴崎	65	71	72	63	92	52	60	44	47	37	48	43	704	6.9
	入間		1	2	2	3	1		2		1		3	15	0.1
	東つつじケ丘	10	9	8	15	13	9	8	10	2	5	5	7	101	1.0
	西つつじケ丘	13	14	15	18	14	10	19	28	13	16	21	20	201	2.0
	若葉	4	3	7	5	10	9	9	9	5	9	6	6	80	0.8
	仙川	1	1	2	7	4	2	2	8	3	3	2	2	37	0.4
	緑ケ丘	13	7	13	7	12	11	22	17	10	5	10	14	141	1.4
	菊の台	67	89	78	75	80	80	81	75	60	66	87	73	911	8.9
	市内小計	721	798	883	814	1,118	958	927	845	646	779	930	854	10,273	81.1
	狛江	47	61	56	55	71	57	78	82	43	52	53	67	722	5.7
	調布市外	11	37	25	45	53	44	34	25	24	40	52	48	438	3.5
	不明	55	63	107	92	119	115	121	126	88	111	124	106	1,227	9.7
	合計	834	959	1,071	1,006	1,361	1,174	1,160	1,078	801	982	1,159	1,075	12,660	100

地域別各館別入館者統計（一般）

	暦月 / 地域	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
館名 つつじケ丘分館	野水・西町														
	飛田給							1	1	1	1			4	0.1
	上石原										1			1	
	下石原					2					3			5	0.1
	富士見										2			2	
	小島					1				1	1			3	0.1
	布田（含上布田）					1								1	
	下布田														
	国領				3	2	1	1			5	2	1	15	0.3
	染地											1		1	
	深大寺				1	2	1	4		3	1	3		15	0.3
	佐須				1		1					1		3	0.1
	柴崎				10	7	1			1	1	2		22	0.5
	入間				9	29	19	20	14	9	14	17	15	146	3.0
	東つつじケ丘				10	44	27	44	16	12	16	15	15	199	4.0
	西つつじケ丘				189	635	551	506	461	332	360	426	412	3,872	79.0
	若葉				4	21	14	13	21	15	7	8	5	108	2.2
	仙川					3	2	2	10	2		2		21	0.4
	緑ケ丘					2	1	1	3	5		1		13	0.3
	菊の台				25	89	59	68	71	58	40	42	40	472	9.6
	市内小計				252	838	677	660	597	419	452	520	488	4,903	100 86.5
	狛江				15	43	37	55	52	23	32	65	47	369	6.5
	調布市外				1	12	7	12	6	5	4	6	4	57	1.0
	不明				21	45	50	56	37	19	20	57	57	342	6.0
	合計				289	938	771	763	692	466	508	648	596	5,671	100

地域別各月別入館者統計（児童）

	暦月 / 地域	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
統計	野水・西町			1										1	
	飛田給	88	133	109	139	178	137	110	131	97	85	89	70	1,366	1.8
	上石原	143	218	215	234	257	227	179	129	108	137	182	111	2,140	2.8
	下石原	386	454	572	645	600	565	535	476	404	337	440	417	5,831	7.5
	富士見	88	94	116	208	263	203	197	168	158	163	189	163	2,010	2.6
	小島	332	381	471	613	602	426	450	414	238	287	318	302	4,834	6.2
	布田（含上布田）	387	478	572	598	518	436	473	421	279	255	270	305	4,992	6.4
	下布田	205	321	323	367	630	407	456	295	246	266	343	340	4,179	5.4
	国領	949	927	1,171	1,024	1,205	960	1,217	1,111	748	826	1,026	1,048	12,212	15.8
	染地	506	554	737	787	738	720	930	735	674	707	745	689	8,522	11.0
	深大寺	68	124	200	245	246	226	301	235	205	224	300	257	2,631	3.4
	佐須	32	56	56	69	106	102	125	74	66	76	133	163	958	1.2
	柴崎	72	99	153	117	160	158	140	106	59	105	138	118	1,425	1.8
	入間	15	37	33	54	89	73	145	157	86	68	138	105	1,000	1.3
	東つつじケ丘	24	40	31	74	120	118	136	123	85	103	76	79	1,009	1.3
	西つつじケ丘	62	100	119	1,349	2,958	2,665	2,691	2,305	1,718	1,746	1,797	1,795	19,305	24.9
	若葉	18	30	38	53	47	50	72	64	50	53	72	64	611	0.8
	仙川	6	10	19	24	25	13	14	21	12	52	48	46	290	0.4
	緑ケ丘	44	33	72	81	84	73	99	75	69	68	86	74	858	1.1
	菊の台	63	140	188	320	468	381	486	280	235	243	256	300	3,360	4.3
	市内小計	3,488	4,229	5,196	7,001	9,294	7,940	8,736	7,320	5,537	5,801	6,646	6,346	77,534	100 85.6
	狛江	324	419	448	439	480	525	687	766	573	581	593	663	6,498	7.1
	調布市外	69	141	159	161	196	218	235	189	91	135	128	138	1,860	2.1
	不明	254	283	350	433	520	471	551	320	404	391	395	363	4,735	5.1
	合計	4,135	5,072	6,153	8,034	10,490	9,154	10,209	8,595	6,605	6,908	7,762	7,510	90,627	100

地域別各館別入館者統計（児童）

	地域＼暦月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比	
館名 中央館	野水・西町			1										1		
	飛田給	85	133	103	128	173	126	107	118	95	83	88	69	1,308	3.2	
	上石原	139	214	212	231	254	217	174	127	105	133	175	103	2,084	5.2	
	下石原	377	446	538	621	583	547	515	464	390	323	430	400	5,634	13.9	
	富士見	88	94	116	203	263	203	196	167	157	162	189	162	2,000	4.9	
	小島	328	380	470	610	600	425	442	408	231	285	313	291	4,781	11.9	
	布田(含上布田)	387	477	568	596	512	435	466	420	277	253	261	295	4,947	12.3	
	下布田	181	302	306	348	609	391	415	279	257	252	329	330	3,979	9.9	
	国領	121	129	154	166	145	159	204	241	147	181	258	208	2,113	5.2	
	染地	462	488	670	703	631	661	863	679	635	656	675	639	7,762	19.3	
	深大寺	55	96	176	229	228	204	272	200	163	181	258	235	2,297	5.7	
	佐須	23	43	59	29	75	66	63	35	40	48	54	34	549	1.4	
	柴崎	6	12	30	26	37	43	29	24	14	13	20	15	269	0.7	
	入間	13	35	28	30	20	19	46	55	19	16	65	45	391	0.9	
	東つつじケ丘	23	36	25	31	34	25	25	23	22	25	22	21	312	0.8	
	西つつじケ丘	37	51	59	63	44	36	31	45	23	25	55	55	524	1.3	
	若葉	11	19	26	29	29	28	44	41	32	28	43	41	371	0.9	
	仙川	6	10	19	17	21	10	6	12	7	35	43	42	228	0.6	
	緑ケ丘	26	30	55	68	66	50	56	44	49	52	62	42	600	1.5	
	菊の台	10	31	24	28	9	16	21	7	3	7	8	7	171	0.4	
	市内小計	2,378	3,026	3,619	4,156	4,353	3,661	3,975	3,389	2,646	2,756	3,348	3,034	40,321	100	80.2
	狛江	292	367	370	360	329	360	505	484	364	364	378	449	4,622		9.2
	調布市外	57	133	154	155	164	197	214	175	80	111	103	105	1,648		3.3
	不明	225	260	285	366	389	327	373	230	307	306	326	267	3,661		7.3
	合計	2,952	3,786	4,428	5,037	5,215	4,545	5,067	4,278	3,397	3,537	4,155	3,855	50,252		100

地域別各館別入館者統計（児童）

	地域＼暦月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比	
館名 つつじケ丘分館	野水・西町															
	飛田給															
	上石原															
	下石原						5	6						11	0.1	
	富士見															
	小島															
	布田(含上布田)							2						2		
	下布田											1		1		
	国領				5	4	9	6	7	1	7	20	15	72	0.3	
	染地				7	11	2		2	3	1			26	0.1	
	深大寺				1	4	7	4		4	6	4	2	32	0.1	
	佐須				1									1		
	柴崎				9	3	7	5	2	3	5	4	7	45	0.2	
	入間				14	67	53	97	100	66	62	70	57	576	2.7	
	東つつじケ丘				36	71	72	97	88	56	74	45	46	585	2.7	
	西つつじケ丘				1,219	2,883	2,583	2,591	2,212	1,674	1,700	1,713	1,687	18,262	85.3	
	若葉				9	17	10	18	14	10	18	18	11	125	0.6	
	仙川				6	1	5	4	5	3		4	1	27	0.1	
	緑ケ丘							5	3	5	4	8	10	35	0.2	
	菊の台				113	264	240	309	162	116	124	123	165	1,616	7.6	
	市内小計				1,418	3,525	2,991	3,144	2,595	1,941	1,991	2,010	2,001	21,416	100	93.2
	狛江				13	67	83	89	165	125	126	129	126	923		4.0
	調布市外					10	7	5	5	2	5	4	7	45		0.2
	不明				28	96	83	120	58	55	42	60	57	599		2.6
	合計				1,459	3,498	3,164	3,358	2,823	2,123	2,164	2,203	2,191	22,983		100

地域別各館別入館者統計（児童）

	暦月 / 地域	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
館名	野水・西町														
	飛田給	3		6	11	5	11	3	13	2	2	1	1	58	0.4
	上石原	4	4	3	3	3	10	5	2	3	4	7	8	56	0.4
	下石原	9	8	34	24	17	13	14	12	14	14	10	17	186	1.2
国	富士見				5			1	1	1	1		1	10	0.1
	小島	4	1	1	3	2	1	8	6	7	4	5	11	53	0.3
	布田(含上布田)		1	4	2	6	1	5	1	2	2	9	10	43	0.3
	下布田	24	19	17	19	21	16	21	16	9	14	13	10	199	1.2
領	国領	828	798	1,017	855	1,056	792	1,007	863	600	638	748	825	10,027	63.5
	柴地	44	66	67	77	96	57	67	54	36	50	70	50	734	4.6
分	深大寺	13	28	24	15	14	15	25	35	38	37	38	20	302	1.9
	佐須	9	13	17	39	31	36	62	39	26	28	79	29	408	2.6
	柴崎	66	87	123	82	120	108	106	80	42	87	114	96	1,111	7.0
館	入間	2	2	5	10	2	1	2	2	1		3	3	33	0.2
	東つつじケ丘	1	4	6	7	15	21	14	12	7	4	9	12	112	0.7
	西つつじケ丘	25	49	60	67	31	46	69	48	21	21	29	53	519	3.3
	若葉	7	11	12	15	1	12	10	9	8	7	11	12	115	0.7
	仙川				1	3		4	4	2	17	1	3	35	0.2
	緑ケ丘	18	3	17	13	18	23	38	28	15	12	16	22	223	1.4
	菊の台	53	109	164	179	195	125	156	111	116	112	125	128	1,573	10.0
	市内小計	1,110	1,203	1,577	1,427	1,636	1,288	1,617	1,356	950	1,054	1,288	1,311	15,797	100 90.9
	狛江	32	52	78	66	84	82	93	117	84	91	86	88	953	5.5
	調布市外	12	8	5	6	22	14	16	9	9	19	21	26	167	0.9
	不明	29	23	65	39	35	59	58	29	42	41	9	39	468	2.7
	合計	1,183	1,286	1,725	1,538	1,777	1,443	1,784	1,491	1,085	1,205	1,404	1,464	17,385	100

分類別各月別図書貸出統計

	暦月 / 区分	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
統	雑誌	192	250	280	291	289	338	362	334	342	361	463	311	3,813	5.8
	0 部門	48	55	75	58	75	70	65	74	63	67	103	156	909	1.4
	1 〃	138	182	212	157	194	210	200	221	204	196	270	176	2,360	3.7
	2 〃	219	292	291	273	378	346	334	287	283	297	319	218	3,537	5.4
	29 〃	170	178	184	163	206	145	182	124	153	136	142	165	1,948	3.0
	3 〃	295	363	405	319	421	476	481	459	394	527	544	322	4,986	7.6
計	4 〃	231	285	276	255	353	296	293	238	248	241	324	191	3,231	4.9
	5 〃	92	115	124	126	147	164	153	150	101	117	151	83	1,523	2.3
	59 〃	160	199	223	191	235	235	285	210	242	191	238	198	2,607	3.9
	6 〃	46	51	48	53	63	66	64	62	39	55	56	48	651	0.9
	7 〃	242	293	273	287	333	318	324	366	302	298	364	307	3,707	5.6
	8 〃	46	50	37	50	57	54	68	56	56	43	67	52	636	0.9
	9 〃	2,207	2,754	3,085	2,769	3,658	3,434	3,662	3,240	2,907	2,552	2,979	2,786	36,033	54.6
	小計	4,086	5,067	5,513	4,992	6,409	6,152	6,473	5,801	5,334	5,081	6,020	5,013	65,941	100 40.1
	児童書	4,623	5,522	6,650	7,969	10,651	9,478	10,650	9,509	9,219	7,777	8,685	7,894	98,627	59.9
	合計	8,709	10,589	12,163	12,961	17,060	15,630	17,123	15,310	14,553	12,858	14,705	12,906	164,568	100

各館別分類別図書貸出統計

	区分＼暦月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
館名 中央館	雑誌	124	183	205	201	183	215	221	204	195	209	261	216	2,415	4.3
	0 部門	38	47	67	43	55	53	55	66	49	62	80	149	762	1.4
	1 〃	128	170	198	148	183	189	179	197	183	176	245	156	2,152	3.9
	2 〃	206	263	269	252	349	305	300	258	252	269	277	199	3,197	5.9
	29 〃	149	157	165	151	186	126	150	104	132	109	109	151	1,689	3.1
	3 〃	271	339	371	291	367	419	416	383	324	466	482	279	4,408	8.1
	4 〃	213	264	259	237	312	273	255	207	217	210	278	171	2,902	5.3
	5 〃	90	105	105	107	129	141	120	112	82	94	126	77	1,288	2.4
	59 〃	138	177	195	166	182	177	218	163	189	143	167	150	2,065	3.8
	6 〃	41	49	45	44	52	56	53	55	37	50	45	41	568	1.1
	7 〃	225	275	254	271	295	280	279	322	266	250	323	269	3,309	6.1
	8 〃	44	47	34	43	50	46	57	44	47	36	55	45	548	1.0
	9 〃	1,978	2,376	2,747	2,400	2,892	2,690	2,937	2,530	2,291	1,963	2,2214	2,222	29,240	53.6
	小計	3,645	4,452	4,912	4,354	5,235	4,968	5,258	4,645	4,264	4,043	4,662	4,125	54,543	100 49.8
	児童書	3,218	4,039	4,824	4,939	5,387	4,729	5,307	4,869	4,819	4,074	4,449	4,408	55,062	50.2
	合計	6,865	8,491	9,736	9,293	10,622	9,697	10,545	9,514	9,085	8,117	9,111	8,533	10,9605	100

各館別分類別図書貸出統計

	区分＼暦月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
館名 国領分館	雑誌	68	67	77	84	79	89	89	80	96	98	135	55	1,017	13.7
	0 部門	10	8	8	7	4	5	5	5	6	5	16	3	80	1.1
	1 〃	10	12	12	7	2	10	11	15	12	12	16	10	131	1.8
	2 〃	13	29	29	18	25	37	26	23	30	25	32	17	297	4.0
	29 〃	21	21	21	9	18	15	26	16	16	19	15	5	200	2.7
	3 〃	24	24	24	18	30	42	49	44	58	41	40	15	419	5.7
	4 〃	18	21	21	14	29	16	26	21	24	19	38	16	259	3.5
	5 〃	2	10	10	18	16	20	30	30	18	21	19	4	207	2.8
	59 〃	22	22	22	17	28	28	42	30	27	26	29	18	317	4.3
	6 〃	5	2	2	5	7	5	7	5	2	4	11	7	63	0.8
	7 〃	17	18	18	8	28	28	24	27	21	30	23	19	262	3.5
	8 〃	2	3	3	7	7	8	11	12	9	6	10	6	84	1.1
	9 〃	229	378	378	267	398	381	363	404	365	346	401	203	4,073	55.0
	小計	441	615	615	479	671	684	709	710	684	652	785	378	7,409	100 29.1
	児童書	1,405	1,483	1,483	1,661	1,885	1,521	1,756	1,500	1,363	1,302	1,479	864	18,045	70.9
	合計	1,846	2,098	2,098	2,140	2,556	2,205	2,465	2,210	2,047	1,954	2,264	1,242	25,454	100

各館別分類別図書貸出統計

	区分＼暦月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
館名 つつじケ丘分館	雑誌				6	27	34	52	50	51	54	67	40	581	9.6
	0 部門				8	16	12	7	5	8	0	7	4	67	1.7
	1 〃				2	9	11	10	9	9	8	9	10	77	1.9
	2 〃				3	4	6	8	6	1	3	10	2	43	1.1
	29 〃				3	2	4	6	4	5	8	18	9	59	1.5
	3 〃				10	24	15	16	12	12	20	22	28	159	3.9
	4 〃				4	12	7	12	10	7	6	8	4	70	1.8
	5 〃				1	2	3	3	8	1	2	6	2	28	0.7
	59 〃				8	25	30	25	17	26	22	42	30	225	5.6
	6 〃				4	4	5	4	2	0	1	0	0	20	0.5
	7 〃				8	10	10	21	17	15	18	18	19	136	3.4
	8 〃				0	0	0	0	0	0	1	2	1	4	0.1
	9 〃				102	368	363	362	306	251	243	364	361	2,720	68.2
	小計				159	503	500	526	446	386	386	573	510	3,989	100 13.5
	児童書				1,369	3,379	3,228	3,587	3,140	3,037	2,401	2,757	2,622	25,520	86.5
	合計				1,528	3,882	3,728	4,113	3,586	3,423	2,787	3,330	3,132	29,509	100

地域別各月別登録者統計（一般）

	地域＼暦月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
統計	野水・西町														
	飛田給	37	21	22	22	31	15	9	11	8	5	5	6	192	2.3
	上石原	78	58	37	47	50	29	27	21	25	16	15	17	420	5.0
	下石原	196	90	66	55	80	54	37	26	20	36	33	21	714	8.4
	富士見	152	72	50	48	53	33	26	29	14	24	18	11	530	6.3
	小島	185	70	65	56	55	45	47	31	20	53	32	22	661	7.8
	布田(含上布田)	147	59	68	31	49	29	27	21	12	16	23	21	503	5.9
	下布田	152	58	50	45	48	32	42	27	15	19	31	19	538	6.4
	国領	375	129	131	109	137	91	76	55	33	63	65	38	1,302	15.4
	染地	251	109	93	79	88	43	43	38	30	30	48	29	881	10.4
	深大寺	116	48	54	51	64	44	36	33	18	36	31	29	560	66
	佐須	53	19	15	13	24	20	5	8	9	10	7	9	192	2.3
	柴崎	56	24	30	15	39	17	5	7	4	6	9	10	222	2.6
	入間	25	11	17	7	10	8	3	5	1	5	9	4	105	1.2
	東つつじケ丘	23	12	16	9	18	9	7	6	4	3	9	3	119	1.4
	西つつじケ丘	45	32	17	123	129	108	77	77	28	43	62	24	765	9.0
	若葉	37	18	6	11	14	8	10	9	5	8	16	8	150	1.8
	仙川	11	16	9	8	13	5	5	5	3	3	7	3	88	1.0
	緑ケ丘	33	19	10	14	23	13	13	12	4	7	7	5	160	1.9
	菊の台	71	27	15	37	49	41	27	29	13	21	31	7	368	4.3
	市内小計	2,043	892	771	780	974	644	522	450	266	384	458	286	8,470	85.0
	狛江	149	73	47	58	71	49	59	43	24	33	40	29	674	6.8
	調布市外	165	85	73	60	67	75	67	58	30	52	48	38	818	82
	不明														
	合計	2,357	1,050	891	898	1,112	767	648	551	320	469	546	353	9,962	100

地域別各館別登録者統計（一般）

	暦月 / 地域	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
館名	野水・西町														
	飛田給	37	21	22	22	30	15	7	11	8	4	5	5	187	2.9
	上石原	78	55	36	46	46	27	23	20	24	15	15	17	402	6.2
	下石原	195	85	62	55	80	46	37	25	20	32	32	21	690	10.6
	富士見	147	72	50	48	51	31	22	28	13	22	15	11	510	7.9
	小島	183	70	62	56	55	44	47	26	19	32	27	20	641	9.9
	布田(含上布田)	147	57	66	31	49	29	25	21	12	16	21	21	495	7.6
中	下布田	149	56	48	44	45	29	39	25	13	18	28	17	511	7.9
	国領	191	72	64	48	67	43	41	17	16	24	32	18	633	9.8
央	染地	228	100	85	71	80	31	33	32	23	24	44	26	777	12.0
	深大寺	113	47	51	47	62	38	32	32	15	33	25	25	520	8.0
館	佐須	43	16	13	10	22	14	2	5	6	6	5	5	147	2.3
	柴崎	35	12	17	5	20	11	2	5	2	2	9	4	124	1.9
	入間	25	10	17	2	4	7	1	4	1	3	5	4	83	1.3
	東つつじケ丘	19	10	14	2	5	6	3	4	4	1	8	1	77	1.2
	西つつじケ丘	42	28	15	8	22	24	7	21	9	13	11	1	201	3.1
	若葉	32	16	5	8	10	6	8	7	4	6	16	7	125	1.9
	仙川	11	15	8	6	11	5	5	5	3	3	7	1	80	1.2
	柳ケ丘	27	18	7	14	16	11	6	8	4	5	5	4	125	1.9
	菊の台	46	14	7	9	16	14	10	12	6	9	15	3	161	2.4
	市内小計	1,748	774	649	532	691	431	350	303	202	268	325	211	6,489	100 83.6
	狛江	131	58	41	38	50	42	41	28	18	26	23	20	516	6.6
	調布市外	165	74	71	57	59	69	62	55	29	47	45	31	764	9.8
	不明														
	合計	2,044	906	761	627	800	542	453	591	249	341	393	262	7,769	100

地域別各館別登録者統計（一般）

	暦月 / 地域	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
館名	野水・西町														
	飛田給					1		1					1	3	0.2
	上石原		3	1	1	4	2	4	1	1				17	1.3
	下石原	1	5	4			8		1		1	1		21	1.7
	富士見	5				2	2	4	1	1		3		18	1.4
国	小島	2		3			1		5	1		5	2	19	1.5
	布田(含上布田)		2	2				2				2		8	0.6
領	下布田	3	2	2	1	3	3	3	2	2	1	3	2	27	2.1
	国領	184	57	67	60	69	48	35	38	17	36	32	19	662	52.3
分	染地	23	9	8	8	8	11	10	5	7	6	4	3	102	8.2
	深大寺	3	1	3	3	2	5	2	1	1	3	6	4	34	2.7
館	佐須	10	3	2	2	2	5	3	3	3	4	2	4	43	3.4
	柴崎	21	12	13	5	16	6	3	2	2	3		6	89	7.0
	入間		1		1							1		3	0.2
	東つつじケ丘	4	2	2		2	1		2			1		14	1.1
	西つつじケ丘	3	4	2	4	1	7	7	1		2	2	2	35	2.8
	若葉	5	2	1		2		1			1		1	13	1.0
	仙川		1	1	2								2	6	0.5
	緑ケ丘	6	1	3		6	1	7	4		2		1	31	2.4
	菊の台	25	15	8	11	10	4	6	9	4	7	13	2	122	9.6
	市内小計	295	118	122	98	128	114	88	75	39	66	75	49	1,267	100 89.9
	狛江	18	15	6	9	10	4	10	8	6	1	4	2	93	6.6
	調布市外		11	2	2	8	4	4	3	1	5	3	7	50	3.5
	不明														
	合計	313	144	130	109	146	122	102	86	46	72	82	58	1,410	100

地域別各館別登録者統計（一般）

	暦月 / 地域	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比	
館名	野水・西町															
	飛田給							1			1			2	0.2	
	上石原										1			1	0.1	
	下石原										3			3	0.4	
	富士見										2			2	0.2	
	小島										1			1	0.1	
つつじケ丘分館	布田（含上布田）															
	下布田															
	調領				1	1					3	1	1	7	1.0	
	染地						1		1					2	0.2	
	深大寺				1		1	2		2				6	0.8	
	佐須				1		1							2	0.2	
	柴崎				5	3					1			9	1.3	
	入間				4	6	1	2	1		2	3		19	3.0	
	東つつじケ丘				7	11	2	4			2		2	28	4.0	
	西つつじケ丘				111	106	77	63	55	19	28	49	21	529	74.1	
	若葉				3	2	2	1	2	1	1			12	1.7	
	仙川					2								2	0.2	
	緑ケ丘					1	1					2		4	0.5	
	菊の台				17	23	13	11	8	3	5	3	2	85	12.0	
	市内小計				150	155	99	84	67	25	50	58	26	714	100	91.8
	狛江				11	11	2	8	7		6	13	7	65		8.3
	調布市外				1		2	1						4		0.5
	不明															
	合計				162	166	103	93	74	25	56	71	33	783		100

地域別各月別登録者統計（児童）

	暦月 / 地域	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比	
統計	野水・西町															
	飛田給	49	34	17	22	21	15	8	16	8	5	7	6	208	2.3	
	上石原	85	57	29	35	41	38	19	19	7	13	13	8	364	4.1	
	下石原	220	98	83	75	57	54	51	23	24	23	36	31	775	8.6	
	富士見	56	38	43	69	43	34	30	20	19	19	20	9	400	4.5	
	小島	148	76	42	57	49	29	23	23	8	16	10	15	496	5.6	
	布田（含上布田）	145	64	54	42	28	16	23	8	9	8	9	17	423	4.7	
	下布田	104	57	55	42	63	28	33	13	12	15	26	18	466	52	
	調領	358	190	131	99	96	72	76	65	32	32	58	47	1,256	14.0	
	染地	255	117	93	96	87	71	87	56	37	42	56	31	1,028	11.4	
	深大寺	48	48	41	51	46	33	34	33	28	29	25	19	435	4.8	
	佐須	22	19	19	20	23	24	14	13	7	8	5	7	181	2.0	
	柴崎	35	25	22	22	34	17	12	9	6	7	17	6	212	2.5	
	入間	17	12	9	12	16	20	24	14	4	7	22	7	164	1.8	
	東つつじケ丘	15	7	6	25	22	20	19	19	8	2	4	10	157	1.7	
	西つつじケ丘	36	21	39	539	264	224	126	77	60	46	65	38	1,555	17.3	
	若葉	18	9	8	19	9	7	11	10	2	6	14	2	115	1.3	
	仙川	6	10	1	7	1	4	2	1	5	12	11	7	67	0.7	
	緑ケ丘	31	9	26	19	15	14	15	8	17	10	18	11	193	2.1	
	菊の台	36	49	43	102	61	51	47	22	11	25	18	21	486	5.4	
	市内小計	1,684	940	761	1,353	996	771	654	449	304	325	434	310	8,981	100	86.4
	狛江	172	96	76	82	87	81	110	118	66	57	43	67	1,055		10.2
	調布市外	57	31	29	27	42	58	35	21	11	21	11	15	358		3.4
	不明															
	合計	1,913	1,067	866	1,462	1,125	910	799	588	381	403	488	392	10,394		100

地域別各館別登録者統計（児童）

	地域＼暦月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比	
館名	野水・西町															
	飛田給	48	34	11	18	20	10	8	13	8	5	7	6	188	3.5	
	上石原	83	55	29	55	38	33	19	18	7	13	12	8	350	6.6	
	下石原	216	91	71	73	56	46	48	21	17	21	36	27	723	13.4	
	富士見	56	38	43	67	43	34	30	18	19	19	20	9	396	7.4	
中	小島	145	76	42	54	47	29	21	22	8	16	7	12	479	9.0	
	布田(含上布田)	145	62	53	38	27	16	18	8	9	6	6	15	403	7.5	
央	下布田	97	53	51	41	59	27	28	10	12	13	22	17	430	8.1	
	国領	59	45	34	27	29	23	34	23	13	14	31	20	352	6.6	
館	染地	226	98	79	80	71	63	81	50	32	54	45	26	885	16.6	
	深大寺	39	41	37	50	43	32	29	25	19	28	24	17	384	7.2	
	佐須	18	15	12	9	20	14	5	6	3	6	5	3	116	2.2	
	柴崎	4	8	9	6	7	8	1	4	2	1	6	2	58	1.1	
	入間	17	12	5	2	3	4	10	6	1	5	17	4	86	1.6	
	東つつじケ丘	15	5	4	7	6	4	3	5	5		1	2	57	1.1	
	西つつじケ丘	22	14	14	9	5	14	6	6	4	8	12	1	115	2.2	
	若葉	15	6	8	14	5	4	8	7	2	4	11	1	85	1.6	
	仙川	6	10	1	5		1			4	7	10	5	49	0.9	
	緑ケ丘	21	6	21	18	14	7	8	4	13	8	12	8	140	2.6	
	菊の台	9	11	7	5	1	3	4	1	2	1		1	45	0.8	
	市内小計	1,241	680	531	558	494	372	361	247	180	209	284	184	5,341	100	83.5
	狛江	156	84	59	58	47	60	71	63	33	32	23	50	736		11.5
	調布市外	51	28	26	27	41	53	29	21	10	20	8	9	323		5.0
	不明															
	合計	1,448	792	616	643	582	485	461	331	225	261	315	243	6,400		100

地域別各館別登録者統計（児童）

	地域＼暦月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比	
館名	野水・西町															
	飛田給	1		6	4	1	5		3					20	1.1	
	上石原	2	2	12		3	5		1			1		14	0.8	
	下石原	4	7		2	1	3	2	2	7	2		4	46	2.4	
	富士見				2				2					4	0.2	
国	小島	3			3	2		2	1			3	3	17	0.9	
	布田(含上布田)		2	1	4	1		3			2	3	2	18	0.9	
領	下布田	7	4	4	1	4	1	5	3		2	3	1	35	1.9	
	国領	299	145	97	70	65	46	42	42	19	15	24	27	891	47.8	
分	染地	29	19	14	12	13	8	6	2	4	7	11	5	130	7.0	
	深大寺	9	7	4		2		5	9	7	1	1	2	46	2.4	
館	佐須	4	4	7	10	3	10	9	7	4	2		4	64	3.4	
	柴崎	31	17	13	12	26	6	10	5	4	5	11	3	143	7.7	
	入間			4	1			2						7	0.4	
	東つつじケ丘		2	2	1	1	4	1	1			1	3	16	0.9	
	西つつじケ丘	14	7	25	9	2	17	13	2	4	4	4	9	110	6.0	
	若葉	3	3				1	2	2			1	1	13	0.7	
	仙川					1	2	1		1	5		2	12	0.7	
	緑ケ丘	10	3	5	1	1	7	7	2	3	1	1	2	43	2.2	
	菊の台	27	38	36	33	22	13	13	15	6	8	10	14	235	12.6	
	市内小計	443	260	230	165	148	128	123	98	59	54	74	82	1,864	100	90.6
	狛江	16	12	17	14	14	11	18	26	12	12	7	6	165		8.0
	調布市外	6	3	3		1	2	5		1		3	5	29		1.4
	不明															
	合計	465	275	250	179	163	141	146	124	72	66	84	93	2,058		100

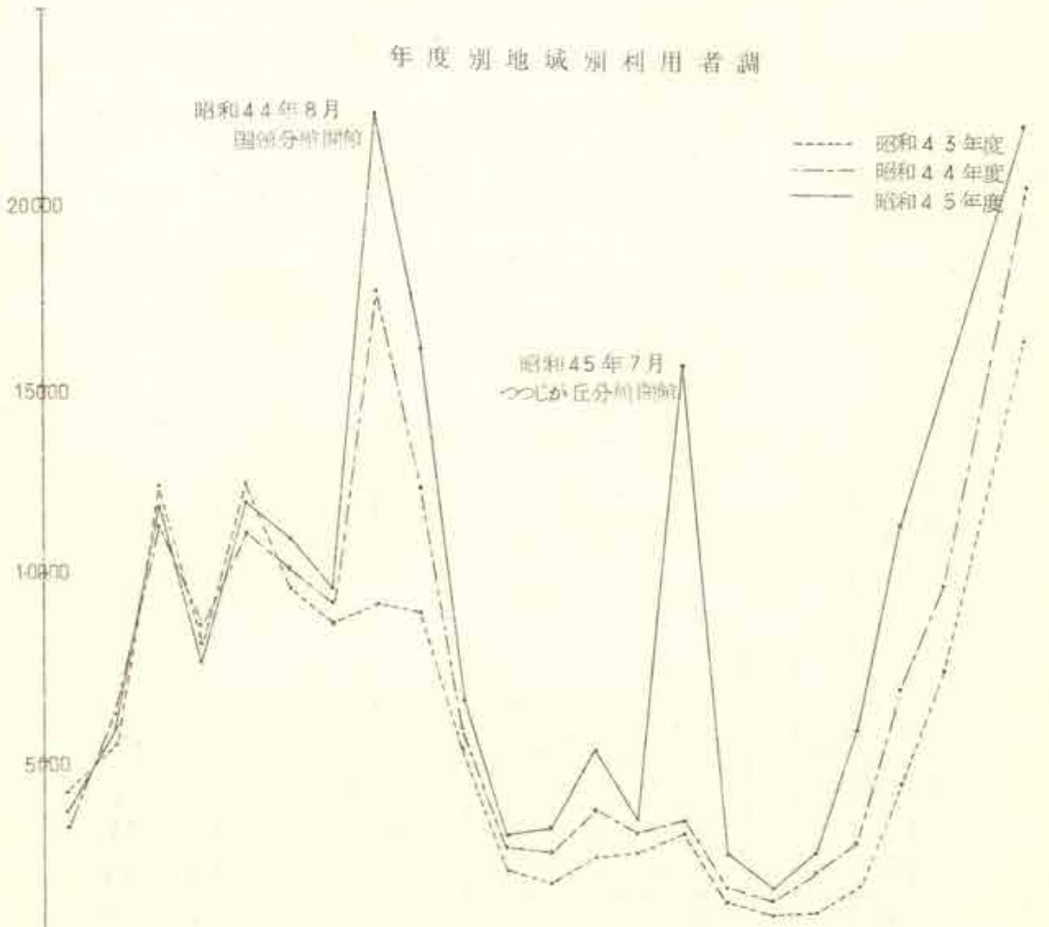
地域別各館別登録者統計（児童）

	地域＼暦月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	100分比
つつじケ丘分館	野水・西町														
	飛田給														
	上石原														
	下石原						5	1						6	0.3
	富士見														
	小島														
	布田(含上布田)							2						2	0.1
	下布田											1		1	0.1
	国領				2	2	3				3	3		13	0.7
	染地				4	3			4	1	1			13	0.7
	深大寺				1	1	1			2				5	0.3
	佐須				1									1	0.1
	柴崎				4	1	3	1			1		1	11	0.5
	入間				9	13	16	12	8	3	2	5	3	71	4.0
	東つつじケ丘				17	15	12	15	13	3	2	2	5	84	4.7
	西つつじケ丘				521	277	193	107	69	52	54	49	28	1,350	74.9
	若葉				5	4	2	1	1		2	2		17	0.9
	仙川				2		1	1	1			1		6	0.3
	緑ケ丘								2	1	1	5	1	10	0.4
	菊の台				64	38	35	30	6	3	16	8	6	206	12.0
	市内小計				630	354	271	170	104	65	62	76	44	1,776	100 91.7
	狛江				10	26	10	21	29	21	15	13	11	154	8.0
	調布市外						3	1			1		1	6	0.3
	不明														
	合計				640	380	284	192	133	86	76	89	56	1,936	100

45年度分蔵書統計

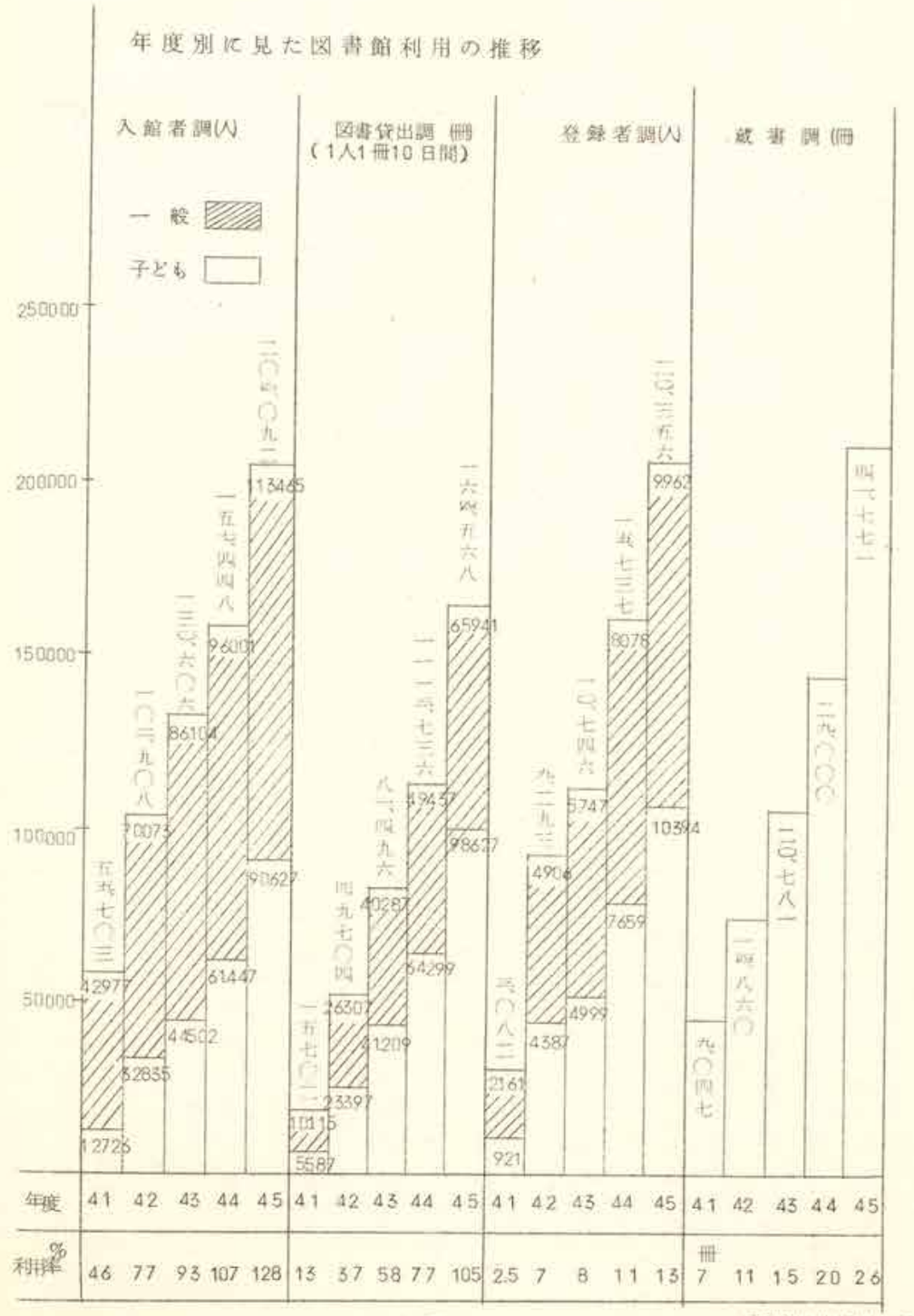
年月分	国領分館				つつじケ丘分館				中央館				団体				合計
	前月蔵書	増	減	当月蔵書	前月蔵書	増	減	当月蔵書	前月蔵書	増	減	当月蔵書	前月蔵書	増	減	当月蔵書	
総記				233				93				1,074					1,400
哲学 宗教				190				20				1,205					1,415
歴史 地理				488				102				2,471					3,061
社会 科学				614				84				3,705					4,403
自然科学				271				59				1,520					1,850
工業 家庭				304				96				1,247					1,647
産業 交通				84				15				393					492
芸術,スポーツ				258				66				1,419					1,743
語学				190				12				682					884
文学				1,985				262				8,426					11,173
小計				4,617				1,309				22,142					28,068
児童図書				3,123				2,002				5,709				2,869	13,703
合計				7,740				3,311				27,851				2,869	41,771
備考	No.		～No.		No.		～No.		No.		～No.		No.		～No.		

年度別地域別利用者調



合計	一九二六九九	一四九〇五八	一二五三七〇
不明・未記入	二一九五六	二〇二九九	一六二八七
市外	一四七八五	九六七〇	七〇〇六
柏江	一一三二八	六五五一	四三〇二
菊の台	五五〇七	二四八九	一四五二
緑が丘	一九二五	一五六二	六六〇
仙川	一一三五	七八〇	六二二
若葉	二〇九一	一三二二	一一七八
西つつじが丘	一五三三	三二一五	三〇一三
東つつじが丘	二八七七	二六九九	二二〇三
入間	五三六一	三四七	一三六一
柴崎	二九五二	二一五九	一四〇八
佐須	二八八一	二六五六	一九六五
深大寺	六四二二	五四六八	五一〇三
染地	一六一九六	一二五六三	九一一六
国領	二二六六七	一七五四八	九四二八
下布田	九三四二	六八一六	八六〇六
上布田	一〇六二〇	一〇一四六	九五九七
小島	一二〇一三	一一五八〇	一二四二七
富士見	四五一四	八〇三四	七七〇五
下石原	一一九五八	一一四三六	一二八八
上石原	五五八九	六一七〇	五五七
飛田給	三二六一	二二〇七	三〇八六

年度別に見た図書館利用の推移



市民100人に対して

昭和４５年度（４月～４６年３月）の主な行事記録

館外活動等（４月分）

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
2	木	本を読もう会	明治期の文学について解説。 自然主義の文学者（藤村・花袋・白鳥・秋声）	手島修三 （雑誌編集者）	会員	5
2	木	多摩川読書会	館外教室、　考古学・民族資料見学	図書館員	会員	9
9	木	本を読もう会	志賀直哉の短編「雨蛙」 輪読、解説と話し合い。	手島修三	会員	6
10	金	多摩川読書会	井上　清「日本女性史」から律令体制・藤原氏の専制・荘園制の発生について輪読、解説と話し合い。	図書館員	会員	6
10	金	講座　民話教室	あたらしい民話のうごきについて、 民話とは何か、原話と再話。	大川悦生 （児童文学者）	受講生	42
11	土	綴り方サークル	会員作文集「私達の文集」オ２４巻から作品の朗読と合評、添削。	菅原克己 （詩人）	会員	12
17	金	金曜読書会	マンガについて話し合い。 マンガとは何か、マンガの位置づけ。	図書館員	会員	9
18	土	綴り方サークル	会員作文集「私達の文集」オ２５巻から作品の朗読と合評、添削。メルヘンの書き方について説明。	菅原克己	会員	14

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
18	土	読書動機づけ指導	図書のはなし、国語の教科書にのった作品。40冊の本の内容紹介（考古学、歴史、民話、創作他）。	図書館員	深大寺小学校6年生滝沢学級	40
23	木	本を読もう会	志賀直哉「真鶴」輪読、解説、話し合い。近代文学とキリスト教について解説。	手島修三	会員	6
24	金	俳句サークル準備会	サークルの運営、性格、講師について5月から活動をするため話し合う。	図書館員	〃	35
24	金	長流文庫連絡会	講演「子どもの心理と行動」各親子読書会の活動報告と話し合い。	川上和美（和光学園教師）	長流文庫各読書会	40
25	土	文学散歩同好会総会	役員の選出、予算について、事業計画について話し合い。	図書館員	会員	65
25	土	講演会　三多摩の文学碑と文学散歩	文学碑、文学散歩とは何か。三多摩における文学碑の紹介。	野田宇太郎（詩人・評論家）	文学散歩同好会会員、一般市民	75
26	日	中学生読書会	伊藤左千夫「野菊の墓」輪読、解説、話し合い。今後の読書会の活動について話し合う。	図書館員	会員	10
27	月	読書動機づけ指導	図書館の仕事、利用方法、マナーについて説明。40冊の本の内容紹介と話し合い。	〃	緑ケ丘小学校四年三組中村学級	40
28	火	神代団地親子読書会	「字のない絵本」（ブルーナー）、「わがい子だーれ」（せなけいこ）読み聞かせ。母親との懇談会。	〃	会員（児童・母親）	30

館外活動等（5月分）

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
1	金	長流文庫座談会	長流文庫発足1年をふりかえって、文庫の世話人、図書館、読書推進協議会と座談。	図書館員	文庫世話人読書推進協議会	9
1	金	読書会「つたの会」	「日本女性史」（井上　清著）封建制の発達について。	〃	会員	10
7	木	子ども読書会	日本の伝説について「きんいろのきつね」（大川悦生）	〃	3、4年生	40
8	金	講座　民話教室	東北と雪国の民話について。	大川悦生（児童文学者）	受講者	43
10	日	お話しの会	お話し｛ベルのあたらしい洋服／三びきの子ぶた｝	図書館員	児童一般	12
11	月	針布読書会	「或る女」（有島武郎）　輪読、解説と話し合い。	〃	会員	11
14	木	本を読もう会	「山科の記憶」（志賀直哉）輪読、解説と話し合い。	手島修三（雑誌編集者）	〃	5
14	木	子ども読書会	創作童話　新美南吉の紹介と読み聞かせ。	図書館員	5、6年生	28
15	金	読書会「つたの会」	「日本女性史」（井上　清）封建社会の特色について。	〃	会員	9
16	土	綴り方サークル	会員作文集「私達の文集」オ26の合評、添削と解説。	菅原克己（詩人）	〃	16

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
16	土	子どもまつり	人形ボードビル 人形劇「どんどこ山の子がみなり」 他	東京学芸大学 児童文化サークル	児童一般	350
19	火	鉛筆文庫	地域文庫と読書普及活動 子どもの本について話し合い。	図書館員	会員	8
21	木	今村読書会	昭和史（岩波新書）から 天皇絶対制と教育、日本の近代化について。	〃	〃	12
〃	〃	本を読もう会	「痴情」「プラトニックラヴ」（志賀直哉） 輪読と話し合い。	〃	〃	6
〃	〃	子ども読書会	むかしばなしについて、「かにむかし」 読み聞かせ。	〃	1 2 年生	38
22	金	講演会 現代子の核心をつく	子どもと大人の現代を見る見方の相異 テレビ時代と子どもの生活	阿部 進	一般市民	250
23	土	俳句サークル	俳句の特色と俳句の世界	皆吉爽雨（俳人）	会員	41
24	日	短歌会「径」	会員歌集「径」才41集の合評、解説と話し合い。	図書館員	〃	13
〃	〃	中学生読書会	「入れ札」（菊池 寛） 輪読・解説と話し合い。	〃	〃	11
〃	〃	お話しの会	お話し { ベルのあたらしい洋服 三びきの子ぶた	〃	児童一般	20
25	月	読書会「つたの会」	「日本女性史」（井上 清） 武士階級の家族制度と女性観の変化、他	図書館員	会員	11
28	木	本を読もう会	「転生」（志賀直哉） 輪読と話し合い。	〃	〃	5
〃	〃	入間町読書会	「紀の川」（有吉佐和子） 解説と話し合い。	〃	〃	8
29	金	かけひ読書会	「入れ札」（菊池 寛） 輪読と話し合い。	〃	〃	9
〃	〃	懇談会 小学校と図書館の提携	講演「学校における読書指導」 動機づけ指導の実践報告と話し合い。	青 宏 （市教委指導主事）	市立小学校教諭 図書館員	26

館外活動等（6月分）

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
1	月	若草婦人学級	テーマ 日本人の物の考え方 テキスト「タテ社会の人間関係」（中根千枝）解説と話し合い。	図書館員	学級生	12
1	〃	富士見台小学校 PTA読書会	読書会のもち方、これからの計画について。	〃	富士見台小PTA	15
4	木	本を読もう会	次回より取上げる作品、作家の解説と話し合い。	手島修三	会員	5
4	〃	子ども読書会	斉藤隆介の作品について （八郎、花さき山、三コ）	図書館員	3 4 年生	25

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
5	金	読書動機づけ指導	読書の方法について、本の紹介。 ブック・トーク（山の上の火）	図書館員	染地小4年1組 （島崎学級）	40
5	金	記録映画を見る会	スライド、万国博覧会、月に立つ、きかんしゃやえもん 映画　京葉臨海工業地帯、鉄道。	〃	児童一般	80
6	土	綴り方サークル	会員作品文集「私達の文集」才27集から、合評と講師による解説。	菅原克己	会員	13
6	土	せせらぎ読書会	森　鷗外「高瀬舟」輪読、解説と話し合い。	図書館員	会員	8
6	土	俳句サークル	兼題「走り梅雨」、席題「若葉」による俳句と互選及び話し合い。	中村利晴 茂恵一郎（書解司人）	会員	31
6	土	上ノ原親子読書会 （長流文庫）	幻灯「きかんしゃやえもん」　ブックトーク「花さき山」 母親との懇談会	図書館員	会員 （母親・児童）	70
8	月	読書会「つたの会」	井上　清「日本女性史」 江戸時代の政治、経済、文化について発表（会員） 検地、刀狩、身分統制令について説明。	〃	会員	11
8	月	針布読書会	有島武郎「或る女」読書感想発表と解説・話し合い。	〃	会員	10
9	火	多摩川婦人読書会	高度経済成長について。 物価、GNP、公害について。	〃	〃	18

11	木	本を読もう会	志賀直哉　短編「濠ばたの住い」輪読し、話し合いをおこなった。	図書館員	会員	5
11	木	子ども読書会	動物物語について 「銀色ラッコのかみだ」他、岡野薫子作品。	図書館員	5. 6年生	19
12	金	講座 民話教室（才3回）	文学としての民話、民話の再創造について。	大川悦生	受講者	31
15	月	若草婦人学級	テーマ　日本人の物の考え方、 テキスト「タテ社会の人間関係」　解説と話し合い。	図書館員	学級生	11
15	月	タンポポ親子読書会 （長流文庫）	スライド　きかんしゃやえもん、チビクロサンボ ブックトーク、ごんぎつね　　懇談会。	〃	会員 （親子・児童）	30
16	火	つつじヶ丘分館 地区懇談会	図書館活動と利用者について、 つつじヶ丘分館の利用について、他。	〃	神代団地読書会 自治会他	28
18	木	小島町読書会	昭和史（岩波新書）から、日中戦争について解説、労働運動、思想弾圧について話し合い。	〃	会員	8
18	木	本を読もう会	魯迅「吶喊」から「自序」及び「狂人日記」を輪読、解説し、話し合いをおこなう。	手島修三	〃	7
18	木	子ども読書会	外国の民話について、ストーリーテリング、三びきの子ぶた、だんたもだんな大だんな、ブックトーク、ジャックと豆の木。	図書館員	1. 2年生	43

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
19	金	金曜読書会	阿部 進講演会の感想発表 伝記について　　7月の予定について。	図書館員	会員	9
19	金	記録映画を見る会	映画　マンモスデパート誕生 アルプスにダムができた。	〃	児童一般	80
20	土	綴り方サークル	会員作品文集「私達の文集」才28集から、合評と講師による解説。	菅原克己	会員	15
20	土	俳句サークル	兼題「打水」、「緑陰」、　席題「梅雨晴れ」「扇」 俳句、選句、講師による解説。	皆吉爽雨 (俳人 雑解王幸者)	会員	37
20	土	親と中学生の読書会	柳田国男「椿の歴史」読後感想の発表と話し合い。	図書館員	中学生・母親	17
22	月	読書会「つたの会」	井上 清「日本女性史」から、 「江戸幕府・諸藩封建制の完成」 輪読、解説	図書館員	会員	7
23	火	かけひ文庫読書会	伊藤左千夫「野菊の墓」読後感想の発表と話し合い。	〃	会員	8
23	火	富士見台小 PTA読書会	絵本について解説と話し合い。 テキスト「おにたのぼうし」「雪わたり」「三コ」	〃	会員 富士見台小PTA	28
25	木	本を読もう会	魯迅「吶喊」から、「孔乙己」を輪読、解説し、読後感想を話し合う。	手島修三	会員	8
28	日	短歌の会「径」	会員歌集「径」才42集から、22首について互選し、合評と話し合い。	図書館員	会員	13
28	日	中学生読書会	コナン・ドイル「赤毛連盟」読書感想の発表と話し合い作家の解説。	〃	〃	13
29	月	読書会「つたの会」	特殊部落、人種問題など差別について話し合いを行なう。	〃	〃	6
30	火	神代団地親子読書会 (長流文庫)	発足1年間の反省会、これからの実施計画について話し合う。	〃	〃	12

館外活動等（7月分）

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
2	木	本を読もう会	魯迅「薬」の輪読と読後感想の話し合い。	図書館員	会員	8
〃	〃	子ども読書会	カナダ民話「金の不死鳥」ブック・トーク　外国民話の紹介	〃	3.4年生	27
3	金	講演会 「幼児期の読書の意味」	幼児期の読書の意味、読書環境、 読書のあり方、子どもに与える本。	〃	多摩川住宅 青空保育の会	120
4	土	綴り方サークル	会員作品文集「私達の文集」才28集から、合評、解説と話し合い。	菅原克己	会員	15

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
4	土	俳句サークル	季題「紫陽花」「花火」「噴水」による創作、選句と話し合い。	図書館員	会員	37
7	火	多摩川婦人学級読書会	物価問題と物価対策　高度成長の経済構造	〃	〃	15
7	火	調布児童図書研究会	発足会 これからの活動方法について協議。	〃	会員 （小学校・保育園職員）	11
9	木	本を読もう会	魯迅「吶喊」から、「小さな出来事」「明日」の輪読と話し合い。	〃	会員	6
9	木	子ども読書会	A・リンドグレーンの作品を中心にして読書感想発表会 「名探偵カッレくん」ほか。	〃	5. 6年生	18
10	金	講座「民話教室」	才4回「最終会」　現代の民話・神話からみた民話。	大川悦生	受講者	40
10	金	記録映画会	超高層霞ケ関ビル　羽田モノレール	図書館員	一般児童	100
11	土	長流文庫 ふくろう読書会	ブックトーク　日本の伝説から 「ゆうれい井戸」（松谷みよ子）ほか。	〃	会員	16
12	日	お話しの会	ストーリーテリング 「おさるとぼうしうり」「おつかいにいったエバミナンダス」	〃	一般児童	15

13	月	読書会「つたの会」	井上　清「日本女性史」輪読と話し合い 近世武士と農民の家族制度、他について。	図書館員	会員	8
13	月	若草婦人学級	ルース・ベネディクト「菊と刀」読後感想の話し合いと解説。	〃	〃	10
13	月	講演会 「子どもと読書」	子どもの読書の意義、どんな本を与えるか、PTA読書会のもち方。	〃	滝坂小 3年生PTA	20
14	火	〃	親子読書の意義・読書のあり方 子どもの本のえらび方。	〃	八雲台小PTA	8
16	木	小島町読書会	遠山茂樹他「昭和史」読後感想の発表、解説、話し合い。	〃	会員	11
16	木	本を読もう会	魯迅「吶喊」から「藥の話」輪読と話し合い、人と作品について解説。	手島修三	〃	7
16	木	子ども読書会	幻灯「海のおばけオーリー」 ストーリーテリング「ものしり博士」（グリム）	図書館員	1. 2年生	21
17	金	富士見台小 PTA読書会	伝説と民話について解説と話し合い、各作品を読んで親と子の感想のちがいなど。	〃	会員	20
18	土	長流文庫青葉読書会	夏休みの読書計画　文庫の利用状況について。	〃	会員（母親）	10
18	土	綴り方サークル	会員作品文集「私達の文集」才29集から合評、添削と解説。	菅原克己	会員	16

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
18	土	親と子の中学生読書会	O・ヘンリー「最後の一葉」読後感想の発表と話し合い。	図書館員	会員	12
19	日	長流文庫 タンポポ文庫のつどい	幻灯とお話しの会 海のおばけオーリー、ほか。	〃	会員 （父兄・児童）	59
23	木	本を読もう会	魯迅「吶喊」から「故郷」を輪読、作品解説と感想の話し合い。	手島修三	会員	8
23	木	かけひ読書会	森鷗外「高瀬舟」輪読と解説、合評会をおこなう。	図書館員	会員	10
23	木	入間町読書会	有吉佐和子「紀の川」の解説と読後感想を話し合い、合評会をおこなう。	〃	〃	8
24	金	金曜読書会	「川と大地の歌」「たたかいの歌」「いのちの歌」の作者を囲んで読書感想の話し合い。	山崎馨	〃	6
26	日	短歌会「径」	会員歌集「径」才43集の選首、合評会、講師から解説、添削を受ける。	大橋克己（コミュニケーション研究所長）	〃	19
26	日	中学生読書会	川端康成「伊豆の踊り子」輪読と感想の発表と話し合い。	図書館員	〃	12
26	日	お話しの会	ストーリーテリング 「おさるとぼうしうり」「とこちゃんはどこ」	〃	一般児童	12
30	木	本を読もう会	魯迅「吶喊」から「風波」を輪読し、読後感想を話し合う。	〃	会員	5

館外活動等（8月分）

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
1	土	綴り方サークル	会員作品文集「私流の文集」才29から合評、解説と話し合い。	菅原克己（詩人）	会員	13
6	木	子ども読書会	科学読みものの紹介と、お話し合い。 ストリーテリング「つきへいったら」	図書館員	3・4年生	13
8	土	俳句サークル	季題「夕立」「西瓜」による創作、選句と話し合い。	〃	会員	37
13	木	子ども読書会	「わたしたちの太陽系」を中心にして感想発表会。	〃	5・6年生	9
20	木	〃	「川」について話し合い。ストーリーテング「マーシャとくま」「ふしぎなたいこ」	〃	1・2年生	17
22	土	俳句サークル	季題「夜店」「西瓜」による創作、選句と話し合い。	〃	会員	35
23	日	中学生読書会	モーパッサン「紐」輪読と感想の発表と話し合い。	〃	〃	7
23	日	短歌会「径」	会員歌集「径」才44集の選句、合評会。	〃	〃	45
29	土	ちびっ子文庫子ども会	会員による、合唱、紙芝居、リズムあそび、劇。	〃	会員（母子）	47
31	月	青葉読書会	幻灯「海のおばけオーリー」 夏休みおたのしみ会（クイズ・合唱）	〃	〃 〃	20

館外活動等（９月分）

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
3	木	子ども読書会	「ながいながいペンギンの話し」のあらすじの紹介とペンギンについて話し合った。	図書館員	3・4年生	26
7	月	緑ケ丘わかくさ学級読書会	福沢諭吉の「福翁自伝」の輪読、解説、話し合い。	〃	会員	37
10	木	子ども読書会	「だれもしらない小さな国」	〃	5・6年生	17
12	土	俳句サークル	「鈴虫」「秋雨」の季題として各自が創作、話し合い。	〃	会員	37
14	月	染地女性史	町人の生活と、近世の女性の生活について話し合い。	〃	〃	8
17	木	子ども読書会	ストーリーテリング「いやいやえん」「かえるのいえさがし」	〃	1・2年生	24
18	金	金曜読書会	松谷みよ子「二人のイーダ　」をとりあげて合評を行なう	〃	母親	12
22	火	富士見台小P.T.A読書会	「ふらいぱんぢいさん」「大きい1年生と小さな2年生」「焼けあとの白鳥」の作品をとりあげて読書感を述べ合った。	〃	PTA読書会員	15
24	木	神代団地親子読書会	ペープサートを楽しんで、人形による「三びきのこぶた」を熱演した。	〃		

24	木	富士見台婦人学級	長崎源之介、古田足日、神沢利子の作品研究。	図書館員		
26	土	俳句サークル	句会形式にして各自五句選句して評し合った。	〃	会員	35
27	日	短歌サークル	投稿の歌を各自五首ずつ選び、各自の歌を批評し合った。	〃	〃	23
27	日	中学生読書会	「二十四の瞳」について輪読し、感想を述べ合った。	〃	〃	6
28	月	かけひ読書会	森　鷗外作「ちいさんばあさん」を輪読したのち、老夫婦の愛情の美しさについて話し合った。	〃	〃	8

館外活動等（１０月分）

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
1	木	子ども読書会（3.4年）	「小さなスプーンおばさん」ブリヨイセン作を紹介。	図書館職員	会員	25
3	土	つづり方教室	各自創作品の発表と批評。	菅原克二氏	〃	13
毎週	木	本を読もう会	魯迅の「阿Q正伝」の輪読と作品内容解説と話し合い。	手島修三氏	〃	25
8	木	子ども読書会（5.6年）	「アーサーランサム全集12巻」本の紹介と6年生の読書発表。	図書館職員	〃	14
11	日	おはなし会	「マリーちゃんとひつじ」「白いマス」読みきかせ。	〃	児童	20

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
12	月	日本女性史	井上 清著「日本女性史」第7章を輪読 明治維新と女性について話し合い。	図書館職員	会員	19
15	木	子ども読書会（1・2年）	「エルマーのぼうけん」 本の紹介と登場人物のはなしあい。	〃	〃	21
16	金	金曜読書会	伝記（野口英世）について。	〃	〃	17
16	金	北ノ台小PTA講演会	子どもの読書について。	〃	PTA会員	50
17	土	俳句サークル	兼題…鶏頭、霧 席題…紅葉、鵙、秋袷 通して5句を創作、投句後選句し、創作上の注意を話し合う。	〃	会員	37
17	土	つづり方教室	各自創作品を発表と批評。	菅原克二氏	〃	12
18	日	中学生読書会	魯迅の「阿Q正伝」を読み、魯迅はこの作品を通して何を伝えたかを話し合う。	図書館職員	〃	13
24	土	俳句サークル	兼題…コスモス、秋祭 席題…秋雲、夜業 通して5句を創作、互選披講、講師からやとかなの使い方、意義の話。	皆吉爽雨氏	〃	35
25	日	短歌会	歌集 47集「径」の歌を互選し批評。	片山真澄氏、職員	〃	17
25	日	おはなし会	「かにむかし」「ちいちゃい ちいちゃい」のおはなし。	図書館職員	児童	21

26	月	日本女性史	井上 清著「日本女性史」第8章輪読 第7章の百姓の一揆、反抗の歴史を勉強。	図書館職員	会員	15
27	火	富士見台小PTA読書会	外国児童文学について。	〃	PTA会員	15
27	火	かけひ読書会	サトウハチロー作 詩集「おかあさん」の鑑賞。	〃	会員	8
27	火	調布児童図書研究会	中国の民話「王様と9人のきょうだい」 「シナの5人きょうだい」の2作品の比較読みについて。	〃	研究会員	6
6 8 23	火 木 金	読書動機づけ指導	第3小学校 2年1組2組 4年1組2組 3年1組3組 6学級	〃		
12	月	〃	染地小学校 3年1組 1学級	〃		
15	木	〃	滝坂小学校 2年 1学級	〃		
16	金	〃	深大寺小学校 6年1組 1学級	〃		
19	月	〃	八雲台小学校 3年3組 1学級	〃		
20	火	〃	石原小学校 3年1組 1学級	〃		

館外活動 （11月分）

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
2	月	若草婦人学級読書会	岩波新書"文学入門" 桑原武夫を取りあげ、解説と話し合い。	図書館員	婦人学級会員	10
6	金	針布読書会	川端康成の"雪国" 川端文学の解説と輪読による鑑賞。	〃	針布地区婦人	8
6	金	おはなしキャラバン	青空保育の子どもたち対象に、リズム遊びと音響効果を生かした幻灯による本の紹介。	博報堂児童教育振興会指導員 石竹光江氏 職員	青空保育会員	350
10	火	多摩川婦人学級読書会	租税論および時事問題の解説と話し合い。	図書館員	婦人学級グループ	12
9	月	今村宅読書会	昭和史のうち、第二次大戦と敗戦の頃をとりあげ、話し合いと討論。	〃	会員	10
12	木	子ども読書会(5.6年)	創作詩の発表と話し合い。	職員	〃	13
13	金	日本語講座(第1回)	ことばの働きについて 認証、伝達、思考、創造を中心に説明。	国語研究所長 岩淵 悦太郎氏	一般	100
14	土	俳句サークル	兼題…行秋、水鳥 席題…茶の花 小春日 } 5句を創作、互選、披講、表現方法を話し合う。	職員	会員	35
14	土	名画鑑賞会	"怒りの葡萄" 2回上映	〃	一般	750
6	金	子ども会	①スライド"うみのおばけオーリー" ②ゲームと読書クイズ ③人形げき"ものいうなべ" ④お話"いたずらこうさぎ"	〃	児童	75

8	日	おはなし会	"ふしぎなたまご""おやすみなさいフランシス"のおはなし	職員	幼児	8
9	月	日本女性史	"女性解放運動のはじまり"の9章を輪読と自由民権運動と明治の思想について討論。	〃	会員	7
15	金	子ども会	①人形げき"ものいうなべ" ⑤スライド"ぶちちゃん" ②ゲームと読書クイズ ④おはなし"いたずらこうさぎ"	〃	児童	80
15	日	中学生読書会	森 鷗外"高瀬舟"を輪読し、読後感、問題点を討論。	〃	会員	19
16	月	講演会	"画家がとらえた西ドイツの生活"	前島隆宇氏	一般	42
16	月	若草婦人学級読書会	桑原武夫"文学入門"について解説と話し合い。	館長	会員	12
13	金	子ども読書会(3.4年)	大石 真"チョコレート戦争" 筋書、登場人物を発表後になしあい。	職員	〃	25
19	木	〃 (1.2年)	ビアンキの動物記より "くちば""きつねとねずみ"読み聞かせ。	〃	〃	25
19	木	PTA講演会	"小学校の文学教育"	文芸評論家 西郷竹彦氏	若葉小PTA	115
20	金	金曜読書会	特殊児童を扱った"はだかの天使"(赤木由子作)の合評と感想を出して話し合い。	職員	一般主婦	14
21	土	時局講演会	"人間と文明"情報社会への進展に伴う諸問題について。	朝日新聞論説委員 岸田純之助氏	一般	70

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
21	土	PTA講演会	"子どもと読書"	無着成恭氏	八雲台小PTA	120
22	日	おはなし会	ストーリーテリング "うちの中のウシ" 読みきかせ "ももの木を助けた女の子"	職員	児童（中学生も含む）	22
22	日	径短歌会	会員の短歌の互選と批評後、下村湖人の短歌と"次郎物語"の湖人の人間性の話。	下村湖人の長女（作家）明石晴代氏	会員	23
24	火	長流文庫北ノ台地区 タンポポ文庫懇談会	マンガの意図するものと読書について。	職員	〃	16
24	火	富士見台小 PTA読書会	"日本のわらべうた" "てんぷらぴりぴり" "せみを鳴かせて" わらべうたのうつりかわりと詩心、子どもと詩等を話し合う。	〃	〃	15
24	火	調布児童図書研究会	神沢利子作 "くまの子ウーフ" 低学年を対象の学級の実践報告。	〃	〃	18
9	月	染地小3年2組 読書動機づけ		〃	児童	43
17 20 21		才3小 3年、4年、 2年 読書動機づけ		〃	〃	252
26	木	富士見台小 3年2組 読書動機づけ		〃	〃	42

27	金	日本語講座（才2回）	「ことば」のはたらきを説明。	国立国語研究所長 岩淵悦太郎氏	一般	102
28	土	俳句サークル	兼題…笹鳴、みかん 席題…残菊、冬支度 通して5句投句、選後批評。	皆吉爽雨氏	会員	53
30	月	日本女性史	三島事件について話し合い。	職員	〃	7
7 21	土	綾り方教室	創作と輪読、その批評。	菅原克己氏	〃	19
毎週 木曜日		本を読もう会	魯迅著「宮芝居」輪読と研究。	手嶋修氏	〃	25
18	水	文学散歩	鎌倉近郊 長谷寺、高徳院、瑞泉寺、覚園寺など。	鎌倉図書館長 小島寅雄氏	〃	120

館外活動（12月分）

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
1	火	読書動機づけ	北ノ台小 1年 1学級	図書館職員	児童	93
3	木	今村読書会	昭和史の最後の話し合いと、三島事件などと現代社会の情況の分析。	〃	主婦	10
4	金	読書動機づけ	緑ヶ丘小 3年 1学級	職員	児童	42

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
4	金	緑ケ丘小 PTA読書会	中学年対象の本の紹介、人気の高い図書の紹介、良書の選定の基準などについて話し合い。	職員	母親	16
8	火	読書動機づけ	築地小 3年3組 1学級	〃	児童	41
10	木	子ども読書会(5.6年)	前回に続いて会員の創作、詩の鑑賞と話し合い。	〃	会員児童	12
10 12 14 15		読書動機づけ	富士見台小 1年 1学級	〃	児童	163
11	金	日本語講座(才3回)	日本語の特長と外国語との比較の講義。	国立国語研究所 野元菊雄氏	一般	105
12	土	俳句サークル	兼題、花八ツ手、枯木、凍蝶と新年にちなんだ句を5句投句、選句後の披講と批評。	職員	会員	43
3	木	子ども読書会(3.4年)	リンドグレーンの作品「長ぐつ下のピッピ」を中心に紹介と話し合い。	〃	会員児童	20
4	金	かけひ読書会	子どもの絵本「子うさぎましろのはなし」「かたあしだちょうのエルフ」「とんまなおじさん」の話し合い。	〃	会員	7
5 19	土	綴り方教室	全員の作品の朗読と批評と反省会。	菅原克己氏	〃	18
14	月	日本女性史	テキスト「日本女性史才10章」資本主義の発展と女性恋愛観や生き方から現代の女性のものの考え方、行動などを分析して話し合い。	職員	〃	16
17	木	子ども読書会(1.2年)	いぬいとみこ作「北極のムーシカミーシカ」の才1部を読みきかせと本の紹介。	職員	児童会員	27
17	木	読書動機づけ	第3小 5年2組 1学級	〃	児童	42
18	金	国領分館クリスマス会	① 読書クイズ ② ゲームと歌(動作のついた歌) ③ 人形げき(まほろのクリスマスツリー)	〃	〃	100
24	木	中学生読書会	日本近代文学館と高見 順、漱石展と施設を見学し、今後の近代文学をより深めるバス車内での話し合い。	〃	会員	21
25	金	日本語講座(才4回)	前回の続きの日本語と外国語の比較 言語の系列、発音の比較と日本人の言語生活の講義。	国立国語研究所 野元菊雄氏	一般	97
25	金	下石原地区 学童保育読書動機づけ指導	本の紹介と読みきかせ。	職員	児童	30
毎週木曜日		本読もう会	魯迅の小作品の輪読と研究。	手嶋 修氏	会員	37

館外活動 (1月分)

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
5	金	読書動機づけ	"ひとつの花" の読みきかせ	職員	児童	
5	金	子ども読書会(3.4年)	文集のまとめ。　おはなし大会	〃	会員	25
11	木	読書動機づけ	スライド "きかんしゃ　やえもん" おはなし…お正月の行事について。 "ふしぎなたいこ" の紹介。	〃	児童	40
16	土	〃	"八郎"　"三コ" の紹介。	〃	〃	40
16	土	俳句サークル	兼題…水仙、寒雀、餅、通して3句を投句、互選後、披講。　懇談会。	〃	会員	38
18	月	わかくさ婦人学級	島崎藤村　「家」	館長	〃	11
19	火	青葉子ども会	3月の行事について。	職員	〃	10
19	火	読書動機づけ	"スーホの白い馬"　"八郎" の紹介。	〃	児童	40
21	木	〃	"スーホの白い馬"　"八郎" の紹介。	〃	〃	42
21	木	子ども読書会(5.6年)	"ドリトル先生物語" のシリーズの本の紹介。	〃	会員	14
22	金	金曜読書会	新年度計画及び抱負について。	〃	〃	14

22	金	みどりケ丘小 PTA講演会	子どもの読書について。	館長	PTA会員	40
23	土	俳句サークル	兼題…初詣、氷 席題…寒肥、春を待つ } 通して五句を投句、互選後、披講。	皆吉爽雨氏	会員	42
24	日	中学生読書会	"夕鶴" を読み、話し合う。	職員	〃	7
24	日	短歌サークル	かるた会。　短歌集 "径" に掲載された短歌について批評。	片山貞美氏	〃	32
25	月	読書動機づけ	"湯川秀樹" の紹介。	職員	児童	
25	月	〃	"湯川秀樹" の紹介。 "八郎" の紹介。	〃	〃	
25	月	わかくさ婦人学級	島崎藤村 "家" をめぐり、日本の家族制度について話し合い。	館長	会員	8
25	月	「つた」の会	井上　清　"日本女性史" 10～11章の輪読、討論。	職員	〃	5
26	火	児童図書研究会	松谷みよ子作 "コッペパンはきつね色" について教室での反応を紹介し話し合う。　新刊の本紹介。	〃	〃	7
26	火	読書動機づけ	25冊の本の紹介。	〃	児童	
28	木	読書動機づけ 学級PTA読書会	動機づけ指導。　読書の基本について。	館長	〃	

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
28	木	子ども読書会（1.2年）	アリソン・アトリー著〝チム・ラビットのぼうけん〟より2編 読みきかせ。〝サム・ビッグ・シリーズ〟の紹介。	職員	会員	22
29	金	富士見台PTA読書会	ノンフィクションについて〝雪の日〟〝古代文字のひみつ〟〝埋もれた日本〟の3作品について、話し合う。	〃	児童	15
29	金	かけひ読書会	有吉佐和子 〝華岡青州の妻〟	〃	会員	6
29	金	日本語講座	日本語の表記について、問題点と現状の解説。	斉賀秀夫氏	市民	120
30	土	講演会	「マスコミと読書」について。	館長	婦人グループ	30

館外活動 （2月分）

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
2	火	多摩川婦人学級	「46年度 国家予算」の内容について解説・討議。	館員	会員	12
2	火	読書の意義と子どものしつけ	読書の意義とこどもに対する読書指導について。	〃	PTA	40
7	日	神代団地父子読書会	親子読書についての話。 本の紹介。	館長・職員	市民	14
8	月	読書動機づけ	〝鬼さんはどこに〟のおはなし。読書クイズ 本の紹介。	職員	児童	
8	月	PTA読書会のもち方とPTA文庫の利用	PTA文庫の利用のし方。読書のあり方について。	館長	PTA文化部員	20
8	月	染地読書会 つたの会	〝日本女性史〟才11章より輪読、討論。	職員	会員	8
12	金	子ども読書会（5.6年）	反省と会員1人1人の読書発表。	〃	〃	18
13	土	俳句サークル	兼題 野焼く、雪解、早梅を各自5句投句し、互選、披講、批評。	〃	〃	38
18	木	PTA講演会	〝マスコミと子ども〟 こどもの雑誌を中心に、マスコミ文化と現代のこどもたちとのかかわりあいについて。	北川幸比古氏	野川小PTA	50
19	金	子ども読書会（1.2年）	鬼に関するおはなしの紹介。〝おにたのぼうし〟〝おにさんはどこに〟幻灯 〝じてんしゃにのるひとまねこざる〟	職員	会員	
19	金	金曜読書会	有吉佐和子 〝地唄〟について、読後感をのべあう。	〃	〃	15
20	土	長流文庫	ロシア民話〝大きなかぶ〟に登場する人形の製作。	劇団カラバス 大井数雄氏	文庫各読書会	30
22	月	読書動機づけ	本の紹介 〝八郎〟のよみきかせ。〝鬼さんはどこに〟 おはなし。	職員	児童	
22	月	染地読書会「つた」の会	〝日本女性史〟のまとめ。	〃	会員	7
23	火	富士見台PTA読書会	子どもにとって科学の本とは何か。現在の日本の教科書の傾向、科学絵本などについて話し合う。	〃	〃	12

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
26	金	PTA読書会	「民話について」の本の比較などを話し合う。〝桃太郎〟〝さるかにばなし〟	職員	PTA4年生	23
25 1 26		文学散歩 伊豆天城越え伊東	沼津ー若山牧水、井上靖。 修善寺ー岡本綺堂、夏目漱石。 湯ケ島ー川端康成、木下杢太郎。 天城峠ー井上靖。 湯ケ野ー川端康成。 下田、石廊崎ー漱石、藤村。 伊東ー木下杢太郎、北原白秋、尾崎士郎などの文学について、各地説明。	野田宇太郎氏	会員	60
27	土	俳句サークル	兼題…東風、猫の恋、三句 通して五句、互選、披講 席題…柿の芽、春めく、二句 後、指導を受ける。	皆吉爽雨氏	〃	37
28	日	短歌サークル	歌集〝径〟オ49集の批評と話し合い。	片山貞美氏	〃	27
28	日	中学生読書会	映画「こんな人に僕はなりたい」「わかもの」を鑑賞し、話し合う。	職員	中学生会員	13

館外活動（3月分）

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者 対象	参加者 人員
1	月	神代団地 読書会子ども会	紙芝居（こども） 人形劇（母親グループ）	職員	団地読書会 母子	20
1	月	俳句百草園○吟行会	各自句を五句投句し、互選、披講、批評後懇談し合った。	〃	会員	37

2	火	読書動機づけ	〝マリーちゃんとひつじ〟〝王さまと九人のきょうだい〟紙芝居。 〝鬼さんはどこに〟おはなし。 絵本についてのはなし。	職員	児童	
7	日	神代団地父親読書会	〝マリーちゃんとひつじ〟紙芝居。 〝じてんしゃにのるひとまねこざる〟スライド。 折り紙をつくる。	〃	父親・子ども 母親	15
8	月	「つた」の会	会員の一人が転勤のため、送別会。	〃	会員	
8	月	染地ちびっ子文庫 読書会	1部（幼児対象） 2部（3.4年生対象）	〃	母子	30
8	月	読書動機づけ	読書クイズ。 紙芝居〝王さまと九人のきょうだい〟	〃	児童	
8	月	短歌百草園○吟行会	短歌、創作し、投歌後互選、批評。	片山貞美氏	会員	25
12	金	講演会 〝はなしことばの世界〟	「民話の世界」木下氏 朗読 山本氏〝狼石〟〝あとかくしの雪〟	木下順二氏 山本安英氏	市民	300
13	土	俳句サークル	兼題 春めく、畑打、芽吹く、を五句投句、互選、披講批評。	職員	会員	37
19	金	金曜読書会	宮沢賢治〝鹿おどり〟をテーマに語り合う。	〃	〃	7
22	月	「つた」の会	中根千枝〝タテ社会の人間関係〟オ2章4節まで輪読後、話し合い。	〃	〃	7

日	曜	行事名	内容	講師・担当者	参加者	
					対象	人員
27	土	俳句サークル	兼題、蝿、チューリップ、桜餅 5句投句、互選、披講。	職員	会員	35
28	日	中学生読書会	島崎藤村 "破戒" を読み、話し合う。	〃	〃	17
28	日	短歌会	各自の短歌を批評、互選する。	片山貞美氏	〃	27